



案山子

2020 夏



新潟大学文芸部





# 目次

目次 . . . . .	1
地に浮く蕾 . . . . .	1
編みかけの . . . . .	10
いと、わろし . . . . .	12
糸 . . . . .	20
全て夏の夢 . . . . .	21
忌ミ島 . . . . .	35
夏の日影から . . . . .	49
<b>H-75+H-84</b> . . . . .	58
雑句 . . . . .	70
旅と風 . . . . .	71
君が為の贈り物 . . . . .	74
ヒトをヨクするコトのハナシ . . . . .	93
エーデルワイスの乾燥花 . . . . .	104
奥付 . . . . .	118



## 目次

### ◆お題作品『いと』

- ・地に浮く蕾 祈空埜
- ・編みかけの 雪兎
- ・いと、わろし 如月深琴
- ・糸 如月深琴

### ◆通常作品

- ・すべて夏の夢 やわらか乳業
- ・忌ミ島 西条肇
- ・夏の日影から 笠原ざわ
- ・H-75+H-84 香月日向
- ・雑句 ひなづきかおり
- ・旅と風 今回も佐藤
- ・君が為の贈り物 佐久間佳雪
- ・ヒトをヨクするコトのハナシ 大島治輔
- ・エーデルワイスの乾燥花 小原優一郎

## 地に浮く蕾

地に浮く蕾

「なあなあ。国語の授業で蜘蛛の糸ってやつ、読んだか？」  
「読んだよ。すごかったよね」  
「やっぱりそうだったよな！　すごかったよな！　なんて言うか、こう、なんて言うんだらうな、凄い、今までと違う感じ？」  
「うんうん、わかるよ」  
「俺さ、あんなの書いてみてえな」  
「一君に書けるの？　作文だってあんな調子なのに」  
「うるさいなあ。書けるよ！　きっと！　練習すれば！」

※

背の低い筆筒の上、桜を乗せる切手がついた封筒がカーテンから漏れた朝日を悠然と受けていた。浅い眠りから覚め、ベッドに腰を掛け、朦朧とする目で光の先を眺めている。耳に入る時計の音に気づき、鳴るはずだった目覚ましを止めた。

少しの痛みを孕んだ重い頭を足で支え、ゆっくりと立ち上がる。丁寧に封が切られた封筒を手に取り、傾けることで姿を現した中身は、俺の作品が最終選考に残ったため、結果を発表するためのセレモニーに招待するという旨を伝えていた。

この文字列は見る度にここまでの軌跡を想起させる。最初に作品を送ったのは小学生の頃だろうか。稚拙の文字がよく似合う作品を自信満々にポストに入れたことを覚えている。

記憶を封筒にしまい、元あった場所に置き直すと、準備を始めようとカーテンを勢いよく開け、キッチンに向かった。寝坊を想定して買っておいたパンの袋を開け、頬張りながらコーヒーのドリップを待つ。その間、口以外にも足や指はしきりに動いていた。思うように喉を通らない最後の一欠片に苦戦していると、黒い露は落ち切り、泉の水面は平静を取り戻していた。熱いままに飲み干して蟠りを流し込む。

洗面に行き、鏡に映った緊張を洗い流すように顔を洗い、歯ブラシを口に咥えた。離れる際、水滴を纏った鏡に映る表情が変わっていないことに苛立ちを感じ、それを振り払ってベッドに戻り、座った。おまじないを込めて勢いよく飲んだコーヒーは、緊張を流し込むことはしてくれなかった。

手とともに動き続ける足、いつもより速く磨く手、どこにでも緊張はこびりついていた。平静を思い出そうとする俺を無視し、目は待ち合わせ時刻からほど遠い数字を指す時計を何度も見るのに、手足は焦ることをやめてはくれない。

再び洗面へ赴き、一つ少ないうがいの後、鏡と目を見合わせた深呼吸も効果を持さなかった。

居間に戻り、壁にかかった新品の礼服をとった。着た部位から引き締まる感覚はあるのに、手先はおどけるのをやめず、ボタンをかけ間違える始末だ。今朝一番時間がかかった動作を終え、姿見で様子を確認する。セットなどしていない髪を不満げに撫でた後、カバンを手に取り、封筒を大切に入れ、家を出た。

階段を下りる速足はおぼつかず、最後の一段を踏み外し、転がるように階段近くの車

に乗った。三回ほど挿し損ねたキーをようやく回し、エンジンがつくのとはほぼ同時にアクセルを踏む。多少勢いよく発射した古い軽は、軌道に乗るとすぐに出端を挫かれた。

青信号を待つ運転手の指はウインカーとともに強くハンドルを叩いている。しかし、その目は信号機でなく、右側の窓の外、緩やかに隆起した土手の上に揺れている葉桜を映していた。桜の切手が貼られた封筒から約一か月、この招待状を目指すこと十数年。落ち着けるわけがないのだ。

青に変わった信号を合図にペダルを強く踏む足を許し、少し急ぎ気味にハンドルを切った。

携帯の画面には、待ち合わせ時刻の一時半前の時刻が表示されている。

自由を得たいと喚きだした体に応じ、車を出て、待ち合わせ場所である、会館前の広場へ向かった。

すぐに到達した約束の場所で、深く息を吸う。新緑が生んだ空気ですえも心を落ち着けることはできなかった。幾度とやってきたバスから降りた人々は、目的の会館の入口に吸い込まれていく。会館の捕食量が顕著に多くなってきた頃、明成は現れた。

体の苛立ちが収束し始め、苦しくなってきた胸に目を向けないよう、人の流れを凝視する俺の隣に立ち、彼もまた会館に向き直って言った。

「一君。遂にだね」

明成の言葉は、緊張や不安に隠れていた一縷の望みを束ねた。第一歩として設定した目標である、大賞という文字も色濃くなる。希望を掴むように拳を強く握り直し、会館の口へと歩みを進めた。

会場内に入り、席を探す。席につくと、胸はいっぱいになっており、苦しさを増していた。膝に肘をつき、足元を見る。手は必死の表情が見て取れるほどに強く組まれている。そこに握られた希望はせめて呼ばれたいというものだろうか。

徐々に増していく雑踏の音を聞きながら、一心不乱に体を宥める。一層強く組まれた指の隙間から汗が滴りそうになった頃、会場が暗くなり、開会の声が響く。胸の膨らみは最高潮に達し、破裂しそうになった。

心苦しい時間とは裏腹に、その瞬間は呆気なく訪れた。

「では早速、賞の方を発表したいと思います。優秀賞、『強盗の葛藤』、糸田一」

膨らんだ胸が締め付けられる感覚とともに、息苦しさが霧散した。

途端に包まれた光の中で足に力をかけ、少し震えを抱えながら壇上へ向かった。

賞状を受け取ると、淡い期待は消え失せ、自分はやはりこんなものか、といういつもの自分が戻ってきていた。

「続いて、もう一名の発表です。優秀賞、『報復』、布川麗」

光が当たるとともにスッと立ち上がったのは、凜々しい顔をした女性だった。顔に表情は乗っておらず、さも当然かのように栄光の光を受けて歩く。まっすぐこちらを見据えている彼女の瞳は、目を合わせると刺されてしまいそうなほど鋭利に感じ、俺は反射

的に目を逸らす。彼女は感情の見えない動作で賞状を受け取り、定位置に静止した。

「最後に、大賞の発表です。大賞、『落ちる』、小間柑大」

どこか違う光が当たったのは古風な青年だった。

濃く見える光は、まさに地獄巡りからの救済を表す、赤い天の裂け目から降り注ぐ日矢だった。中心には透き通るような銀色の糸が見える。神の救済、天界への招待を祝福するように鳴る天使のラッパが耳に響いてくるような壮観であった。

糸を手繰り寄せるように立ち上がった彼は、その全身に栄光を浴しながら壇上へ上がる。賞状などを受け取った彼は、拍手からの歓迎に満面の笑みで答えた。

やはり俺の目標はここだ。一段と目標の彩りが濃くなるのを感じた。

会場は宴会室に移り、人々は思い思いに談笑を繰り広げている。特に大きな人だかりの中心にいるのは、鋭く美しい女性と古風な青年だった。

俺の傍にも人は来るが、二人には及ばない。人と話すのがあまり得意ではない俺にとっては好都合であったが。

しばらくしていると、また一人俺のもとへ流れ着いた人がいた。開口を迫るその人は意外な人物だった。

「糸田さん……ですか？」

いつの間にあの群衆から抜け出てきたのか、彼の古風な青年が目前に立って笑顔をこちらに向けていた。

「ええ、そうです。小間柑大さんでお間違えないですか？」

「そうです！ いやぁ素晴らしい作品でしたね」

「いえいえ、そんなことは」

そんなお決まりの文句を純真な笑みで語りかけてくる青年に少したじろぐ。気圧されながらも次の言葉を探していると、隣にいた明成が口をはさんだ。

「一君はまだ最終選考の作品を読んでないんですよ。何故か今日まで頑なに読まないと意地を張っていて」

「いえいえ、人それぞれですからね、気にしてませんよ。ところで貴方は？」

「僕はただの付き添いですよ」

「執筆は？」

「いえ、昔はしていたのですがね」

「そうですか」

含蓄のある口調に目を細めた小間さんは、残念そうに相槌を打った。

すぐに笑顔を取り戻した彼は、俺に向き直って会話を紡ぎなおした。

「ともかく、今日はありがとうございました！ もしよければなんですが、連絡先を交換しませんか？ 私の作品を読んでいただいた感想をいただければ助かるのですが」

「え、あ、はい、お願いします」

慣れたように連絡先を交換した後、もう一度感謝を伝え、踵を返した小間さんが不意に再度振り返り、明成に向かって言った。

「もし作品を書くようなことがあれば、この賞に寄せてくださいね。来年、待ってますから！」

※

大きく息を吐きながら背もたれに沈む。目線の先あるディスプレイにはプロットをまとめたフォルダの内容が示されており、そのほとんどが一か月以内の日付を持っていた。

新緑は深緑に変わりつつあり、開け放たれた窓が通す風は夏を孕み始めている。纏わりつく湿気に苛立ち、乱暴に席を立った。

洗面に行き、蛇口を思いきり捻って作った濁流に頭を突っ込んだ。

彼女の作品を読んでからどうもおかしい。

彼女の容姿に恥じない、美しく繊細な言葉たちで構成される世界から、寸分の狂いなく研がれた針によって胸を突き刺されるような最後は圧巻であった。構成には光るものがあったが、文章は実直過ぎた小間さんの作品を遥かに上回っているように見え、なぜ彼女が大賞でなかったのか不思議なくらいだ。

そのせいか、文章を書こうとすると、彼女があの官能的な光を無表情で背に受けている様が頭に浮かんでしまう。その悪夢は、俺の手を強く縛り付けてくるのだ。

圧倒的な差を確認し、手が止まったものを排除していく、これではだめだ、と呟く日々が続いていた。

顔を上げ、水を止め、顔を軽く拭く。少し冷えた頭は最終手段を提示していた。

椅子に戻り、携帯を開く。小間柑大の文字に触れ、打ち込んであった短い文面を送信した。

「布川麗さんの連絡先を教えてくださいませんか？」

※

緩やかな音楽の中、カフェで彼女を待っている。

俺は最終手段として、彼女との対談を取り付けた。

あの壮観が忘れられなかった。十数年にわたって夢見てきた景色をやっと目に入れることができたのだ。忘れるわけがない。

しっかりとした展望を持った目標の前に立ちはだかっているのは彼女だ。

彼女に対抗するには、勝つには、彼女が何を見ているのか、どう書いているのか、彼女に眠るものを断片的にでも知らないといけないと思った。

超えるべき相手から何かを得ようとするなど、失礼も甚だしい。自分を自分の手で磨き、超えるべきだとは何度も思ったが、あの光を、あの糸を見た後では、悠長にそんなことを思っていられなかった。

何度目かのドアベルの音、視線を移すと、彼の女性が俺を見ていた。

その凛々しい立ち振る舞い、俺の方へ歩いてくる様子は、天の光がなくとも、屈服させられるような嫌な景色を思い出させる。

作品も含め、私の方が相応しいと物語っているかのようだ。

彼女が目の前に座る。メモの上に浮かぶペンを強く握り直した。

自分より上だと認識した相手に、恥を忍んで極意を聞き出すという行為に対し、虫唾が走ってしまうことをこらえる。

適当に注文を済ませ、彼女は俺に対し口を開いた。

「要件とは何でしょうか」

清らかで透き通る様な声の中に、どこか語気のこもる声が俺を突き刺した。

「貴女の作品に心打たれまして、私のこれからの活動に対しての参考にしようと思いましたが、作品に関してのいくつかの質問に答えていただけませんか？」

「はぁ」

凛々しいながらも語気が抜けた生返事が返ってくる。

語気が抜け、ピリピリとした圧力が抜けたのをいいことに俺は続けた。

「貴女は何を見て生きているのですか？」

「貴方と然程変わらない風景ですよ」

「貴女はそれから何を感じているのですか？」

「特異なものでないとあまり感じるものはありませんよ」

「では、どういったものから着想を？」

「特に目立ったものはないです。ただ浮かんだ文字を書き写すだけです」

準備していた全ての質問は淡々と返されていく。

歴然とした差を思い知るのに質問は三つもいらなかった。

ペンはメモの上で静止しながら黒い涙を流している。

恥を忍んできたのだ。今までの俺を殺してきたのだ。何か文字を書かなければ。

急ぐ自分とは裏腹に、音楽に溶かされた脳は機能しない。

何か聞かなければ、聞き出さなければ。しかしこれ以上の差を自覚することをどこか拒んでいる。

「用が済んだなら、帰らせていただきますよ」

冷たく鋭い声に下がっていた目線を上げた。

既に立ち上がっていた彼女の見下した目線に竦んでしまう。動かない俺を置いて彼女は連続のドアベルを鳴らした。

窓が映す景色に通り過ぎる彼女の眼は射殺すように目前を見据えていた。

※

唐突に光を発した携帯の画面を見ると、一君からの連絡を伝えていた。

内容を見て一言簡単に返すと、重い雪を運んできそうな高い空の下に出た。すぐに車に乗り、暖房をつけることなくアクセルを踏む。メーターはいつも見ない数字を指していた。

赤信号に歯が軋む。彼が僕を呼ぶことなど滅多にないのだ。

雑多な考えを捨て、ただ彼への最短の道を選び続けた。

目的地に着くと、車から転がり出るように降り、階段を躓きながら駆け上がる。彼の玄関の前で足を止め、時計を確認した。

家を出てから三十分。空が白みだす前の到着に安堵する。

あがった呼吸からか、寒さからか、それとも久しぶりの再会を前にしてか。少し震えた指がインターホンを押す。

「早く入って来いよ！」

大人と言われる年齢になってからは久しく聞いていない彼の怒号が僕に届けられる。強く引き込むようなその怒号におされ、ドアノブに手をかけた。

歓迎したのは彼ではなく、いるだけで酔ってしまいそうな程強烈な酒の匂いだ。廊下に歩を進めようとすれば、突き当りのドアからあふれ出したような瓶や缶の大群が床を巢食っていた。

耳障りな音を盛大に立てながら進んでドアを開けると、先程の怒号が姿を変えていた。「遅えぞ明成！」

酒の存在を表すものは数を増やし、更なる牽制を仕掛けてきた。渦中の親玉は僕の方に疲れを孕んだ険しい顔を向けると、すぐに崩して笑顔を見せてきた。

「こっちこいよ」

大きな音を立てながら取り巻きをどけ、座布団を露呈する。嫌悪感を押し退け、示された場所へ向かった。

ゴミの群れから目を離し、周りを見渡すと、パソコンデスクに目がついた。モニターいっぱい文字は、半分を過ぎたあたりから同じものの繰り返しに変わっている。目線を下にずらすと、半分以上キーのないキーボードが佇んでいた。

座布団に座った僕に、彼は嬉しそうに瓶を傾けた。用意していたであろうグラスからは透明な液体が溢れ出た。気に留める様子もなく瓶の角度を戻し、そのまま口へ持っていく。

何度か喉が鳴った後、ゆっくりと口を離れた彼は、焼き切れた声で言った。

「みんなすごいんだ」

哀愁のこもった声を聞き、コップにゆれる液体に口をつけた。

少量にもかかわらず、喉を突き刺し、食道に存在の烙印を残しながら流れていく。

思わず咽てしまう僕に苦笑いしながら続けた。

「届く気がしないんだ」

彼の横顔に先ほどまで張り付いていた苦笑いは全て流れ落ち、言葉が孕む表情が注ぎ足されていた。今にも溢れ出てしまいそうな表情を見つめていると、それはまず口からあふれ出した。

「大賞っていう目標も、あの女も、芥川も、皆天にいるんだよ」

彼は突然こちらを向き、悲愴に濡れた顔を僕の胸に沈めた。

「もう書けないんだ。どんなに書いても、何を書いても届かないんだ。あの女は飄々とした顔で糸を登っていく。もう嫌だ……。もう見たくない……」

僕の胸に強く衝撃が響く。僕の胸に伏せられた顔の横には強く握られた拳が添えられている。しかし、僕の胸に届いたのは口から出た鋭い痛みだった。

彼の言う嫉妬を孕んだ手を僕は知っている。頭にある妬みを振り払い、必死に手を動かそうとする心の痛みを覚えている。想いの乗らない文字列を叩き壊したい心を宥める毎日を想起できる。

「うん、わかるよ」

優しく背中に回そうとした手を、顔を見上げた悲愴が止めた。  
「お前はいつもわかるわかるって！ 医者だなんだで大学行って物書きやめたお前に俺の何が分かるんだよ！」  
彼をきつく抱きしめる。  
湿っていく胸元を感じながら彼の寝息を聞いていた。

※

「ただいま」  
「あら、朝帰りなんてどこの誰と浮気？」  
掠れ切った声をどんな耳で聴きとったのか、奥から顔を出した彼女が冗談めかして言った。  
「友達のとこだよ」  
靴を脱ぎながら答える。廊下を歩く僕は、彼女がいる奥の居間にはいかず、途中の右側のドアに入った。椅子をひき、前面に構えられたパソコンの電源を入れ、座ると同時に背もたれに体を任せる。軋む音に隠すように、大きく息を吐いた。睡眠の欠如から動かない頭に負担をかけぬよう目を閉じる。そんな僕をよそに、朝の喧騒は嫌味を利かせた言葉を投げつけてきた。  
「帰ってきてすぐ課題？ 友達に勉強に、居残り大学生さんは大変ですねえ？」  
「留年した訳じゃないんだし、居残りじゃないでしょ」  
「私からしたらどんな理由でもまだ卒業していないタメは居残りなんですー」  
張り上げられた声に対して無気力に答えたが、ちゃんと返事は返ってくる。  
目を開け、ドアの方を見ると、スーツ姿になった彼女が目を下に引っ張り、舌を出していた。不意に笑顔になって、  
「じゃ、いつくるねー。あっちに朝ご飯あるから、好きな時食べて。またねー」  
と言って出ていった。返答する前に玄関が閉まる音とともに微かな振動が伝わる。  
顔の向きを戻し、もう一度大きく息を吐きながら目を瞑る。唯一静寂に抵抗している時計の音を少しの間聞いていた。  
ふと思い立ったように、机の引き出しを開ける。取り出したのは湿気た厚紙だった。  
小学校の頃の文学賞だ。彼と二人で出そうという話になって、受賞したのは僕だけだった。彼はそれを当然だと言わんばかりに笑い、お前ならもっとでかいところじゃないと勝負にならないな、と言って目指す場所を変えたのだ。彼は僕が止めてからもそれを目指し続けている。  
机の脇に置き、パソコンを起動しなおす。画面に映された白紙の設定を縦書きに変え、手をキーボードに置いた。

※

「ごめん、僕小説書くのやめようと思う」

「え、なんで」

「医者を目指すんだ。勉強しなくちゃいけないし、時間がないんだ」

「お前ならすらすら書けんだろ？ 息抜きとかでもさあ。何年も作品だしてないからどんな大作が来るか楽しみにしてたのに」

「無理だよ」

「無理じゃねーだろ！ だってお前は……」

「なんで一君はそんなに素直に人のことを認められるの！ 僕は、君が羨ましいよ。性格も……文章も……」

「……」

「ごめんね……」

※

壁を埋め尽くすほどの本抱え込んだ書斎の中、机の上も埋め尽くさんとしている本をどかし、部屋に馴染まない電子機器を開いた。

「お、きてるきてる」

うれしそうに眩きながら、数個に分けられた『応募作品』のフォルダを全て保存する。資本主義の利点というべきか、まだ一年も経っていない新人が審査員に挙手しても喜んで受け入れられた。たまには人気の為を書くのもいいもんだ。

幾千の名前の中から、目当ての文字を探していく。不意に止まった手に呼応して、吊り上がりつつあった口が開いた。

「そうそう、君が見たかったんだよ。君の為にあの女口説くの、大変だったんだからね」  
無数の本に消えていく独り言を気に留めず、その作品に没頭し始めた。

※

目覚ましの音で目を覚ます。まだ睡眠を欲している頭をあげて時計を見ると、目覚ましは三回鳴っていたようだった。

カーテンを開けると、乱暴に封が切られた桜の切手が目に入る。その横を通り過ぎ、洗面に向かった。

水滴を纏ったまま歯ブラシを咥えた顔は無表情で、クマが目立っている。すぐにうがいをし、洗面から出た。

服のかかったハンガーからビニールを外し、身に纏い始める。ベルトを緩めにし、上着を着る。姿見を横目に封筒を鞆に入れ、家を出た。

欠伸をしながら階段を降り、何日ぶりに触れる車の鍵を開けた。

道路に出て、全てが緑の道をただ走っていく。

待ち合わせの場所につくと、明成が会館を見ていた。

「遂にだな」

明成は返事の代わりに大きな深呼吸を返した。

会場内に入り、席を探す。席につくと、時計の残り少ないカウントダウンは余裕をもって流れていった。数字に挟まれた点滅する二つの点をただ眺めていても、時間はなかなか進まなかった。

人々の騒音が飽和した頃、会場が暗くなり、開会の声が響く。隣で短い呼吸とともに緊張の糸が張った。

「では、早速賞の方を発表したいと思います。優秀賞、『浮きつ沈みつ』、佐藤凜」

知らない名だ。光が当たり、左方で緊張とともに立ち上がったのは、何の変哲もない女性だった。慣れない様子で壇上に上がっていく。

「続いて、もう一名の発表です。優秀賞、『諦念』、布川麗」

光の当たる方を向いた。脳裏に張り付いていた景色とは違う。彼女が今受けているのはあの光ではない。

相変わらず鋭い目つきは彼女が目指すべき壇上をまっすぐ見据えていた。

彼女がその一歩を踏み出すたびに、自覚と確信がせりあがってくる。

勝ったのだ、彼女に。あの糸の救済を受けるのは俺なのだ。この地獄から抜け出すのは俺なのだ。神は俺を選んだのだ。

注がれる光に顔を上げる。降りてくる糸に手を伸ばす。自然にひざは伸び、耳はラッパの音色を待った。

この糸は遂に俺のものになったのだ。

「最後に、大賞の発表です。大賞、『塵へ』、服部明成」

左肩に優しく添えられた手に重さが乗る。

引き戻された俺を強く見下す目が立っていた。

「ごめんね、一君。今ここで糸口を掴むのは、僕みたいだ」

## 編みかけの

編みかけの

雪兎

編みかけの毛糸がありました

たぶん

マフラーにしたかったもの

ちょっと寂しげに  
ちびた正方形が  
ぽつんと俯きそこにいました

編みかけの毛糸がありました  
たぶん  
手袋にしたかったもの  
ちょっと寒そうに  
指の無い空洞が  
わたしのことを待っていました

編みかけの毛糸がありました  
たぶん  
セーターにしたかったもの  
ちょっと恨めしげに  
かぎ針を刺された何かが  
こちらを見やった気がしました

編みかけの毛糸がありました  
わたしの部屋に

いくつも  
いくつも

生まれそこないのいとし子たちに  
ごめんなさいと目をそらして  
わたしはまた  
キーボードをたたいています

あとがき  
私の怠惰の産物たちに捧げた懺悔です。

## いと、わろし

いと、わろし

如月深琴

雨が降り出した。傘を差す気分でもなかったし、だからと言ってどこかで雨宿りをする気分でもなかったのでそのまま歩く。雨に降られながら、彼女の言葉を思い出した。浮かべた笑顔は、今までにないほど歪だったろうと思う。

\*\*\*\*

朝比奈みちるは平凡な女性だった。立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花、というほど美人なわけでも、誰にでも優しく、誰にも怒らず、聖人君子のような性格というわけでもない。いたって平凡な、ただの女性だった。そんな彼女だけれど、唯一変わったところがあった。

彼女は、絶対に人と目を合わせない。

\*\*\*\*

「みちる、みちる起きて」

「.....はるちゃん。おはよお」

ゆっくりと開けられた瞳と目が合う。

講義室の一番後ろで突っ伏して眠っていたせいかわ、前髪に変な癖が付いている。

「はいおはよ。前髪変になってるよ」

「あやや.....ん、なおった？」

「なおってない。帰ろ」

はーいと軽やかに返して、大学に入って染めたという明るい茶色の髪を翻しながら立ち上がる。目を引くような容姿ではないけれど、どこか気になる。愛嬌があると言えばいいのか、そういう外見をしている。

「はるちゃん？ どうしたのー？」

「.....なんでもないよ。忘れ物ない？」

返答はなかった。けれど、足取り軽く講義室の入口に向かう様子を見るに、ないということなのだろう。まあ、私がこの講義を受けるからという理由で受けたあの子が、この講義をまじめに受けるとは思えないし、そもそも荷物を出していなかったんだろうな。

「今日のはちゃんの家に行ってもいい？」

「いいけど。じゃあ晩御飯考えないとね。何がいい？」

「カレーがいいな。お肉少なめ、キノコたっぷり！」

ニコニコ笑顔の彼女とまた、目が合う。

\*\*\*\*

気持ち悪い。

乱雑に拾って、乱雑にまとめた糸のような黒い塊が、目の前の人間に張り付いている。

「このネイルカラー可愛くない？」

「こんな感じでヘアアレンジしてみたらいいんじゃない？」

「みっちーこの服似合いそー！」

なんてことのない、ありふれた言葉。彼女は悪い人じゃない。分かっている。

見ないようにしていた彼女の顔を、彼女に気づかれないように盗み見る。もしかしたら、なんていう一縷の望みをかけて。

けれど結局、また私は目をそらしてしまう。

\*\*\*\*

私とみちるは、大学に入ってから出会った者同士で、付き合いはそれほど長くない。さらに言うなら、大学に入ってから半年ほどしてから出会っているので、長くないというより、短いというほうが正確だろう。私が彼女と出会うきっかけになったのは、必修単位のための授業だった。卒業するために必ず取らなければならない講義で、私が所属している学部の間しか存在しない授業。同学科の子たちはすでに共通した講義を取りながら交流を重ねていたらしく、私が入る隙がなかった。もともと大勢でわいわいするのが得意なほうではなかったとはいえ、何とも言えない居心地の悪さを抱きつつ適当な席に座ろうとする。すでにほとんどの席が埋まっている中、一番近くの席が一つ空いていた。

「隣、いいかな」

「え……あ、うん。大丈夫。ごめんね、荷物どかす」

「ありがとう」

目を合わせたと思ったら変な間を作って私を隣に座らせてくれたこの子がみちるだった。それがたしか、八月のこと。

なぜかその時からみちるは私を慕ってくれて、よく一緒にいるようになった。とはいえ、みちるは友人が少ないわけではないので、大学内を一緒に歩いていると高確率で誰かから声を掛けられていた。確かに彼女と一緒にいるのはなんだか心地がいいから友人が多いことにもうなずけた。

「みっちーおひさー」

「久しぶり、元気してた？」

「元気も元気よ！　ね、今度一緒にショッピング行こうよ！」

「え、っと」

「……？」

みちるの顔色が悪くなっている。

「っと、うち次遅れられないんだった。じゃあねみっちー、ショッピング行こうね！」

嵐のような女性だった。にぎやかな、いわゆる陽キャと呼ばれる人種なのだろう。陽キャという人種にいい思い出はないけれど、彼女には不思議と嫌な思いは抱かなかった。いい人なのだろう。

「……みちる、だいじょぶ？」

彼女の誘いを聞いてから様子がおかしい。笑顔ではあるのだが、いつも私といるときのようなものではなく、どこかぎこちない。

「……うん、大丈夫。ほら、行こお」

あ、戻った。

もしかして、彼女が苦手だったのだろうか。悪い人ではなさそうだったけれど、まあ、昔何かあったのかもしれない。私が変に干渉するのも煩わしいだろうから、あまり深入りしないようにしよう。

「ショッピング、行くの？」

「うーん。ゆうちゃんとはそれなりに長い付き合いだし、なんだかんだ一緒にいて楽しいからね」

「そっか。……あの子、ゆうって言うの？」

そういえば名前を聞き忘れていた。というか聞く隙がなかった。

「そう。ゆうきちゃん。高校の時から友達なの」

ふーん。

声には出さず、心の中だけでうなずく。高校からの付き合いがしっかりと大学まで続いているのであれば、彼女とみちるはそれなりに仲が良いのだろう。

みちるは良くも悪くも平凡だ。嫌なことがあれば怒るし泣く。うれしいことがあれば喜んで笑う。必要があれば気持ちをごまかす。けれど人間関係を形成するときに何かをごまかすことはしない。友人を大切にするのが彼女なのだと、短い付き合いではあるけれど感じている。

だからこそ、ゆうちゃんことゆうきさんとのかかわりの様子に違和感がある。何が違和感になっているのかは、まだわからない。

「あれー？　ちるちるみちるじゃーん」

「椿ちゃん、久しぶりい」

今日は先日とはまた違う女性がみちるに声をかけてきた。姫カットの良く似合う、黒髪ロングのお姉さんだった。しゃべると残念なタイプの美人さんだ。でもそこがいい。

「そっちの人は友達？」

「あ、うん、そう。同じ学部のはるちゃん」

「あ、初めまして。小日向はるひです」

「皆城椿です。無気力系美人さんですね」

ね、ちる。

その言葉に大きく何回もうなずくみちる。正統派の美人に褒められると何とも言えないむずがゆさがあるって落ち着かない。無気力だということは否定しないけれど。

「ちる、ゆうと買い物行くんでしょ？ そのあといつでもいいから私ともあそぼーよ」

「んえっ……うん、行こう行こう！」

また変な間ができています。それだけじゃない。何かが変だ。

じゃーねーと言いながら手を振る椿さんに手を振り返す。ちらりとみちるの顔を盗み見る。前回と同じく、顔色が悪い。

「みちる。顔色悪いよ、大丈夫？」

「……ん、大丈夫。ほらはるちゃん、早くいかないと講義遅れちゃうよ！ 早くいこ！」

またすぐに元に戻る。でも、なんとなくだけれど、一つだけわかったことがある。

みちるは、私の顔を見ると元気になる。

二度あることは三度あるとはよく言ったもので、またみちるの友人と出会うと、また顔色が悪くなった。

ここまで続くと、もしかしたら本当にゆうきさんや椿さんたちのことが嫌いなのではないかと思えてくる。もしそうなら、無理に彼女たちに付き合う必要はないと伝えたい気もするけれど、聞いてもいいのだろうか。

以前までの私ならこんなことで悩むなんて絶対にしなかった。すべてのことに対してなあなあに生きてきたから。勉強だって、それなりの成績が取れていればよかったし、友人との付き合いもそれなりの、きっと何かのトラブルが起きたらすぐに裏切り裏切られるような、そんな関係を好んできた。何かに執着して何か強い感情を持つ自分を想定するだけで気持ち悪くて気持ち悪くて。たかが他人に執着する周囲の子たちも気持ち悪くて。そんな風になりたくなかったから全部なあなあにしてきた。

そんな私が、出会う半年と経たない人間に対してちゃんと気を遣っているなんて。

「……ねえみちる。違ったらごめんね。もしかしてゆうきさんとか椿さんとかのこと、嫌ってたり、する……？」

「えーなんで？ ゆうちゃんも椿ちゃんもだいすきだよお？」

「……そっか。じゃー私の勘違いだ。なんか、誘われてるとき顔色悪かったから、気が進まないのかなって思ってさ」

さっきだって、高校の時から友人からの誘いを受けて顔色を悪くしていた。ゆうきさんや椿さんの時とは比べ物にならないくらいの顔色で、焦ってその場から離れてしまった。

そういえば、一刻も早くみちるをどこかで休ませようとしたせいで、彼女の名前を聞き忘れてしまった。

「あとさ、もう一個聞いてもいい？」

「んー、なーに？」

ゆうきさんや椿さんの時に感じた違和感は何なのか、ずっと考えていた。私の顔を見て元気になることも一つの要因だけれど、それが本質ではない気がした。けれど何が違和感の本質なのかを確信するには情報が足りなかった。だから、不自然にならない程度にみちるを観察した。私と話しているとき、学部の先輩や教授と話しているとき、高校

の友人と話しているとき。そして今日、ようやくその違和感に気づけた。  
「みちるさ、私以外の人の目、絶対見ないよね。なんで？」

\*\*\*\*

衝撃だった。

誰もかれもにあの黒い塊が付いている日常。アレが他の人には見えていなくて、他のみんなはちゃんと人の顔を見ることができるのだと気づいたとき、私の周りには誰もいなくて、それなのに、みんな幸せそうで。

——羨ましい（、妬ましい）。

その次の日から、鏡に映る私にも同じものがついてた。気持ち悪いと、恐ろしいと思っていたソレが私にも存在するものなのだと気づいて、それならばとあきらめた。コレは誰にでも存在するものなのだと、自然と悟った。だからこそ、普通に過ごしたふりをしてきた。恐ろしいものだというに変わりはない。恐怖が消えたわけでもない。だから、顔を見ないという方法で直視することを避けていた。時折、声が聞こえる方向へそのまま視線を挙げてしまい体調を崩しかけた時もあったけれど、それも本当に時々だった。けれど、いやだからこそ、私は誰かと二人きりで長時間同じ場にいることが嫌いだった。恐ろしいものを避けるためには、私のほうへ向く時間をなるべく少なくすることが最善で、長時間私のほうにあれが向いていると、気分がつられてしまうからなのか体調を崩してしまう。

——なのに。

「隣、いいかな」

顔周りに何もない人の顔を見たのは、あの時が初めてだった。

衝撃だった。誰にでも存在する黒い糸のような塊が、この人の中には存在しないのだ。もっと知りたい、もっと一緒にいたい。そう思える人だった。

\*\*\*\*

私の言葉を聞いて、みちるはフリーズした。何か悪いことを聞いてしまったのだろうか。目の前で手を振ってみるも反応なし。軽く目を見開いたままその場から動かない。

「石になってしまう魔法の言葉だったのか……？」

「はるちゃんって頭いいのに時々おバカさんだよ」

あ、動いた。

突然のみちるの声にびっくりして今度は私が固まる。そんな私を、みちるはなにか残念なものを見る目で見てくる。やめろそんな目で見るんじゃない。

「私ね、人の顔見るのが苦手だね。なんでかは言えないんだけど、はるちゃん以外の人の顔まじまじと見てると気持ち悪くなってきちゃうんだ」

ぽつりとつぶやかれたそれは、おそらくさっきの私の質問に対する答えなのだろう。いつのまにか暮れ始めた陽を背にするみちるの表情は、私からはよく見えない。けれど、口角が上がっているのは見える。

たぶん、嘘は言ってない。でも、本当のことも言ってないんだろうな。

言わないということは、言いたくないことであり、私が知らなくてもいいということなのだろう。それなら私は踏み込まずにしよう。

「.....そっか。でもまあ、苦手ってことはなんか嫌なことあったの？」

けれど、踏み込みすぎない程度の、当たり障りのない質問くらいは許してほしい。

特に気になっていたことが（完全にではないけれど）解消されたことで心なしか軽くなった足取りでみちるの隣に立つ。それが合図だったかのように、私とみちるはほぼ同時に歩き出す。

「んー.....まあ、そんなところかなあ」

そう答えるみちるの顔はどこか苦しそうで、軽率に聞いてしまったことに対する罪悪感が湧き上がる。

「.....いとわろし、か」

「え？」

私のぼそりとしたつぶやきを耳聡く拾われてしまった。考えていることを無意識のうちに口から発してしまうのは私の悪い癖だろうな。

数センチ下からのぞき込んでくる一対の瞳にしっかりと目を合わせる。

「なにがいとわろしなの？」

琥珀色の瞳に夕日が反射してキラキラしている。両親ともに日本人ではあるらしいけれど、みちるの瞳は日本人らしい焦げ茶色ではなく、外国人に多い（イメージの）琥珀色だ。染めたという髪の色とも合っていて、彼女の魅力を引き立てている。

「だってみちる、嫌なことがあったんでしょ？」

「え？ うん」

「わろしの意味は、細かく言うとみっともないとか、劣っているとかって言うのがあるけど、おおざっぱに言うとはよくないってということ」

まさか知らないなんてことはないだろう。大学に入ったとはいえ、まだ一年生。古典を学習していたのは今年の二月ころまでだ。大学に入れるほどの学力があるのだから、知らないなんて.....。

そんな私の視線に気づいてか、そんなのは分かってるよお！ と小さく反論してきた。よかった。さすがに覚えていたか。

「いとわろし、とてもよくない。みちるの今までのつらいことってそういうことじゃないの？」

「あー、そういうこと？ なんか意味深な感じでつぶやいてるからびっくりしたよお」

ごめんて、と軽い謝罪をし、夕日に目をやる。

さすがにまぶしい。

「.....いとわろしってさ」

高校の頃ずっと思っていたことを口に出す。彼女の生き方を否定するわけではない。けれど、彼女が私以外の人間と話すとき、彼女はとんでもなく顔色が悪かった。周囲の目やらがあるからあの程度で済んでいるだけで、誰の目も気にしなければ、顔色が悪いを通り越して、死人のようになっていたのかもしれない。それを考えると、もう少し、ほんの少しだけでもいいから私以外といるときにも笑っていてほしいと。

——そう願ったから。

「いとわろしって、いとワロスと似てない？」

「.....はい？」

「いやだから、いとわろしといとワロスって似てるじゃん？　だからさ、なんか嫌なことがあったり思い出したりしちゃったら笑っちゃえばいいんじゃない？」

笑えば意外と嫌な感覚と言うのはどこかへ消えていくから。笑うことを強制したいわけではないけれど、彼女のしんどさが少しでも減るためになにか不自然にならない程度に提案していきたい。

「.....なにそれえ！　は、はるちゃんったらもう.....あはは！」

おなかを抱えて笑われてしまった。いやいや構わない。さっきまでの彼女は、どこか思い詰めているような顔をしていたから、笑って嫌な気分を吹き飛ばしてくれればいいさ。

「は.....やっぱりはるちゃんはおバカさんだ。.....でも、ありがとお」

どこか吹っ切れたような笑顔が見ればそれで。

「いいよ別に。笑いすぎて過呼吸なんないでね」

\*\*\*\*

本当のことは言えなかった。彼女がそんな人だと思っていたわけではない。私自身が臆病者だったというだけだ。だから、本当のことを隠して話した。きっと私が本当のことを話していないことに気づいていたと思う。だから、少しだけ不安だった。

もしかしたら、なんで本当のことを言わないのかと詰られるかもしれない。いや、彼女はそんなことしない。けど、言わないだけで本当はそう思っているのかもしれない。

彼女が変なことをつぶやいたのを聞き返した時も、そんな不安でいっぱい、どこか上の空だった。なのに。

「いとわろしって、いとワロスと似てない？」

何を言っているんだろうこの子は.....。

私なんかよりずっと頭がよくて、普段もクールな彼女。時々変なことを言うから、最初は驚いた。けれどそれも慣れてくると、彼女が変なことを言うときはだいたいが場を和ませるためなのだと気づいた（たまにほんとに考えたことをそのまま口にして要るっぽい時もあるけれど）。

だからたぶん、これは彼女なりに私のことを考えて言ってくれていることなのだろう。発想が少しおバカさんなのが残念だけれど。

たしかに、アレがついている人と長時間一緒にいると、おそらくアレに感情が引きずられてしまう。感情が引きずられないように、私はそもそも見ないという対策をしていたけれど、これから先もそれでどうにかなるとは限らない。笑うというのは、たとえ嘘であっても何かしらのプラスの効果があるとされているし、そうすればもしかしたらいつか、アレを受け入れることができるのではないだろうか。

彼女なりに私を気遣って言ってくれたことだし、実践してみようかな。

「ありがとね、はるちゃん」

「？　さっき聞いたよ、それ」

それからしばらく、努めて笑顔でいてみた。そうしたらある日、はるちゃんのいない日に彼女以外の友人から、なんか前より雰囲気ほんわかしてるよねと言われるようになり、そういわれてから初めて、アレを見ても以前ほどの気分の悪さになっていないことに気づいた。

人づきあいが苦手だった。人の黒い部分が見えてしまっているから。黒いものが私に巻き付いてくるような、そんな気がしたから。けれど、彼女と出会って、ほんの少しだけ誰かと話すのが楽しくなった。

すごい、はるちゃんのおかげだ！

次の日、彼女にテンション高くそんな報告をしたら、

「？ みちるの頑張りなんだから、自分を褒めてあげなよ」

なんて、そっけなく返された。自分は何もしていないんだと心の底から思っただけなのに、彼女らしいなど笑った。

二年生に進級してすぐの六月頭のこと。一緒に受けようと言って受け始めた月曜の制限。人数はそれなりにいるけれど、律儀に毎回、全員分の出席をとる授業だから、私も彼女も、まだ一度も休んでいない。それなのにその日は一限が終わってから現れる心配がなかった。風邪でも引いたのかと思っていたが、LINE をしてみても、既読すらつかない。何かあったのだろうか。

「あ、教授」

「ん？ ああ、朝比奈さん。どうかしましたか？」

「あ、いえ、特にないんですけど.....あの、はるちゃんが今日来てなくて、心配になってしまっただけなんです」

はるちゃんという言葉聞いた瞬間に目の前の教授が言葉を詰まらせる。表情は相変わらず見えない。けれど、何かを言い淀んでいる.....？

「朝比奈さん、小日向さんのことなんですが.....」

雨が降ってきた。けれど、傘を差す気分には、どうしてもならなかった。

小日向はるひは、六月を生きることなくこの世を去った。そう教授から聞かされた。五月の最終日に、階段から落ちて、その時の打ちどころが悪かったらしい。なんとも彼女らしいと言えば彼女らしい。階段から落ちるといのは、日常生活の中で最も身近な恐怖といってもいいだろう。けれど、いやだからこそなのか、まだどこか現実味がない。だって彼女が死んでしまった日曜日、その前日に私は彼女と会っていて、その日だってバカみたいなことを言い合って笑っていたのに。

「.....いとわろし」

感情を歌にしていた時代の人ならこんな時も歌を作るのだろうか。あいにく私には歌を作るための知識はないし、作ることはできないけれど。

雨がひどくなってきた。雨宿りをしたほうがいいのかもわからない。講義の資料が濡れてしまう。けれど、今日の資料一つくらいなら、少しくらい濡れてもいいんじゃないか。

雨が目に入ったのか、純粹に涙なのか、視界が歪んでいく。

『いとわろしといとワロスって似てるじゃん？ だからさ、なんか嫌なことがあったり思い出したりしちゃったら笑っちゃえばいいんじゃない？』

そんな彼女の声が聞こえてくる。ああそうだ、彼女は私に、こんな形でないにしても、いつか彼女がいなくなってしまうときに私が苦しまないようにたくさん教えてくれた。

明日からも、そしてこれから先一生、私はもう彼女とは会えない。それなら、彼女の言葉を大切にしていこう。忘れることがないようにしよう。私が彼女を忘れれば、彼女はもう一度死んでしまう。彼女の言葉を受け継いでいこう。

かつて彼女と遊んだ公園で、自分のほほを無理やり引っ張る。口角を挙げただけの、歪なものだ。歪すぎて、手を離すとすぐに下がってきてしまう。

「っ……はるちゃんの、ばかぁ……」

はるちゃんのせいだ。でもまあ、許してあげる。私もそのうちそっちに行くだろうし、その時はちょっとだけ怒るけど。だからせめて今日だけは、今日一日だけは、笑うことのできない私を見逃してね。

糸

糸

如月深琴

ちくちくちく

彼女は刺繍がとっても上手

奇麗なお花も、可愛い小鳥も

彼女の手にかかればなんのその

ちくちくちくちく

彼女は裁縫全般大得意

可愛いクマさん、可愛いクッション

彼女のお部屋はとってもファンシー

ちくちくちくちくちく

彼女はいつもお母さんに怒られる

声が汚い、動作がみっともない、えとせとら  
悲しい彼女はちくちくちく

ちくちくちくちくちくちく  
彼女はお母さんと仲直り  
怒られることはもうないよ  
だから彼女は今日もちくちくちく

あとがき

「ちく」ってなんだ……？ という感じでゲシュタルト崩壊しました。  
頭に浮かんだものをそのまま書いたらこうなりました。不思議だね。

## 全て夏の夢

すべて夏の夢

朝の乙女たちは忙しい。加賀女子高等学校、通称加賀女の生徒たちはバスの中で咎められない程度のリップクリーム、単語テストに備えた勉強、あるいは朝寝で忙しい。

スクールバスの中はバスの駆動音、小鳥の声に似た噂話がこそこそと響いて静かだ。加賀女の制服には魔法がかかっている。糊のきいたボックスプリーツ、真っ白な襟元に収まった少女たちは淑女のようにつつましやかに振舞う。

私の旧来の友人、清瀬風はいつも通りにスクールバスの最後列に座り、外を眺めていた。制服のリボンタイはゆるやかにアシンメトリーのまま、柔らかな髪は奔放に乱れていて、羊のような生徒の群れの中でも異様な感じは拭えない。

イヤホンをしているのに目ざとくこちらに気づいてきて、ひらひらと手を振り、隣に座るように促してくる。

「おはよ、カオルっち」

「おはよう、何聴いてんの」

「レッチリ」

ナギは古臭いロックが好きだ。クイーンとかメタリカとか、あとボブディランなんかの有名どころを毎日繰り返し聴いている。

もはや化石のような iPod shuffle はナギのメインデバイスだ。ちなみにナギがこの iPod を手に入れるまではずっとカセットテープ式のプレイヤーを持ち歩いていた。

「今日はひとりなの？」

「うん、昨日振られた」

ナギは制服の袖を軽く捲り上げた。手首に赤いうっ血痕がはっきり残っている。手首をくると一巡りしたそれは絞首痕にも似ていた。

「また」

「犬に噛まれたんだわ」

噛まれたというか、ナギが噛んだのだろう。

ナギの顔は猫のような吊り目がきゅっと可愛くて、稚い。力なく結ばれた口角は憂を含んで不釣り合いな、大人のように見える。

肩元で切りそろえられた髪は乾いて内側にハネて、ラーメン屋なんかに貼ってある古いビールの広告の中で笑う女のように見える。古風な美人だが、それが古風な制服の中に収まると、まるでフィルムに焼き付いたように絵になる。

ナギはその、まるで果物くらいしか食べられなさそうな小さな口で乙女を食っている。知恵の実を食べさせる蛇というより、恋愛中毒をこじらせたジャンキーというのがふさわしい。乙女をそそのかすのが上手くなって、優しい声で近づいてがぶり、唇に噛みついてしまう。

乙女の純潔は桃に似ている。触ったところから順々に腐っていく。ナギは女を食わないと生きていけないのではないか。そのくらいのペースで乙女たちに墮落の味を教えて、腐らせていた。

ナギはロックを聴くが、ロックはナギの心に響かない。ナギは反骨精神というか、暴力に抵抗する意思と愛を尊ぶ姿勢が絶望的に欠けている。ありとあらゆる暴力になりゆきそのまま晒されて（とはいってもほぼ自業自得なのだけれど）いつもどこかしらに痣を作っていた。

ナギが三年ほどロックを聴いて学んだのは、ジミヘンが左手で握手をすることだけだった。ジミヘンは左手で握手する。左手のほうが心臓に近いから、らしい。

○

図書室で小説を借りた。「小さいうち」だけ。二冊、三冊と借りて変に教室で視線を集めるのが嫌だから。

渡り廊下を通り、ちょうどナギのクラスのそばにさしかかった時だった。セーラー服の少女たちがきゃあとか、わざとらしく悲鳴を上げながら教室から駆け出してくるのが

見えた。

中の様子はなかなか演技じみた修羅場で、この時世にはいよいよ珍しい。上手には髪をゆるく巻いた少女が立っている。南向きの教室、太陽光がフロントライトのように差し込む中、優美な顔を酷く歪ませて立っている。

下手にはナギが立っている。ふらふら揺れながら。ナギは真っすぐ立たない。背骨がS字に曲がっているのに真っすぐ立てるのはおかしいでしょ、と本人は言っていた。

少女の緩く握られた拳がガツンとナギの頬を打った。ナギは漫画みたいに吹っ飛んで、教室後方の机、椅子にぶち当たりつつ倒れこんだ。ナギは腕を木製の机や椅子に酷く打ち付けた。ふたりを中心に乙女たちはいよいよはけていく。

少女は力なく倒れこむナギの胸倉を掴んで持ち上げる。ナギはマリオネットのように四肢を揺らすだけでさして抵抗もしない。四五キロ程度のナギの身体は乙女の力でも簡単に持ち上がる。

少女は力を込めてナギの腕を絞めあげた。指先の色が変わるほど強い力がこめられるが、慣れていないのだろう、手は震えている。泣いているのだろうか。ナギの背中に隠れて彼女の顔は見えない。

誰かが呼んだのだろう。剣道部の乙女たちが美しいスプリントのフォームで飛び込んできて、少女とナギを引き離した。ふたりは糸の切れたようにおとなしくなって、少女はしゃくりあげながら泣き出した。ナギはそれをぼんやりと見ていた。

○

私は乙女の壁をかき分けてナギを回収し、保健室まで引きずって行った。ナギは歩いている最中ずっと、小惑星に探査機が到着した後、どうやって岩石を回収するかについてしゃべり続けた。

「ダイナマイト漁は禁止されてるのに小惑星の表面は発破していいなんておかしくない？」

「人間なんて、今まで散々高層ビルだなんだ建ててんだから変わんないでしょ」

「あーそれは言えてる」

この学校の制服は前時代的なセーラー服で、生地が厚い。几帳面に折りたたまれたボックスプリーツのスカートを綺麗なまま巻き上げるのは難しく、腕まくりなんてしたそばからずるずると袖が落ちこちてくる。

ナギは保健室のソファの上で制服の上を脱いで、キャミソール一枚になっていた。ブラの紐が覗いているが本人が気にする様子はない。日の差さない窓辺、薄ら寒い中で閑そうに脚をふらふらさせている。

ナギの肌には三日月形の爪の痕、アザが転々と散っている。ひときわ爪が深く沈み込んだところの皮膚はぷつぷつりと途切れ、涙のように赤黒い血が一滴肌を滑り落ちる。漠然

とぶどう酒を想起した。

アルコール綿をピンセットで掴んで傷口に当てた。

「痛ェ」

「黙って、せめて動かないで」

「んはは」

ナギの身体は薄い。笑うにつれて揺れる腕はほそちくて、脚も腕もむりやり縦にひきのばしたような形をしている。傷が貫通しそうだ。血が止まるのも遅い。血が凝固するのが遅いから、いつまでもだらだらと血が流れてくる。

乙女にはそれぞれ秘密がある。乙女の園で上手く生きていくための決まりは、他人の秘密を詮索しないこと、他人の秘密を守ることの二つだけだ。

少女は泣きこそすれ、ナギについて何も語らなかった。ナギが彼女に何をしたのかはきっと、永久に秘密のままだ。

ナギはいい加減この手の事件に関与しすぎて、保健教諭や担任からも放っておかれることが多い。ナギを罪人たらしめる証拠は乙女たちの間で隠匿されるから、説教の材料は見つからないし、ナギ本人へのカウンセリングや面談はすべて徒労に終わっている。私が何より知っている。

保健教諭にしても全体的に生傷の多いナギの身体から新しいそれを発見するのは困難を極めるし、その上めんどくさがるのナギは「怪我はないですね」と訊かれると反射的にはいと頷いてしまうから結局放置される。

ナギは保健室の備品の位置と名前、利用記録表のつけかたを完全に覚えていた。ナギにとって保健室とはセルフサービスで使うところだった。

ナギは女が好きだ。ありとあらゆる女、つまりこの学校を構成するほとんどの人間をあまねく愛している。たとえその女が中等部の後輩であろうが、司書の先生であろうが教務主任であろうが構わずに口説く。ストライクゾーンという概念はなく、ありとあらゆる人間がその対象だった。

ナギという人間は、とにかく人が好きで、そしてどうしようもない恋愛中毒なのだ。

恋愛の駆け引きのじれったさに溺れるたちで、三角関係とか不倫とか、爛れた関係に自分から突っ込んでいく。しかし乙女の望むような「平和な日常」にナギの求めるスリルはない。目と目が合ってドキドキするほどナギは純情ではない。ただそういう演技が上手いだけだ。

ナギは魚を釣ることが好きだけで、釣った魚に餌をやるような器用さも、長期的な計画性もない。最終的に犬に手を噛まれる。雌犬に。

「で、今回は何したの」

「えっとね、他の子とちゅーしてるとこ見られた」

「自業自得」

「業とは時に甘いものなのだね、カオルくん」

一番大きな傷はとりあえずばんそうこうで塞いで、あとはももとの傷痕に埋没してよくわからないから放っておく。

「ねえ、脚も切れた気がする」

「そんぐらい自分でやってよ」

「はい」

ナギはスカートをめくりあげて腿までを晒した。ナギのインスタで見たことがあった。ナギは脚のほとんどが見えるホットパンツを履いていて、肉の薄い直線形の脚には、わずかに産毛のような毛が生えていた。

それを上書きするように、晒された脚には爪を立てられていて、しかし当人はロクに気にする様子もない。

ヒトの脚というより、死体のようだった。血の気の薄い肉に咬み痕がついているから。まずそうな体。

「天国には何があると思う？」

「何？」

「乳と蜜。甘ったるくて飽きそうじゃん？」

○

美術部の倉庫が改修工事で使えなくなり、それじゃあ代わりにと文芸部の部室があてがわれることになった。美術科のある学校らしく美術部に対するサポートは手厚いが、万年特段の活動をしない廃部スレスレの文芸部への風当たりは強い。

さて、巨大なキャンバスに描かれた油絵の描きかけ、よくわからない瓶や缶、拳句の果てに石膏像までがみちみちと運び込まれ、数少ない生きている文芸部はその隙間で活動しなければならなくなった。

遅かれ早かれナギがその備品類に興味を持ち、壊すことは目に見えていたので、部長である私は週に一度、ナギをどこかしらのファストフード店に連れ出して部活動をすることにしていた。

ナギはジャンクフードの類が好きなので特に抵抗もなくついてきて、シェイクやハンバーガーを楽しんだ。ナギは学食が嫌いだった。うどんのつゆが薄いから。うどんのつゆが薄いと言い続けたらとうとう出禁になったらしい。甘いものしか受け付けないような顔をして、その実、ナギの舌はかなりバカだ。カラオケのポテトについてくるケチャップを一人でほとんど食べてしまうから、ポテトが食べたいと言い出すときはモスに連れて行く。

ナギがモスバーガーに嘔みつくのを見かねていた。紙の中にばたばたとミートソースが

落ちていく。

厚切りのポテトはいつもよりしょっぱくて、指を舐めようとしたがナギにじっと見つめられているのに気づいてやめた。ペーパーナプキンで油をふき取る。

「一日勉強するとおなかがへるな」

「勉強してたの、偉いじゃん」

「んはは、なわけないじゃん」

スクールバックから取り出されたのは学習用には上等すぎる、上質紙仕立てのツバメノート。中にはお気に入りらしい烏色の薄いインクの字。携帯用の万年筆でみっしりと小説が書きこまれている。

ぱらぱらと確認する。綺麗な楷書の流れをそのまま映したような、美しい文章。筆の運びのままに感覚を追体験させられるような、エッセイ。いつも駄菓子のようにくだらない話題を話すくせに、嘘みたいに静かな文を書くひとだった。

「どう？」

頭から慎重に読み返す。上手い。とても上手い。筆の運び、風景の切り取り方、完膚なきまでに打ちのめされる。私より上手い。私が数時間かけて拾い上げる言葉をナギは知っている。体の中にもう持っていて、自分の肉になっている。必要な時に必要な文だけそれをちぎり取って、拾い上げて差し出す。

私の分のポテトをつまもうとするナギの手を叩き落とし、もう一度頭から読み返す。無性に喉が渴いているときの感覚に似ていた。もっと飲みたいと思わせる何かがあった。水なんかじゃない。甘いのに似た味がある。きっと酒に似ていた。

「カオルっちは好きよね、小説」

「.....」

「カオルっちはなんか書いたの？」

「.....あ、何？ 何か言った？」

「んー、後でいいかな」

ナギはいつのまにかスマホを弄っていた。十中八九今の女への連絡だろう。

「ねえ」

「お？ 読み終わった？」

「これ、どうやって書いたの」

「どう？ どうって.....書こう！ と思って書いた？ 英語のあのじーさんのほうの授業、暇なんだもん」

ナギは笑って、Sサイズのコーラに口をつけた。どうして天はナギに物書きの天賦の才を与えたのか、さっぱり分からない。

「アタシはカオルっちの小説、好きだよ。読みたい。持ってないの？」

「今日はね」

嘘。昨日書いた小説は Google ドキュメントで共有されて、私のスマホから開くことが出来る。でもナギに読ませるようなうまい文章じゃない。

ナギは私の小説や詩や散文を好きだという。取ってつけたような語彙と、何処かで見たとような言い回しの羅列が好きだという。私はそのたびに嘘だ、と言ってナギのことを

殴りたくなる。そんなことしないけれど。

「ナギは、どうして抵抗しなかったの」

「何の話？」

「今日の、あの女の子との話」

「あれね、なんかどうでもよくなっちゃった」

「そう」

ナギは殴られることを何とも思っていない。自分の焔が燃えるのを傍に立ってみている。ナギはその火を止める方法が無いのを知っているから。何もしない。ナギは自分に興味がない。

「カオルっちは私と遊んでくれるっしょ？ 私はね、それがいつも超うれしいの。だから細かいこと忘れちゃう。どうでもよくない？」

「遊ぶ相手なんていくらでもいるでしょ」

「良い女の子は天国に行ける。私は悪い女の子だからどこへだって行ける。カオルっちが行けないところにもね」

「悪人め」

「人生で一番楽しいのは悪いことしてるときじゃなく、良い子に悪いこと教えてるときだぜ？ パーッとやって死のう」

「.....ねえ、ナギ」

ナギはこちらを向いた。長い前髪の合間、薄い瞼の下に薄い茶色をした虹彩がきらきら光って見える。雀色に似ていた。

「何」

「ナギにとって私は何なの」

「何？ 何がいい？ 部長と部員？ 友達？ 恋人？」

「違う。ナギが私に何という名前を付けているのか教えてほしいの」

ナギは目を伏せた。泳ぐように視線がテーブルをなぞる。

「私、そんなに素直な女に見える？」

「.....あのね、私が思うのは、ナギの小説はナギが今、愛している、愛している？ まあいい、今回はそういう話じゃないから.....ともかく、愛している人に読ませるべきなんじゃないかと思うの」

「駄目だよ。だってあの子たち、小説読めないし」

「読めない？」

「小説は緻密な自傷だから、そういうのを我慢できるひとじゃないと読めない」

ナギはペーパーナプキンで指先の汚れをふきとって、くしゃくしゃにしてトレイの上に投げた。

「カオルにはそれが出来るから。私の本命はカオルだよ」

ずるい。ナギはずるい。いつもそうやって私に、才能を見せびらかすみたいに振舞う。

私はいつも、小説を書くのをやめてしまいたい。

○

ナギとの連絡にはラインではなくメールを使っている。ナギが女をひっかけるメインツールたるラインで同時並行的に処理されるのが嫌だったのでIDすら教えていない。

ナギはあっさりラインのログなんかを消してしまう。ナギにとって言葉は流れる水のようなもので、書き連ねたそれを捨てることに一切躊躇がない。原稿用紙を持ち出して、とっくに使われなくなった焼却炉の跡地で焼き芋を始めたときに学習した。「だってもう要らないんだもん」というのが本人の談。

勿体ないと思う。ナギの文章は液晶上に浮かんでも洒脱で綺麗なのに。

文豪のラブレターという本が図書室の新刊のコーナーに陳列されているのを見て、ナギの顔が浮かんだ。ナギは手紙を書いたことがあるのだろうか。カオルの知る由もないところで誰かが手紙を受け取っているのかもしれない。

小説を一区切りつけても休み時間はまだ残っていた。教室に残る乙女たちはまばらだ。スマホを取り出してメールアプリを開く。ナギとのチャット欄には簡素な吹き出しが並んでいる。

『待ってる』

これは委員会に出て、下校時間のずれた私のことを待っているときのメッセージ。ナギは教室でアルフォートを食べていた。たしかそのときの彼女に貰ったもので、期間限定の何とか味だった。

『今日、楽しみにしてて』

この日のナギは香水、オーデコロン、とにかくそういうものを付けていた。子供っぽいくらい甘い桃の香りがして、本人はけらけら笑っていた。小説の資料にしたかったらしいが、結局小説に桃の香水が出てくることはついぞなかった。ナギの匂いは夏に入るにつれてシーブリーズの石鹸のような匂いになった。

ナギのことが好きとか嫌いとか、そういうことはよく分からない。強いて言うなら嫌いなかもしれない。ナギの書くものを読むたびに嫉妬で思考回路が焼け付きそうになって苦しくて、同時に言葉の奔流でくだらない自尊心が粉々に砕かれる。

ナギの書いた文章ならどんなものでも読んでみたかった。ナギの書いた文章の数だけ心を乱したいと思う。もし盗み見るような卑怯な手段を使ったとしても。

○

菅原女史は同じクラス、私の後ろの席に座っている。一五〇センチあるかないかの小柄な体は制服に半ば沈みこむようで、自由気ままな癖毛にいまどき珍しい丸眼鏡がどこ

かコロポックルのような可愛らしさを醸し出している。

当人は漫画研究部に所属するが根っからの文学少女。びん底眼鏡は長年の読書習慣に培われた極度の近視の結果である。

読んだものには必ず感想を返すマメな性格。漫画研究部発行の部誌に掲載された短編の、緻密な心象描写のクオリティは知る人ぞ知る高さだが、「小説に関しては私は読み専ですのぞ」というのが本人の談。

小説、特に恋愛小説が好みで、今書いている小説も何度か菅原さんの感想を貰っている。ラインごしに分かるくらいすさまじくテンションの高い感想を。

色々と考えてしまい、オーバーフローを起こした頭のまま自分の席に着く。おはようございます！ と小さな体の元気なあいさつに若干の耳鳴りを感じつつ振り返る。

「カオル殿！ いや昨日の展開は熱かったですね！ 菅原、ついついお布団の中で声を上げてしまいました」

「ありがとう」

「ご気分が優れないようですが、いかがなされたか？」

「.....ナギ、ナギのことがね」

「清瀬風殿ですか。それはそれは.....お疲れ様でありました」

菅原さんは喋り方は特殊だが空気は読む人だ。声のトーンを落とすと席に着いた。小柄なだけあってちょっと足が浮く。

「清瀬氏の噂はかねがね聞いております故.....私のような末席の人間にも届くということは相当なのでありましような」

「別にどうこうしようというつもりはないんだけどね」

「うーむ。カオル殿は清瀬氏のことをおもわれているのですな」

思う。想う。懸想する？ 不毛な連想をやめる。

「ねえ、私は.....好きなんだと思う？ ナギのことが」

菅原さんはわざとらしく咳きこんだ。動揺の表現がいかにもラノベっぽい。体が小さい分、咳のひとつひとつの音程が高いな、なんてどうでもいい観察をしてしまう。

「そっ、それはラブの意味で？ それともライク？」

愛憎入り混じった感情とは英語で何というんだろう。思いつかないから安直にライクで代替する。

「.....ライク、なんだけど、それにしても世話の焼きすぎかなって最近思っ」

「おお.....否定はしませんよ。というか現にこの菅原、カオル殿と清瀬氏はそういう関係なのかと思ひ込んでいましたし」

「えっ」

「あの清瀬氏の横に一番長く並ぶ女、そりゃ並大抵の関係ではないことは明白でありましよう」

少なくともナギにしてみれば嫌じゃない、不快ではないというのが近いのだと思う。ナギは私を遠ざけず、しかし私がいようが関係なしに女を誑しこむ。

「ところで、カオル殿の話聞く分には、清瀬氏の描写はあくまでも観察対象に過ぎない

ような印象を受けますね。彼女の描写から意図的に心象を排除しているというか……カオル殿、実際のところどうなのですか」

「どうって」

どう、どうと言われても困る。ナギは、私の側でいつまでもだらしなくあり続けると無意識的に思い込んでいた。家族のように、好きとか嫌いとかではかりとれる物ではないような。

「古典的な手法に頼るのも悪くないんじゃないか？ と菅原は思いますがね」

「何？ のろし？」

「や、お手紙ですよ。ラブレターやもしれませんが。ほら、この学校じゃ珍しくもないことでありましょう——」

チャイムが鳴って乙女たちは蜘蛛の子を散らすように席へ帰っていく。なんだか酷く疲れた。そのまま机に突っ伏して寝てしまいたかった。

○

その日、委員会から抜け出すのにやけに時間がかかった。生徒会選挙が近く、一挙に増加した掲示物は広報委員会の活動時間にもろに影響する。金曜日は文芸部の活動日だからナギが待っているのに。

どうにか自分の受け持ち分を処理して抜け出し、ナギを拾いに向かうと、ちょうど部室から乙女が一人おびえたように飛び出してくるところだった。

背丈はたぶん一六〇センチほどあったが、顔から稚さが抜けない。首まで真っ赤にしていたのでなおさら幼く、中学生のように見えた。きっと美術部の一年生だろう。

ナギは未だに物の海の中に沈んだままの文芸部室で指先を弄って遊んでいた。勢いをつけて剥かれたささくれから血がじわりと滲む。

「ナギ」

「おつかれ。広報委員なんて辞めたら？」

「辞められるなら辞めてる。ナギの女癖と反対なの」

ナギはスクールバックを拾って肩にかけると、床の瓶類をひょいひょいと越えてこちらへ歩み寄る。

端によけてあったマーメイド紙の封がその拍子にぷちんと切れて、ざあっと画用紙が床一面に散らばった。片足立ちのナギはこういうときに限って急に「備品を壊しちゃいけない」という約束を思い出したらしい。よろり、バランスを崩した。

ほんの三〇センチ先のナギの手を衝動的に取った。乱暴に拾い上げた指先は深爪ぎみに切りそろえられていて、指の腹が薄く手のひらを削り取った。

「あっぶな……カオルっち、平気？」

「……ナギは」

「何？」

「女の子を抱いたこと、あるの」

「何さいきなり」

「いいから」

「そりゃあるよ」

ナギは姿勢を正した。長い前髪がぱらぱらと脛にかかって、またいつもの、クラゲのようなゆらゆらとした立ち姿に戻った。なおもナギの微笑はひょうひょうとして途切れない。いつも眩しいものを見るみたいに笑う。

「ねえ、それってどうなの？」

「カオルっちも興味あんの？」

「勘違いしないで。小説に使うの」

「別に、いつもカオルっちが思ってるようなやりかたとは限らないよ」

ナギは自分の首に、絆創膏が巻かれたままの指を添えた。指は骨と、首の筋肉との形を辿って、輪郭へ触れる。心地よさを隠しもせず、薄い脛の下で伏せられた目がふっともたげられた。

「こうやって触れるだけで気持ちいいの、知らないでしょ」

両手の指が首にかけられる。細い首に。ナギのからからと軽い笑い声が低い天井にきんと響いた。今、自分はどんな顔でナギのことを見ていただろう。

○

いくら文章が好きだからと言っても、ナギという圧倒的な人格破綻者に付き合えるのは何か特別な理由がなければおかしいという菅原さんの意見は至極真っ当だと思う。実際、ナギへのいろいろの感情に言い訳を付けるためにナギの小説を利用しているのかもしれない。頭が固まってしまって、小説というコンテクストなしには人格を読み取れないくらい私の嚙下能力は弱まってしまった。小説で馬鹿になったのだ。

馬鹿なことをしているという自覚はあった。ナギが乙女と連れ立って学校を後にするのを見送ってから、電車で二駅向こうの文具屋に向かってレターセットを買った。白地に薄くスズランの絵が入っただけの簡単なもの。

借りてきた「文豪のラブレター」を何度も何度も読み返した。ルーズリーフに書き出しのパターンをいくつもを練習した。入学祝に貰ったきりになっていた万年筆にインクを吸い上げて、レターセットの白地にペン先を置いた。

愚直な言葉。ずっと前からあなたが好きです。あなたの恋人になりたい。どれだけ読んで語彙を拾い上げても足りない。私はナギになれない。

紙にペン先が引っかかって字がぐしゃりと滲む。ナギの真似さえ満足にできない。それでも無我夢中で書いた。

雨の中を走るように、便箋の二枚目の中ほどまで一息に書いて、差出人の名前の段で筆が止まる。もちろん「藤原香」と書くわけにはいかない。なるべく可愛らしくて、恋なんて知らないような乙女の名前がいいだろう。紫と書いてゆかり。若狭紫。万年筆を置いた。

「このお便りにもしお返事を下さるのなら、図書室の、与謝野晶子の詩集の一〇〇頁目に挟んでください。もしお姉さまがお返事をくださいましたら、私、必ずお返しいたしま

す——」

いつもより一本早いスクールバスに乗って、ナギのいない後ろの席につく。朝練に出る生徒たちの人目を盗んでナギの下駄箱にラブレターをしまい、逃げるように教室に戻って数学の問題集を開いた。何も頭に入らなかった。

ナギの関与しないところでも乙女どうしは曼荼羅のようにそれぞれのネットワークを緻密に結び合っている。女しかいない世界では女は色々な代用品にされる。憧れの王子様、尊敬すべきお姉様。そういう名前のついた関係が無数にあって、それぞれに心のきめ細やかなやりとりがある。

手紙という媒体はなかなか評判がいい。乙女の教養、知性がもっとも顕著に表れるから。無数に流れるラインの吹き出しと違って、大切な宝物になる。

こと「お姉さま」と呼ばれるような関係については手紙のやり取りが必須のような節があって、誰も表立っては言わないが乙女たちは必至で歳時記を引き、万葉集を読み、必死に身に着けた教養で手紙を書く。誰が始めたわけでもない。全員、「お姉さまがそうだったから」前に倣えでそうしている。

およそ慣習に興味のないナギは、果たして手紙を返すだろうか。

昼休み、人波から逃げるように図書室に駆け込んで、埃をかぶった全集の棚から与謝野晶子を取り出す。活版印刷の文字が透けるほど薄い紙をさらさらとめくると、覚えのあるツバメノートの一頁が破り取られて挟まれていた。

『若狭紫さま』

いつもの薄墨色とは違って、洒落た海老茶色のインクだった。生まれて初めて見るナギの手紙だった。

手紙は、ひとつの大きな龍の体のようだった。非生物的な鱗が生き物の上で規則的に並ぶように、言葉が緻密に、生き物の形をとって呼吸している。

その熱はまだ見ぬ「妹」への愛情だ。紫という乙女のために清瀬凧はこれを書いたのだった。

私は本棚に寄りかかるようにして手紙を全部読んだ。読んだ瞬間、私は何を思ったのだろう。

便箋も封筒もたくさん余っていて、私はいつでも紫になれた。私の拙い、青臭い文章はむしろ一年生らしいリアリティを伴った文面に変化した。

私は、ナギの隣に立っているのが怖くなっていたのかもしれない。ナギがショーレースやコンペの類に興味を示すことはなかったから、私はナギの作品を正面切って受け止める第一読者だった。

書き手としてナギの文章に触れることがたまらなく苦しい。

ナギの文章はいつも、目が覚めるように鮮烈で、五感を内側から震わせる。私はナギの見たもの、感じたものをその痛みごと追体験する。

一方でナギの小説を読んだとき、粗が指先に引っかかる感触を拾い上げて、心の底で喜んでしまう自分がある。匿名でナギに手紙を書かせて、安全圏から手紙の文面だけを読み取る自分がある。

初めてナギから甘い言葉を受け取った。盗み聞きのようなひどいやり方で。でも私がこの紫という少女のペルソナを壊す必要は無い。ナギは紫の正体を知らない。

ナギと私、それと紫の日々はそれなりに穏やかに進行していた。文体は意図的に私のそれからずらしたし、筆跡に関してはそもそもナギに対してはタイプした文章を読ませることしかなかったから、バレるようなことは早々なかった。

急ぎ足に初夏も梅雨も過ぎ去って、夏になった。制服は烏色から白と黒のツートンに変わり、ナギの彼女もまた変わった。ナギがどの段階で気付いたのか私には分からなかった。ナギは馬鹿な女のふりをするのが上手いから。

○

その日、ナギは部室に来なかった。前日にどう連絡しようが必ず部室に顔を出すナギらしくない。

ナギの教室へ顔を出すも、「清瀬さんは貧血で保健室に行った」と吹奏楽部らしき少女につれなく返されて、放課後なのに保健室まで迎えに行くはめになった。

日の傾いた保健室の中、ひとつだけカーテンが閉まったベッドがある。  
「ナギ？」

カーテンの隙間からするりと腕が伸びてきた。暑くて意識がおぼつかなかったのか、お腹が減っていたのか分からないけれど、めまいで崩れこむようにベッドに倒れこんだ。これがナギの常套手段なのか。するりと腕がすべり込んできてそのままナギに両腕を拘束された。

寝ころんだまま見上げたナギの香りは、混じり物のない桃の香りだった。混じり物がないからこそ作り物のように、安っぽく感じられる。

桃の香りは、乙女のどこか甘ったるい汗のにおいと混じって、暑い中で境界を失っていく。ナギの体が天幕のように体を覆う。ナギのいつもゆらゆらと揺れる瞳がつとにこちらを射抜くので、体が動かせなくなる。保健室の硬いベッドに打ち付けられたようだった。

「ねえカオル、聞いて。一度しか言わないから。私はカオルのことが大好きなの。私のことを分かってくれるから」

一瞬のブレスの音が明瞭に聞こえる。聞こえてしまうくらいすぐそばにナギがいる。私はナギに押し倒された形のまま、信じられないくらい強い力で両手を取られていて、逃げるなんて安直な逃げ道が許されないことが分かる。

「私にとってカオルは北極星なの。船乗りの道標、私の天巧星……星は絶対に触れられない、触れられちゃいけないかったの。でもカオルは私に触れた。私の心を食べた。カオルの心、いや心じゃないな。カオルがものを思うときに使う言葉のすべて、カオルが物を書くときに使う血と肉と骨のすべてがナギになっちゃえばいいのにつずっと思ってた。いつまでも私の小説を読んでくれればいいのにつ思ってた……」

なぎ、と声を出した。掠れて上手く音にならない。人誑しで女好きのナギはもういない。やせっぽちで泣き虫の清瀬凧が私の腕を掴んで、離さない。

「……ねえカオル、私はね、ずっと死んだような心地の中で生きてるの。痛いのも、楽しいのも私にはよく分からなくて、麻酔を打ったみたいな冷たいのが皮膚の下を流れるような感覚の中、曖昧の中で溺れてるの。

恋は好き、でもすぐに醒めちゃう。どれだけ痛くても苦しくてもすぐに霞んじゃう。ただ眠りたくないだけなのに、なんでこんなに苦しいのか分からない。

……でもね、カオルが私に話しかけて、カオルが私を食べて、カオルが私を見ている瞬間だけは生きている。ナギはその時だけ目を覚ませるの」

違う。それは違う。ナギはいつも鮮烈なまでに覚めていて、世界のすべてが見えている。

目覚められないのは私だ。ぬるま湯につかったように外の世界から目を逸らして、自分の語彙に溺れている。紫の仮面を被って人をもてあそんでいる。

私の言葉は世界の緻密な観察に基づくわけではない。自分の肉を少しずつ食べるように、陳腐だらけの自分の辞書を引きながら小説を書いている。空想の、おとぎ話のような恋を書いている。

ナギの手のひらが頬にかかっているみたいだ、とっていた。でもそれは目を瞑ったままの私の現実逃避だ。私はナギの作る安楽に甘えていただけだ。私の目を塞ぐのは私の指だ。

「若狭紫、違う、藤原香、どうして私を見るの」

私は答えられない。ナギのことが好きだ。けれどいつまでもナギを認められない私は、ナギのことが大嫌いだ。私のことが大嫌いだ。

「ごめん」

身をよじってもナギの指は離れない。細い指が肉に深く沈み込んで、痛い。

「ナギ、許して」

「何を」

「私を許して」

ナギは糸のほどけるように笑った。薄い頬に瞳が隠れた。西日がナギの髪にさして、細い髪はきらきりと光る。

もう力が入らない体にナギの手がゆっくりと首に添えられた。指は首の血管を、手のひらは気道を塞ぐように。らしくないくらい熱い手のひらだった。

指のふれるくすぐったさごと押し潰すようにゆっくりと力が籠められる。  
ナギの力は弱い。それでも息が上がる。生理的な涙がぼたぼたと上がってきて、ナギの顔が見えなくなる。

痛いということは、思っていたよりもずっと熱くて苦しくて、声が出ない。見えるものすべてが眩しくて、人の熱の溶けたシーツ、濡れて張り付いた髪、すべてすべて境界が溶けてしまうくらい綺麗な夢だった。

肌と肌を触れ合わせても、血管を塞ぐくらい強く抱きしめても、ナギの体の輪郭が私になることはない。こんなに近いのに、私はナギにはなれない。

了

## 忌ミ島

忌ミ島

帰路につくクルーザーは静寂に包まれていた。

男、加賀崎(かがさき) 朗子(ろうじ) は、仕事上の処理の一件を巡り、同僚のジュディと激しく揉めたのだった。最終的に、朗子の案が採択された。静けさは、その決定の結果によるものだ。

未明。佐渡ヶ島を震度六弱の地震が襲う。直後、三つの火球が大気圏から降り注ぎ、道遊の割戸へと相次いで衝突したという。

○

「バカンスって、もうちょっと華やかな島を想像してたんですよー。ぼく」

「方便だからね」

「分かってましたけど。もう少し取り繕うとかないんですか、先生。詐欺ですよソレ、詐欺」

「だって、適当なエサで釣らないと、やる気出さないだろう？ 君」

「今、ご自分がとんでもないことおっしやってる自覚ありますか？」

「いい日だね」

「全くです」

洋上を駆けるクルーザー、天の真中に昇った太陽。親の姿を探す子のように鳴くカモメの群れ。流れる潮風は穏やかそのもので、本当にいい(・・)日(・)だった。こんな長閑な一日に、先生のお誘いさえなければけど。

「で、今回は何をします？ ぼくは平和な観光を所望しますけど」

「勿論、おいしいごはんに柔らかい布団、地域の観光名所に赴くぐらいはするさ」

「ええつまり、その三つのうちどれかに、致命的な問題があるってことですね」

「そうだね」

「なら最初から、すっぱり言ってください」

「味がないじゃない」

「事務連絡に外連味なんていません」

先生はいつも、質問に対して回りくどい答えを返す。月が丸い理由を問えば、地球が丸いからだとか。太陽が赤い理由を問えば、リンゴも炎を同じだとか。わざと一歩外したような返答をしてくるのは、先生が意地悪な人なのだろう。

訂正する。どちらかと言えば、先生はそう(・・)いう(・・)人(・)だから、だ。

「どこの、なにです。危険性は」

「山だよ。金山だ。江戸時代以前から掘削が開始され、一時期は中止されたものの、明治期になって再開した山。掘りすぎて二つに割れた山だ。いい観光になるだろう？」

「そこに、なにがあるんです。あと繰り返しますけど、危険性は」

「ロクでもないものさ。危険なことは確かだろうね」

「他人事みたいに……」

「明治期以降、なぜか軍隊が金の掘削に関わっているんだけどね。行方不明者の数が、三桁を超えているんだよ。対照的に、金の産出量は、年々、加速度的に目減りしている。掘削計画を続けるメリットは少なかったはずなのに、軍の上層部は頑なに計画の中止を拒んだらしい。ねえ、なんでだろうね？」

「知りませんよ、そんなの。何が出るんです。鬼ですか、蛇ですか」

「それ(・・)を見て生きて帰った人が少ないから、真偽のほどは不明って感じだけど」

剣が出るらしい。操舵室へと去っていく背で、先生はさも興味なさ気にこぼした。加えて。

「この核心は、もっと別の何かだろうけどね」

そういうところだ。答え合わせが妙に遅くて、同行するぼくに逐一伝えてはくれないところ。ミステリーに出てくる探偵みたいな完璧主義者。問い詰めたって、今は良くわからない、とかなんとか言ってはぐらかされるのがオチだろう。

ちょっとだけ不服だ。慣れてしまった自分には、もっと不服だけど。

○

檻が持つ意味は、隔絶である。これは壁が持つ意味に起因する。壁が持つ意味は、分断である。壁を持って四方八方、及びに上下左右、を分断する。これをもって隔絶された不可侵領域が檻である。

厳密には。世に檻とされる大半は不完全な概念である。土壁には穴が開き、鉄の錠は錆び朽ちる。牢はいつでも完璧な隔絶たり得ない。理由は単純で、入り、出るから。これに尽きる。

本物の檻には、出ること入ることも許されない。そこに現れたが最後、世界は切り取られて然るべきなのだ。

○

港には人気がなかった。島と言っても随分と、いや、日本一大きな島に向かっていたはずなのに、ぼくらが降り立ったその地に人影は一つだって見えなかった。

「なんか不気味なくらい静かですね。世界が終わっちゃったみたい。みなさん、どこか行っちゃったんでしょうか？ お祭りとか」

「みなさんって、誰のことだい？」

「そりゃ、港に居たはずの方々ですよ。え、無人じゃないですよ、ここ」

「保険に結界ぐらいは張られているだろうけど、元々、この場所に人間なんてそうそういないよ」

「ちゃんとした説明を求めます。先生」

不穏な気配を感じたら、敏感に対処する必要がある。傷口はすぐに広がって膿み、取り返しのつかないことになるまでは非常に早い。先生の言葉だ。皮肉なことに。

「普通(・・)に、航行していれば、賑やかな港についたろうけどね。海の道なんて幾つもあるだろう？ 上と下を合わせれば、それこそ限りなく。私がわざわざクルーザーなんて引っ張って来たのは、つまりはそういうことさ。自分で道を選ぶ必要があったんだよ」

「何をおっしゃっているのか分かりません」

「道ってというのは大事なんだ。どのように辿るかで、どこに着くかが大きく変わってくる。亜細亜(あじあ)・印度(いんど)を探したコロンブスがいい例だろう。丸い地球の上で、西周りに時を進めたばかりに、彼は新大陸に漂着することになったのだから」

「彼は.....インドに辿り着いたとは言えないのでは？」

「私たちは、どこに辿り着いたのだろうかね？」

さっきからそれを聞いているのだ。詰め寄ろうとした矢先、ぼくの背後から陽気な女性の声が聞こえた。

「ハイ。ロジー、シオン、元気にしてた？」

「見ての通りさ」

「あ、ジュディさん。お久しぶりです！」

駆け寄って来た彼女に抱き上げられ、ぬいぐるみのようにひよいと掲げられる。ひゅっ、

と息が詰まって声が出なかった。頭なりお腹なり、ひとしきりさすりまわされた後、彼女はぼくを解放してくれた。

「彼は君のおもちゃじゃないんだけどね」

「いいじゃない。あなたが素気なくしている分、わたしが愛情を注いであげてるの！

ねー、シオン？」

同意を求めないで欲しい。曖昧にうなずきながら、内心で苦笑していた。いい人なのだが、ぼくにはどうも距離感が掴めない。

「首尾は？」

「上々。楔の場所と大きさは把握した。骨が折れたわよ、アレの確認は。場所が場所だし、妨害もひどい。即席の結界は張ったけれど、あまり効果はないでしょうね。道中の危険は覚悟しておいて」

「了解」

「楔の形状だけど、事前に得ている情報通りね。剣の形。よくあるタイプだわ。材質は不明、見たこともない金属だったわ」

「ふむ。私の既知の物質であれば良いのだが」

こうなるともう一人だ。会話から手に入る断片的な情報。それから、ジュディさんが結界の専門家であることを考慮に入ると……。意味がない。バックボーン知識なんて何一つなくても、危険なことだけは瞬時に判別出来るのだ。

分からないのは、ぼくの役割だ。

「結界の寿命はもってあと数か月。猶予はないわね」

「急ごう。私は何をすればいい？」

「いつも通り、封印されたものを推測してもらえるかしら。それから内容によっては対処への協力も」

「わかった。行こう」

言うなり、二人はぼくに一瞥もなく歩きだしてしまった。完全に忘れ去られている気がするが、この人たちはこうなのだ、と最近では学習した。集中すると周りのことがあまりにも見えない。それだけであって、悪意があるわけじゃないのだ、と。少し悲しいのは、どうしたって仕方のないことだけだ。

「先生！ ジュディさん！ ぼくも居ます！」

「当たり前だ」

「分かっているなら、今回の仕事がなんなのかくらい教えてくださいよ！」

「え、ロジー、彼に話してないの？」

「別に必要はないだろうと判断した」

「そんなわけないでしょう！」

彼女が心底驚いた様子なことに、個人的に驚いた。どうも情報は共有されているものとして考えていたらしい。だから先ほどの会話で十分だと判断したのだろう。合点がいった。

「簡潔に言えば腐った結界を開いて、中にあるものに対処する。それだけのことだよ」

「それだけのことだけど……説明が乱暴すぎるの。資料、あるでしょうね、ロジー」

「あるけれども」

「寄越して！」

「時間は？ 急がなくてはだろ？」

「それくらいの猶予はあるわよ、もう」

ジュディさんは先生から資料の束をひたたくって、せかせかとぼくの方に向かってきた。彼女の説明は明瞭で、事の次第は概ね把握できた。次に向かうべき場所も、二人がやるべき仕事も、その分担も。

ただど一つだけ、やはり分からないことがあった。ぼくが、この島に連れてこられた理由だ。

先生は、保険だ、と。よく分からないことを言った。

○

長い時をかけて拓かれた坑道を三人で慎重に進んでいく。ある程度、危険な道のりとはいえ、足元に気をつけていれば、まだ考え事をする余裕もあった。

ヘッドライトの光の中で、一時前の彼女の言葉を反芻する。

今回、組織はジュディさんの方に、仕事の指令を下したようだ。この島に存在する劣化した結界を見つけ、封印内容を確認、再封印か処分、適宜対処せよ。とのことらしい。

彼女は組織から与えられた資料と実際の探索を重ね、この島にある結界についての足掛かりを得た。そして自分一人で対処は不可能と判断し、組織に追加の人員派遣を要求。そこで白羽の矢が立ったのが先生だったのだ。

ジュディさんの専門は結界について。彼女はとても優秀だ、とは古くからの友人である先生の言だ。そんな彼女が助力を求める要素が、先生にあるのか、ぼくには正直分からなかった。

先生の専門は、古物。古物学とは、今では考古学とも呼ばれる学問だけど、先生の担当する古物というのは、少しだけ範疇がずれている。ただ古い物を研究する、ということではなく、魔的なものを研究する者たちの中で、古い物を専門に扱う、という意味合いになる。

先生が必要とされた理由。それは、封印の鍵となった剣の材質にあるらしい。材質一つで何が変わるのだろうか。ぼくは知らなかったし、ジュディさんにはそれが重要だったのかも知れない。何が封印できるか変わる、とか、そんなところなのだろう。

かくして一行は、つまりぼくたちは、結界の鍵の在処である坑道の果てに向かっていくわけである。

ヘルメットは、少し重たい。長くつけていると、始めは気にならなかった疲れを感じ始めた。始めは気になっていたむず痒さはなくなっていた。

そういえば、先生は船舶の上で、この坑道は軍部が掘削を諦めなかった道であると話していた。ジュディさんは特に言及していなかったけれど、先生は、回りくどい言い方をするが、関係のないことは言わない。筋道からずらすのだ、少しだけ。ねえ、なんでだろうね。先生の問いかけが頭から離れなかった。なんでだろう。何かを求めていたのだろうか。求めていた何かがあるとすれば、剣か、封印されたものか、若しくはそれ以外の何かだろうか。見えてこなかった。

ぼくたちよりも、この道の先を知っているのは、百年も昔を生きた彼らの方なのだろう。

「狭くなってくるから気をつけて」

ジュディさんが放った声は、洞窟の暗い壁面を木霊する。水が滴り落ちる音が聞こえる。吹き抜ける風はなく、身を包む気配は歩を進める毎に冷えていく。手をついた洞の壁は、雨上がりのアスファルトみたいに湿っていて、でも匂いはしなかった。肌を突き刺すような凹凸の激しい壁面。人の手で無理矢理に抉られ、長い時を経て尚癒えぬ、山の傷跡。

時折、ゆすぶられるような心持がして、それはきっと幻覚か、寒気からくる背筋の震えなのだろうけど。まるで、この山が活着しているかのような錯覚に囚われていく。

坑道の入口、その外観が、遠くから眺めると、口を広げた竜のように見えたことを思い出した。一歩、一歩、山の食道へ、その腹の中へ、深く落ちていく。

どのくらい歩いたのだろうか。不意に視界が開けた。同時に、ジュディさんの指示が飛ぶ。

「気を付けて。ここから先は、何が出るか分からないから」

先生は右手には、いつの間にか拳銃が握りこまれていた。M1873、コルト・シングル・アクション・アーミー。通称ピースメーカー。先生の愛用の品で、魔的なものには通用しない筈の(・・)お飾りだ。

○

彼女を先頭に、慎重かつ迅速に鍵を目指して進む。広がった坑道は、地下道と呼び変えて差し支えないほどに広く、三人並んで走っても余裕があった。反対に、ぼくにまとわりつく空気は更に冷たく、近くなったように感じられる。死角から誰かに見られている時のような悪寒がした。それがずっと。

まだ、何も出てこないだろう。何かが現れる時、悪寒は一瞬、姿を消すからだ。呼吸が止まったみたいに、肌をなぞる温い冷気も、まとわりつくような視線に似た違和感も、全てが一瞬に停止する。僅かな後に、在るべきではないものが、ぼくのすぐ側に現れる。

ざ。ざ。ざ。地を掃く靴底。

か。か。か。打ち鳴らす踵。  
と。と。と。木霊する足音。  
。 。 。 自明なる合図。

「来る！」

先生は流れるような動作で弾丸を放つ。道は更に拓かれ、広場のようになった間であった。弾丸は壁に打ち付けられ、甲高い悲鳴を上げる。散った火花は落ちる最中に、異なる者の姿を表した。

人の容(かたち)をしていた。それは虚(うつろ)であった。  
やぶれた軍服を纏っていた。総(すべ)てが嘘であった。

ぼくは咄嗟に飛び退いた。ぼくの後には、もう一人、もう人ではない何かがあるにあって。先生は振り向くこともなく、頭蓋を打ち抜いて蹴りを見舞った。

悪寒は人の持つ優秀な機能だと聞いた。ぼくにそれが備わっていたことを何度感謝したことだろうか。

振り向きざま、左足を軸に、腰を中心にして右足を振る。力ではなく、流れによって体を操る。先生が趣味で嗜んでいる武道は、ぼくの護身具でもあった。足の甲に、柔らかく冷たい感触が押し掛かる。靴に染みるような不快な気に、判断力を奪われてはいけない。迷わずに蹴り抜く。

そうして、引く。引き足は連撃、反撃への対処、両面の肝になる。その起き上がりは早かった。

「シオン、使って！」

声を張る余裕はなかった。彼女が投げて寄越したのは、清潔な布に包まれた骨董品(アンティーク)の大型ナイフ。手には馴染んだし、これで良いことも知っていた。拳銃の火力がなくても、効果的な武具はある。命なき邪なる者に、必要なのは祓(はらえ)の儀。右手で握りこんだ刃には、そういう力があるのだろう。

ぼくには分からないけれど、先生の友人から借り受けたものならば、信に値すると思えた。

向かってくる骸に知性は無いようで、動きは緩慢で隙だらけであった。止まらない悪寒と、足にまとわりつくような恐怖を除けば、目の前のそれは幼稚な的だった。

怒気を孕んだ先生の方が、よっぽど恐ろしいだろうな。そう思ったけれど、ぼくはそんな先生の姿を想像できなかった。

関節の動きを無視したような、体が悲鳴を上げているような、軍刀による強引な横振り。射程に一步入りこんで誘い、上体を反らすようにして一撃を躲す。

三歩踏み込めば懐。逆手に強く力込めて、首元を一閃する。

ぞ。ぞ。ぞ。人ではないそれは、人の命を奪うやり方で、上手くいくとは限らない。

向かって左の空白へ、屍(しかばね)の右側面へ、体をくねらせるように潜り込む。案の定、それは目の前に居たはずのぼくを抱きかかえようと試みた。ゾンビ映画というやつを見ると、屍は大抵、真正面から獲物を殺害しようとする。同様だった。知性がないのだろう。五感も鈍いのか、若しくはないのか、ぼくを再び捕捉するまでに、ひどく時間がかかっていた。

獣の動きは五感に基づく。故に鋭敏ではあるが、選択肢に欠ける。

賢しなるものの動きは思考に基づく。故に緩慢であるが、豊かな選択肢を持つ。

殺す者の動きは経験に基づく。故に鋭敏であり、豊かな選択肢を持つ。

どれもでない。ただ自動的であるだけの人形は、尋常(じんじょう)なる者には強くとも、対処を知った者には弱い。

操られたるものの動きは操者の記憶に基づく。故に執心是につき、夢中の如く突飛である。

素早く順手に持ち替え、左から入れた刃を、無心にて振り抜いた。左手で後頭部に張り手を打ち込む。重たい頸は洞穴の床に転がった。

肩に手をかけて、その体によじ登る。頸椎を避け、黒々と腐った肉に刃を挿し込んだ。深く、深く。怨嗟の染みた柔らかい空気が、全身に這う。

鼻腔から脳髓を犯す。腐臭と血と、甘美な魔の誘いに感じた。

汗で張り付いた上着の隙間に、この世のものでない温もりが爆ぜた。ないも同然だった体温が、少しだけ戻って来たように覚えた。

背にあてたつま先から、靴下にまでしみ込むような負の流れ。弱まっていく。たじろいでいく。離れていく。まだ何かを蹴っている感覚には遠く。

もっともっと、深く、刃を握る腕に圧をかける。体重を乗せて、肉ごと振じって、息を吐く。

冷たい光が放たれる。おそらく刃からだ。屍の両腕が、手首をあり得ない方向に傾けて用意された刃が、ぼくの命を刈らんと集(たか)ってきた。

眠たく、なってきた。魔が体を蝕んだのだろう。

「シオン、飛んで！」

遠ざかり始めた意識の端に、ジュディさんの声が届いた。余力はなかった。けれど飛んだ。

無様な体勢だ。飛んだというより、脇に崩れ落ちたという形容が適切だろう。

頭を庇った左腕に、底面の砂利が刺さった。まだ痛かった。ぼんやりとした視界の中で、ぼくが首を飛ばした何か(・・)に、刃を振り抜く一体が確認できた。ぼくの悪寒ではもう気付けなかった、死角からの一撃だった。フレンドリーファイア。もっとも、あの程度、彼らには傷にもならないだろう。致命という概念すら、存在しないのだろうか。もう、命なんてないから。

祓の光線が、重なった二体を貫く。ジュディさんの術だった筈だ。始めから、こうしてくれれば良かったのに。遅いよ、なんて、笑えなかった。

「大丈夫！？ シオン」

ジュディさんが駆け寄ってきて、先生は明後日の方角を向いていた。なんていうか、ほんとうに。

「うん。くらくらするけど、すぐ治る。でも、これ」

ゆっくりと上体を起こす。不浄なる気は遠ざかったみたいで、視界がゆるやかに輪郭を取り戻してきた。

「ただのナイフみたいだったよ。ぼくじゃ上手く使えないみたい」

彼女が驚いたようにしていたから、ぼくは精一杯に笑い返した。うまく出来ているだろうか。

「ごめんなさい。付与が甘かったかしら……」

「大丈夫。なんとかあったしさ。急ごう、ジュディさん」

戸惑った風なのを隠せないから、きっと優しい人なのだと思う。あまり向いてないって、その仕事はって、先生が言っていた。

先生が言っていた。

先生が、言っていたな。

何を考えているのか分からない先生は、関係のないことはしない。ぼくが連れてこられた理由が、まだ分からない。

○

死と眠りはよく似ている。安らかであるほどに良い。一つ、類似しない点があるとするれば、死は苛烈であっても良いということだ。苛烈に極まれば、痛みを忘れる。どちらにしても、頭が冴えているうちは、ロクなもんじゃない。

○

楔のある空間は広くて、澄んだ気に満ちていた。強い結界が生きているからだと言う。これでも弱っているというのだから、ぼくには驚きだった。生の気も、不の気も、場の形次第だ。身を以て感じたのは、これが初めてだ。

広く、そして薄暗いだけの空間の中央に、台座のような構造が座している。四面は段々になっており、最上段は平たく面になっている。ちょうど、ピラミッドを横に切断したような様相だった。旧時代の祭壇なのだろう。なんとなくそう感じたのは、無骨な見た目に反して、その台座の発する厳かな気、つまりは神聖さを感じたからだ。

直観に過ぎない。適当に口を開けば、先生に窘(たしな)められてしまうかもしれない。それは面倒なことだったから、口を閉ざしたまま、ひたすらに目を凝らした。美しいとさえ思った。

ゆっくりと段を上る。台座の面の部分は、広場の中心になる。見渡す限り、闇。何かの気配はなく、ただ静かで、畏ろしかった。

目前に迫るは、太陽が如く黄金に煌めく剣。奇妙だったのは刀身が錆びていないという点だ。

ぼくが息が出来ているということは、この空間にも空気が存在することなのに、目の前の楔は美しく光を返す。艶めかしく、妖しく、照り返す光に目が眩むほどだった。柄に当たる部分は剣の根元へ腐り落ち、半分は風化して粉と化していた。時は確実に過ぎている証拠だ。

「これが楔よ。立派な剣ね、素人目でも分かる。けれど、それしか分からないの。これは何？ 何で出来てるの？ 分からないから……この先はお手上げなのよ」

「確かしてみるさ。少し時間をくれ」

先生は楔の前に跪き、愛おしいものを撫でる時のように手を伸ばした。手袋をした手で、ほんの少し、かするかどうかの刹那、触れる。呪いは瞬く間に伝播するから、迂闊に未知に触れてはいけない。古物を取り扱う上での心得だとか。

五分かそこら、先生はいろんな角度から楔を眺めたり、その刀身を撫でたりしていた。やおら立ち上がる。振り向いた先生の顔は、謎を解いた探偵の顔だった。

「分かったよ。これが何か。あと、何が封印されているかについても、大凡は推測出来た」

先生は手袋を外し、ぼくたちを楔の近くに手招いた。

「この剣、所謂(いわゆる)ところの神器・神具だと考えていい。それは、この剣の材質が証明してくれる」

「神器であることを証明する材質？ あまり聞いたことないわね」

「ああ、君はそうかもしれないな。日本では比較的有名な物質だよ。和名では」

先生は剣の刃に触れる。

「火廣金(ヒヒイロカネ)。青生生魂(アポイタカラ)なんて呼ぶこともある。神話の時代の金属だね」



「ええ。じゃあ、そこからはわたしが引き継ぐわ」

彼女は先生の方へ向き直り、得ることの出来た情報の根拠を話し始めた。

「この儀式空間と楔から、結界の中心がここであることは瞬時に理解できた。それから、楔が少し傾いていたこと……つまり、誰かが剣を引き抜こうとしたこと。それと、道中出てきた動く屍たち。この二つから、結界がもう保たないことが分かった」

ジュディさんが楔を撫でる。その目は少しだけ悲しそうだった。

「坑道から出て驚いたわ。この結界、空間を歪めて、部分的に世界を作っているのだから。人が一人も居ない別世界に迷い込むなんて。こんな結界初めてよ」

本来、結界は空間を歪めるほど強力な力を持たない。空間が歪んでいるのは、異界。だけど、この島に張られていたのは結界だった。異界は、自然の中になら発生しない。孔で繋ぐことが出来るだけだ。

「島から出るのには苦労した。海路を上手く見つけることが出来なければ、わたし、この島で野垂れ死にしていたでしょうね。携帯用の食料を持ってきていて本当に良かった。あなたが通った海路、見つけるのに一週間もかかったのよ？」

目が笑っていなかった。

「おそらく、結界の端は海上にあるわ。広すぎて、全てを調べている余裕はなかったの。ごめんなさいね」

「いや、十分な情報だ。あとは推測で補えるだろう」

もうすぐ、ぼくの知りたかったことに、手が届くような気がして。それは恐ろしくもあった。

「結論から先に言おう。おそらくだが、結界は既に存在しない。というか、最初から存在していなかった筈だ」

「え？」

ジュディさんは目を丸くして先生を見つめた。

「君はこの世界を異界と評したが、まさにその通り、言葉通りなのだろう。ここは異界で、現世(うつしよ)じゃない。常世(とこよ)、幽世(かくりよ)だ」

「どうして、この空間は確かに儀式空間で」

「封印は結界に対してのみ行われるものじゃない。対象に直接封印を施すことだってある」

「まさか」

「そのまさか、だと、私は踏んでいる」

「でも、じゃあ何に対して」

「君だって、もう分かっているだろう？」

海を見ると、巨大な牢獄を想像させた。先生が教えてくれた檻の話のせいだと思う。海が四面にあって、空にはあまり遠く、地はとても堅いから、檻(しま)は万物を捉えてしまう。檻は、その内側と外側を隔絶する。ドーナツの穴がどこからだ、とか、あれと同じような話で、檻は檻を内側に含むか、とか。そんな面倒な話が始まる。異界は、あま

りに巨大な天然の檻だ。天に、地に、海に、何より世の際に。遍く拒絶された天然の檻。「この島だ。幽世に住まう大いなるものを、神器の威力を以て封じ、現世に島として転じさせたもの。儀式は、現世と幽世の境を曖昧に定め、中間に是を縫い付けるためのものだった、と推測出来る」

「だから、楔は剣だってこと……？」

「そう。そして楔であることにも間違いはなかった。どこに打ち込んだ、何を目的にしたものか、が少しずれていただけさ」

どんな檻も必ず破られる。それは、檻という概念が完全であった試しがないからだ。土壁には穴が開き、鉄の錠は錆び朽ちる。理由は単純で、入り、出るから。ああ、なんて矛盾で。どうしてこれを格言みたいに語っていたのか。先生はそういう人で。

でも関係のないことは言わなかった。嘘は吐かなかった。異界は儀式によって孔を穿たれ、現世に反転した。隔絶された空間は、檻の概念に落ちたのだ。

—— 完全なものを不完全にする。不完全なものを完全にする。不可能の反証を行うことが、魔導の本義である。

だとしたら、この剣には今、なんの意味があるのだろうか。

「この剣はおそらく、今も尚、この島を眠らせている。封印を解けば、この島は再び動き出すだろう。ほぼ同時に、常世と現世の混濁も終わりを迎える筈だ」

「解いても詰み、放っておいても詰み、そんなのって……あんまりよ」

先生は、ぼんやりと中空を見つめていた。策は、あるんだ。こうなることだって、考えていたから。先生が言っていた保険という言葉の意味が、天啓のように閃いた。

○

轟(とどろ)く。劈(つんざ)く。それは咆哮で、それは胎動で、それは別れを告げる暁鐘(ぎょうしょう)だった。

天地が崩じ、海へと拓く。天空を三度、星が駆けて、爆ぜる。

先生、聞こえていますか。

先生、見えていますか。

先生、ぼくは役割を果たせましたか。

先生。ぼくは知っています。ぼくを知っている先生のことを。

○

ぼくの役割は、定められた時間に剣を抜くこと。封印を解くことであった。

策があると言った先生は、ジュディさんを言いくるめ、ぼくにデジタル時計を渡して去って行った。決められた時間までに、先生が、もう一度ぼくの前に現れなかったら、封印を解く。言いつけはそういうものだった。

知っている。先生は直接的な言い方をしないこと。

知っている。先生はいい人だけど優しい人じゃないこと。

知っている。ホムンクルスは命に歓喜してはいけないこと。

知っている。保険という言葉の意味を。

知っている。これはひどいイレギュラーだって。

知っている。先生はもう戻ってこない。

知っている。ジュディさんとは喧嘩になるだろう。

知っている。先生が教えてくれた、ほんとうに、たくさんのこと。

魔導士は己が求道のために、自身の命を除く、遍(あまね)くを犠牲にする覚悟がなく  
てはならない。

だから先生には心がない。

だから先生には正義しかない。

いい人だ。

寒いな。逃げていく体温が、ぼくを抗えない微睡(まどろみ)の中に誘っている。先生  
の音が、頭蓋の内で反響を始める。

―― 君の役割はね。

先生に渡された時計を眺め、刃を握りこむ。刀身を血が伝った。どうしよう。もう皮  
膚の切れたことすらも判(わか)らなかった。

―― 君の手で、見つけるものなんだ。シオン。

ヘルメットの電灯が切れた。うっすらと輝く文字盤の数字。これも保険だったとした  
ら。先生って、抜け目ないなあ。

知っている。ぼくだけが知っている。先生のこと。

先生が、ほんとうは誰よりも、魔導士に向いていない人だってこと。

背を向けたジュディさんに聞こえないように、先生は小さな声で呟いた。  
「だから、選べ、シオン。この剣を引きぬいて、ホムンクルスとして死を選ぶか。ここから逃げ出して、人として生きるかを」

知っている。そういうの、ずるい人って言うんですよ。先生。

定刻だ。

時計をそっと床に置いて、左手も刃に添える。  
これを、ぼくの役割にします。先生。

もっとずっと、重たいものだと思っていた。幾千年も眠り続けた大いなる竜 (佐渡ヶ島) は、ぼくの目の前で、あまりにもあっさりと覚醒した。

○

殺せば良い。目覚めた瞬間にもう一度。狭間を去らぬうちに、間髪を入れず。  
そうすれば、遺骸は狭間に固着する。ほんの少しの犠牲を払えば、全てが丸く収まるんだ。

彼は、必ず役割に従じるだろう。

これが、私が導き出せる、ただ一つの道だ。

## 夏の日影から

夏の日影から

遠い夏の日々に想いを馳せる。

目を焼くほどの日差し。遠くから力強く響く蝉の声と、唯一の家族である彼の不器用な笑顔。そして随分と細くなった手に収まる一輪のひまわり。

あの日々が今でも私の心から消えないのはきっと、彼を思い出にしたいくないからだ。

一切歪みの無い光の筋が青空を駆ける。透明な朝日が山と田畑、そして家々を照らす。ど田舎の村外れに位置する日本家屋の庭先、生垣の向こうから聞こえるエンジン音は新聞配達バイクだろう。

熱と水分を吸い込んだ土の匂いが立ち昇る中、つやつやと光るトマトやナスの表面を水滴が転がっていく。

パーカーの袖を片手間にまくり上げる。勝手にずり落ちてくるそれを邪魔に思いながらも水やりを続けていると背後で床板がみしりと鳴る。目を向けた先、縁側には叔父の忠臣が着流し姿で立っていた。

「おはようさん、由紀」

そう言いながら彼はサンダルを履き、のそのそとこちらへ歩いてくる。朝早いからか動きはまだ鈍い。

「おはよ、おっさん」

「まだおっさんじゃねーっての」

「はいはい」

途端にしかめっ面になった彼を放置して水やりを続ける。

反抗期かねえ。そう呟いて彼は大きくあくびをした。

この日本家屋に住んでいるのは私達二人だけだ。私の両親は九年前に交通事故で死んだ。独身だった忠臣は私を引き取りこの家を受け継いだ。年に数回町から帰ってくるおばあちゃん以外の親族はいない。

親子ではない。でも家族ではある。そんな不思議な距離感の中で私達は暮らしている。

軒先で朝顔をいじっていたかと思えば、水やりが終わるのを見計らって忠臣は気だるげに立ち上がった。元栓を閉めて戻ってきた彼に向かって何となく声をかけてみる。

「ねーただおみー」

「忠臣お兄さんとお呼び」

「忠臣ってなんでいつも着物着てるの」

「無視かよ」

は一どっこい、と年寄り臭い声をあげながら彼は縁側に座り込む。三十を過ぎたばかりなのにそんなだからおっさん扱いされるのだ、といつになったら気付くのか。からかうネタが減るだけだし私から教えるつもりはないけど。

「画塾の生徒に突っ込まれたりしないの」

「いんや？ あいつら基本他人の趣味に口出ししないし」

そうだなあ。息を整えてから忠臣は答えを口にする。

「楽だからなあ。あと、せっかくあるのに着ないのももったいねーし」

和服は涼しいぞー。

そう言いながら彼は廊下へ身を倒す。ホースを片付けてからそっちを見ると、日陰にいるからか忠臣の顔色はそんなによくない気がした。

山の輪郭に夕焼けの気配が顔を覗かせ始める頃、古びた柱時計が六時知らせる。夕ご飯の合図を聞き逃さず、絵の具を頬や腕に付けたまま忠臣は居間にやって来た。

夏の定番メニューであるサラダうどんを胃に収め、お腹の辺りから広がる涼しさを感じつつ食器洗いを済ませる。居間に戻ると忠臣はちゃぶ台の上に日記代わりの分厚いノートを広げていた。

特に声はかけずに向かいに座り、動き続けるペン先だけをじっと眺める。

「忠臣って筆まめだよな」

ん？ と不思議そうな顔をして忠臣は手を止めた。

「血筋なんじゃねーの？ 俺は絵の道に行ったけど、お前のばあちゃんは作家だし。兄貴……お前の父さんも脚本家だったし」

ふうん。

続ける言葉が思い付かず黙りこくる。父親と言われて思い出すのは書齋にこもって仕事をしている背中くらいだ。

どう返していいものか分からず、かと言って別の話題も見つからず自然と視線は日記へそれる。それに目ざとく気付くと忠臣は茶化すように問いかけてきた。

「どうしたよ。お兄さんが何書いてるか読みたいって？」

「読まないよ。興味ないし、自分がされたらヤだし」

「へいへい」

おっさんのうざ絡みをいつものように一刀両断する。彼はわざとらしく肩を落とし、しょんぼりした声を出した。

拗ねたように口をとがらせつつも丁寧にペンを置く。

「誰にも読まれない文章ってのも悲しいと思うがね」

日記から視線は離さずに彼がぼやく。独り言だったのかもしれない。けど、その言葉は何となく耳に残った。

\*\*\*

七月十九日。晴天のち曇り。

まだ朝早いってのに今日も由紀は水やりをしている。縁側に座りあくびを噛み殺しながらその様子を眺めているうちに、不意に由紀の後ろ姿が兄貴の背と重なった。

「なあ由紀」

声をかけるとあいつはすぐに振り向く。その表情も兄貴そっくりで。もう会えない人の面影に少し目の奥が痛くなって。

「俺、もうすぐ死ぬみたいだわ」

だからこそ、俺はいつもと変わらない口調で言った。

流れ落ちる水の音がやたら大きく聞こえる。ホースを握ったまま、由紀はその場から動かない。一拍置いて息を吸う音が聞こえた。

「ちょっと、悪い冗談はやめて」

冗談じゃねーんだけどな、という言葉は心の中で留める。あの由紀が戸惑いと動揺を表に出していたから。

「この感じだと次の春まではもたねーわ、多分」

胸に広がる後ろめたさを押し殺し、わざと軽めの口調で続ける。そうでもしないと何も言えなくなりそうだった。

水やりを断念したのか由紀は元栓を閉めに行く。あいつがすぐ近くを通る、が、目を合わせられない。

金属のこすれる音に紛れて。

「なんで」

ぼつりと。あいつの口から言葉がこぼれた。

「んなもん病気だ、びよーき。発見が遅れたせいで大分進んでる。出来る限りの治療はする、だとよ」

へえ、とだけ言って由紀は隣に腰かける。顔を覗き込んでも目を合わせようとしない。これは完璧に拗ねている。

「大事な事に限って言わないよね。忠臣のそういうところ嫌い」

「お前だって赤点のテスト隠してただろ」

痛い所をつかれたのか、由紀はバツの悪い顔をする。

正直か。こみ上げる笑いをギリギリのところでこらえて言葉を続ける。

「大人もおんなじだ。都合の悪い事はギリギリまで隠しときたいんだよ」

八月二日。快晴。

夢を見た。

薄暗い空間の中で遠くまで伸びる一本道、そのど真ん中に俺は突っ立っている。定番の疑問すら抱かずにただぼんやりと道の先を眺めているうちに視界の端で白い何かがちらついた。

よくよく見ればそれは白い着物を身にまとった誰かの背中だ。見覚えのある背中。あれは、確か、誰だっけ。

答えは喉元まで出かかっている。なのに、それを完全に捕らえる前に目が覚めた。

またこの夢か。あくびより先にため息が出た。

これとよく似た内容の夢を半年に一度くらいは見ている。確か由紀を引き取った頃から見るようになったような。

流石にそれは偶然だろう、と思いながらもとりあえず夢のことを日記に書こうと布団から抜け出した。

一筆書き終え道具を片付けようと引き出しを開けたタイミングで軽いノックの音が聞こえてきた。おう、と声をかけると障子の隙間から由紀が顔を覗かせる。

よかった、ちゃんと起きてた。

その言葉でようやく気付く。水やりの時間はとっくに過ぎていた。

八月十七日。昼頃に通り雨。

日が沈んでも蝉の声はまだ力強く響いている。

部屋の花瓶には向日葵が生けられている。昼過ぎに由紀が持ってきたやつだ。それを眺めつつ、盆が終わったなー、なんてどうでもいい事を考えていた。

正直まだ死ぬ実感がない。病院で予後が告げられた時もどこか他人事のように聞こえた。けど、死ぬのか。俺は置いてく側になって、由紀はまた置いてかれるのか。俺が置いていってしまうのか。それは、悲しいな。

そこでふと我に返って、そして怖くなった。

俺はこの世に何も残せないのだろう。ただの男、ただの人として消えていく。そして世界は何事も無かったみたいに次の朝を迎える。俺が死んだところで何一つ変わらない。

ひゅっ、と。吸った空気が喉で変な音を出す。同時に胸元を強く締められる痛みを襲われた。

体に力が入らない。必死に手を伸ばした時に近くにあった物を巻き込んだのか、派手な音が顔のそばで聞こえる。い草の匂いがすぐ近くからする。目の前が段々とぼやけ、そして暗くなっていく。

何だ。何が起きた。苦しい。痛い。いやだ。誰か、だれかおれにきづいてくれ。

暗い視界の中、遠くで足音が聞こえた気がした。

気付けば薄暗い場所に一人立っていた。ついさっきまでの痛みや苦しみは不思議と消えている。辺りをよく見回してみればそこはよく見る夢と同じ景色だった。

例の薄暗い道、白い着物を身にまとった誰かの背中が先に行く。歩みを止めないその人が一体誰なのかを俺は今、唐突に思い出した。

「兄貴」

声をかけると人影は足を止めた。だがその大きな背中がこちらを振り返る事はなく、ただその場で立ち止まっている。

長く待たせるのも悪いと思い歩を進める。が、どれだけ足を動かしても距離は縮まらない。焦って走り出そうとしたその瞬間、足がもつれる。下方向にぶれる視界と迫る地

面。硬い物に胸を打ち付ける感覚。

そこで目が覚めた。

見慣れた天井を呆然と眺める。障子が開く音がして、そっちに頭を傾けるとちょうど部屋に入ってきた由紀と目が合った。

「あ、起きた」

事実をただ確認するようにあいつは呟く。

「俺倒れてたか？」

「うん。キレイにぶっ倒れてた」

マジか、と返しつつ起き上がる。胸の痛みは残っていない。まだ混乱している頭のまま、深く息をついた。

由紀がよく冷えたペットボトル飲料を手渡してくる。その顔は不安げだ。

「過呼吸？」

「かもな」

「苦しいなら早めに言えばいいのに」

「あーすまん。間に合わなかった。急だったから俺も驚いてる」

なら、まあ。

耳に届くのは無理やり納得したような声だ。すまんて、と重ねて言っても返事はない。少しの間を空けて、不満げな声が再び発される。

「弱音くらい吐いてほしい」

独り言のつもりなのか、その言葉は流れるように吐き出された。

すまん。

普段通りに言おうとして、けれど思ってたより深刻な声が出る。せめていつものように笑おうと由紀の方を向くと焦げ茶色の目がじっとこちらを見つめていた。

「今の忠臣はさ、切り花だよ。終わりが見えてるから、色んな辛い事を我慢してキレイに咲こうとしてる。そんな感じ」

予想外の言葉に目を見開く。

お前いつの間にそんな洒落た表現使えるようになったんだよ血筋か？　てか普段散々おっさん扱いすんのになんか花って。

いつもなら、以前ならそれくらい軽いノリで返せたはずだ。だが実際に口から出たのは全く違う言葉だった。

「花、か。俺も随分と洒落たもんになったなあ」

由紀の頭をわしゃわしゃと撫でる。細いけどちゃんと芯のある黒髪が自然と指に絡まる。よく知った手触りだ。

由紀。娘のような、それでいて妹のような、大事な存在。この世に置き去りにしてしまおう家族。

こいつのために俺は何が出来る？

手を止め、わざとらしく大きなため息をついてみる。

「んじゃ残りの時間で何か、お前のために残せるようなもん考えてみるわ」

「倒れない程度にね」

「へいへい」

軽く返事をしつつ夜空に目をやるが月はまだ出ていない。いつも通りが少しずつ変わっていくのを感じながらも俺は現実から逃れるために目を伏せた。

八月二十八日。午後四時頃にでかい入道雲。

また、夢を見た。白い着物を身にまとった誰かの背中が薄暗い道を先導する。いや、もう誰かではない。その人の正体を俺はすでに思い出している。

「兄貴」

声をかけると人影は足を止めた。

一步一步確実に踏み締めて、その大きな背中に歩み寄る。手の届きそうな距離まで来た所で人影がゆっくりと振り向いた。

薄闇に浮かぶ色白な肌が徐々に面積を広げていく。その顔が完全にこちらを向く直前で跳ね起きた。

乱れた呼吸を落ち着けようと深く息を吸う。何度か繰り返すうちに肌寒さで体がぶるりと震えた。周囲を手で探してみると、寝てる最中に暑くなって蹴飛ばしたのだろうか、掛け布団は腹の上にしか乗っていなかった。

脇に寄っていた布団を引き寄せ、埋もれるように包まったまま目を閉じる。

もうすぐ夏が終わる。鈴虫の声がかすかに聞こえた。

九月三日。夕立、というか秋雨。

学生の夏休みが終わると同時に画塾を辞めた事でだいぶ自由な時間が増えた。反面、日に日に落ちていく体力と節々の痛みが俺から自由を奪っていく。

おやすみが怖い。これが最後の言葉になってしまいそうで。おはようが辛い。また死に怯える一日が始まるから。じわじわと迫り来る現実から逃れたくて、気付けばまた意味もなく日記を開いていた。

うつむいた姿勢でパラパラとページをめくっていると突然視界が暗くなる。

「また見てんの、それ」

跳ねた心臓は、真上から降ってきた声を聞くなり落ち着き始めた。

「びっ、くりした。声かけろっての」

「ノックしたから。はい洗濯物」

そう言って乾いた洗濯物を押し付けてきたかと思えば、丁寧な所作でコスモスを花瓶に生ける。切り取られた秋の象徴を眺めるうちにふとさっきまで見ていたページの、数週間前の会話が脳裏をよぎった。

「そういや由紀、前に俺のこと切り花って言ってたよな」

声をかけると由紀は眉を寄せてこちらを見た。何言ってんだこいつ、と言わんばかりの目を向けてくる。いや実際言ってたのは由紀のはずなんだが。

「そんなこと言った？」

「覚えてねーのかよ。お兄さん悲しいわー」

「はいはいおっさんおっさん。で、それがどうしたの」

相変わらずのつれない対応だ。けどそれに少しだけ安心している俺がいるのも事実ではある。

きっとこいつは大丈夫。俺が死んだ後もちゃんと立ってられる。何となくそう思った。そう思う事にした。

「あんなキレイなもんにはなれないけどよ、ちゃんと実か種を残していくからよ。だから、まあ、心配すんな」

手元の日記を静かに閉じてから笑いかける。多分、自然な笑顔でいられたと思う。

十一月四日。

夢を見た。

薄暗い道の途中、白い着物を身にまとった誰かの背中が、肉親の影が先を行く。

兄貴、と声をかければ人影は足を止めた。

大きな背中だ。一步一步確実に踏み締め、その背中に歩み寄る。手の届くくらいまで距離を詰めた所で前触れもなく人影が振り向いた。

目が、合った。その顔は九年前から一切老けていない。そうだ。兄貴の時間はあの日を境に止まっている。

兄貴は生前と同じ生真面目な表情を僅かに崩す。

「もうすぐ追いつかれてしまうな」

柔らかく言葉を紡いだ口元とは裏腹に、その瞳には確かに悲しみが灯っていた。

凍てつく空気が布団越しに肌を刺す。その鋭さで目が覚めた。

暗い中で時計を確認するとまだ日も昇ってない時刻だ。だがあまりの寒さに二度寝する気にもなれず上体を起こす。そのまま障子の方を向くと、雲の切れ間から覗く月明かりが和紙越しに闇を淡くぼかしていた。

明け方の薄闇に目を凝らす。自分の呼吸音に耳を澄ますが特段乱れはない。安心するのと同時に何故か諦めに近い感情が心を占める。無理にそれを振り払わずに、兄貴の表情を思い返しながら一旦目を閉じた。

先週辺りから毎晩のように見ている例の夢。記憶に新しい兄貴の言葉と眼差し。どうやら俺は、それが何を意味するのかを理解できないほど馬鹿じゃあなかったようだ。

まぶたを押し上げて机の上に飾られた鬼灯をちらりと見る。つい二、三日、庭先で季節外れのやつを見つけたと言って由紀が持って来たものだ。薄暗い中でも映える鮮やかな橙色を眺め、その流れで部屋の片隅に視線を向ける。そこにはイーゼルと、大分塗り進めた水彩紙がある。

じっとそれを見つめた後、くしゃみを一つしてもぞもぞと布団の中に潜る。

そろそろお迎えが来る。そんな予感がするりと胸の中に入ってきた。

\*\*\*

空に灰色が薄く広がる十一月中旬、初雪が降る前に忠臣は息を引き取った。

昼休み中に呼び出されてそれを聞くのは人生二回目。早退させられ、自宅で遺体と対面した時も何故か涙は出なくて。ただ制服の襟首を撫でる風の冷たさだけがいつまでも残っていた。

宙ぶらりんな心を抱えたまま、帰省したおばあちゃんと一緒に年賀状に急かされる事のない年末を過ごしているうちに気付けば年が明けていた。

小正月を迎えた日曜の朝、私は久しぶりに忠臣の部屋を訪ねた。部屋の主もおらず、遺品整理も粗方済んだ八畳の和室はやけに空っぽな感じがする。そんな中でも未だ手付かずだった机の上、絵の下書きや色鉛筆に紛れて置かれている彼の日記を何気なく手に取った。

一番新しいそれをぱらぱらとめくる。特別書く事が無かったらしい日は天気と食べた物しか書いてない。それでも日付が途切れる事はないのは忠臣らしい。

最近になるにつれ文字の震えが目立つ。見覚えがあるような文章を斜め読みしていく内にあるページで手が止まった。

『今日由紀が持ってきたのはコスモスだった。もう秋の花が出始める時期になった。あつという間だ』

冒頭の日付は九月三日。特別何かがあった覚えはない。けれど。

『物を残すと宣言してしまった。問題は時間だ。冬までもつのか。完成するのが先か死ぬのが先か、分からない』

数行にわたって綴られた文章が九月三日という存在を主張する。

私にとっては何でもないただの一日だった。彼にとってはやらなければならない事と不安が付きまとう一日だった。違いを突き付けられた気がして、紙をめくる手はそこで完全に動きを止めた。

日記を閉じ、あえて見ないようにしていた一角に目を向ける。

そこに立っているのは三脚イーゼルに乗っている水彩画。描かれているのは麦わら帽子をかぶり白いワンピースを身にまとった若い女性と、彼女の腕の中で力強く咲き誇るひまわりの花束だ。女性の顔は帽子でほとんど隠されているけれど、垣間見える口元は確かに微笑んでいる。

彼が残した種とはこの絵の事だ。何故かは分からないが、一目見た瞬間から確信めいたものを感じていた。

絵との距離を保ったままその正面に立つ。イーゼルとの間に、真剣に絵筆を動かす忠臣の背中が見えた気がした。

懐かしいあの日々から現在に、忠臣の葬式から五年以上経った今に意識が戻る。彼が遺した絵は、社会で働く一員になった今でも自室の片隅にある。

夏の青空を見るたびに彼の背中が脳裏に浮かぶのは何故だろう。彼からの最後の贈り物のせいか、それとも縁側に座る姿が今でも目に焼き付いているからか。

何にせよ、私は彼ほど夏の日影が似合う人を知らないのだ。

## H-75+H-84

### H-75+H-84

#### 香月日向

灰色の海に沿う道を、若葉マークの軽自動車が走る。灰色と言っても、本当に海が灰色をしている訳ではない。空が曇っているのと、冬特有の波の泡立ちが、海をネイビーブルーのグラデーションに染めて見せているのだ。空は明灰白色、道路は暗い軍艦色、クロマツの砂防林は黒い程のグリーン。見える物全てに彩度が乏しい冬の風景の中を、白い息を吐くシルバーの四人乗りが駆けていく。重く沈んだグレースケールの風景はあたしの心を映しているようで、見ていると疲れる。あたしは自然に目を閉じる。海から吹き付ける風は獣の唸りのようで、なんだか食い殺されそうだ。いっそ食い殺してくれと思いつつ、頬を車窓に貼り付ける。

「風強いね」

助手席に納まるあたしに、折口さんが言う。

「全然ドライブ日和って感じじゃないけど、冬の海も悪くないでしょ？」

あたしは窓ガラスから頭を離し、フロントガラス越しに二時方向を見る。海と陸の境界に、セールカラーの砂浜が死んだように横たわっている。確かに、エロいことを求めて群がるパリピがいないのは開放的でいい気分だ。でもそれだけ。暗い雲が空に蓋をしていて、窒息しそうな閉塞感がのしかかっている。私は再び砂防林の方を向く。窓ガラスには、さっき頬を付けた時に付着した皮脂が白く浮いている。人の車を汚しちゃった。あたしは悪い子。

「あたしをドライブになんか連れ出して、一体なんのつもりですか？」

あたしはハンドルを握る折口さんに問いかけた。

「別に、大した意図もつもりもないよ。ただ、今日は人間を乗っけて走りたいの。気分転換だよ」

折口さんは、白い肌に良く映える褐色の目を前に向けながら答える。いたずらっぽく笑う顔は、まだ少女の成分を多く残している。人間を乗せて走る、と言うからには、彼女は普段はヒトならざる者を乗せて走っているのだろう。あたしはルームミラーを覗く。そこには、後部座席二つを占領して赤褐色の大きな犬が寝ている。しかもシートベルトまでしている。後部座席に納まる折口さんの愛犬は、シートの玉座に憩う王者といったところか。

「良い子ですねアカちゃん。車に乗っても大人しくしてて」

「まあね。病院行くと勘付くと大暴れするけど」

自分の頬の筋肉に血が流れる。唇の端が少しだけ持ち上がった。ルームミラーの中のアカが車内で大騒ぎする様を想像すると、ちょっぴり可笑しい。予防接種がそんなに嫌なのか。

しかし、あたしの表情筋はすぐに硬直し、さっきまでの能面に戻る。お前が笑顔になってはいけないのだと、脳の奥から天使が囁いた。罪深きあたしを断罪するために遣わされた使徒は、あたしの海馬から黒い記憶を引き出して見せつけた。そんなの見たくないと思ったあたしは、力いっぱい目を閉じた。

今日と同じように、雲が空を埋め尽くす、ある夏の日の出来事だ。その記憶を色に例えれば、濃く深い、血の色だ。夏の色とは程遠い、爽やかさの欠片もないグロテスクな色が、あたしのまぶたの裏を染め上げていった。

「お前に何が分かるんだよ！ 死ねや！」

少年の叫び声と共に、あたしに向かって弟の拳が突き出される。あたしは腕で防御の姿勢をとる。腕の皮膚が削れる。逸らされた拳はそのまま、あたしの顔すれすれを横切り壁に激突する。頬が熱くなり、拳を逸らした腕の皮膚が赤みを増す。

「うらあっ！」

この子を殺らなきゃ、殺される。恐怖が尻からうなじに向かって駆け上がる。あたしは腰を落として弟の懐に潜り込むと、瞬時に腹に肘を叩き込む。しかし、二歳下の弟の体はサッカー部らしい筋肉で覆われていて、衝撃が深くまで刺さらない。逆に、あたしの胴に膝蹴りが入る。一瞬にして内臓を攪拌されたような痛みが喉元まで膨れ上がる。呼吸ができない。死ぬ。あたしは膝蹴りを繰り返した弟の脚を、自分の胴から離れる前に両腕で抱え込む。そのまま前に押し込めば相手を転倒させることができる。そう思った。「放せよ！」

弟が組み合わせた拳を背中に叩き込む。肺が潰れたように息が苦しい。でも耐える。弟の脚を押し込み、倒す。その時、ごっという鈍い衝撃を感じた。後ろにあったタンズに、弟の後頭部が当たったのだ。殺したか？ あたしは一瞬後悔する準備を整えようとした。

しかし、不幸にも幸いにも、弟は倒れる寸前に顎を引き、受け身をとっていた。タンズとは背中であつかり、ダメージを最小限に抑えたようだ。さすが運動部というか、反射神経が鋭い。

「ああっ！」

弟の脚が腕から離れる。激しく振るわれた脚が、あたしの腹にめり込む。次いで、髪の毛が鷲掴みにされて無理やり起こされる。頭皮に体重の大部分がかかり、激しく痛む。「このクズが！」

裏返った罵声と共に、あたしの顔には拳が繰り出される。首を捻るが間に合わず、頬骨の辺りに衝撃が走る。あたしは痛みと恐怖に叫びたかったが、そうする間もなく弟はあたしの頭を床に叩きつける。呼吸の内、吐き出す方は全て悲鳴に変換される。自分にもこんな声が出せるのかと驚くほどの、けたたましい女の叫びが喉を割って氾濫する。「きーきーうるせええ！ 死ねや！」

首に手が巻き付く。余り手入れしていない爪が皮膚を削る。そのまま、物凄い力で弟はあたしの喉を締め上げた。あたしは首に力を入れて耐える。しかし、耐えるのに手いっぱい呼吸ができない。苦しい。あたし、死ぬ？

「あああああああああああああああああああああああ！」

怒り、憎しみ、不満、およそ負の感情全てを混ぜたようなブラッドレッドの絶叫と共に、あたしの頭が床に打ち付けられる。頭蓋骨と床板がごんごんごんっと、三回ぶつかった後、弟の手が首から離れる。

「勝手に自殺でもしてろやメンヘラが！」

頭蓋骨のゴングが鳴って、試合終了。弟は自分の部屋に戻っていった。

床にうずくまったあたしは、痛む頭を抱える。通常の三倍の時間と力をかけて起き上がってみると、世界が歪んで見えた。そう表現したいが実際は歪んでいない。あたしが打ち付けられた床も真っ直ぐに見える。問題はあたしの平衡感覚にあるようで、ゆらゆら揺れているような感覚に囚われている。幸いその他は五体満足。頭蓋骨は脳をしっかり守ってくれた。

あたしは、弟が固く閉ざしたドアを覗む。もうアイツ、死なねえかな。でないと命がいくつあっても足りやしない。あたしはなんとか立ち上がり、洗面所に向かう。白い洗面台に向けて唾を吐くと、赤い物が混じっていた。口の中を切ったらしい。またこんなに傷つけられたのか。目の縁から熱い滴が盛り上がる。

「なんで……あたしばかり……」

世間一般の多くの人々は、きっと家庭内で死を覚悟するようなことは無いのだろう。多くの、自分と同じ歳の少女たちは、自分が殴られているのと同じ頃、彼氏と楽しい夏の思い出作りでも計画しているのだろう。その計画が家族計画になってしまえばいいのに。なぜ同じ人間であるあたしは、一歩間違えば命の取り合いになるような事を弟としているのだろう。同じ年頃の少女たちが楽しく笑っている時に、なぜあたしは痛みで悶え叫んでいるのだろう。叫び過ぎて喉が痛かった。

この弟の暴行を両親に相談したところで、両親は助けてくれない。どうせ、あたしの苦しみに寄り添おうとする者など、この家にはいない。父は自分の身長を超えて屈強に成長した息子を恐れて干渉しようとしないうし、母に至っては進んであたしを殴ったりもする。誰が、あたしを保護してくれるのだろうか。

「この大げんかの原因が、ドライヤー使っただけって言うね」

鏡を覗みつけながら、自嘲気味に言ってみる。鏡の中には、血の気の無い白い顔に殴られて赤く腫れた頬で太陽を描いた日の丸が浮いている。髪はまだ湿っていて、まるで

呪いのビデオから出てきた幽鬼のような姿である。

洗面所で髪を乾かしていたら、突然弟が入ってきて、急にブチギレた。音がうるさくて勉強に集中できないらしい。でも、お母さんがドライヤー使っている時はそんな文句言っていなかったのに。あたしにだけ選択的に働く怒りみたいだ。それであたしと弟は、さっきまで大げんかを繰り広げていたという訳だ。

あたしは髪を乾かすのを諦め、タオルだけ首にかけて自室に戻る。すると、ベッドの枕元の充電器に繋がれたスマホの青いLEDが光っているのを見つけた。またクラスのヤツ等だろうか。そんな恐怖が一瞬だけ胸をかすめ、瞬間的に体が戦闘態勢をとる。昔、クラスチャットであたしを誹謗中傷するメッセージが吹き荒れた時がある。その時の感覚が拭えていないのだ。恐怖条件づけってやつだ。あたしは恐る恐るスマホの画面を付ける。

「あ………違った………のか」

血が引くように、少し落ち着く。通知は連絡用のチャットアプリではなく、SNSの物だった。なんだ、味方か。あたしは画面をタップし、SNSのメッセージを見る。良く知る人物の名前の通知を見つけると、少しだけ戦闘で負ったダメージが回復するようだった。

「ユウくん………」

通知は、あたしがよくやり取りをするユウというユーザーからのダイレクトメッセージを知らせていた。ユウくんとは、たまにオフラインでも会ったりする大親友だ。「くん」とつけて呼んでいるのは、SNS上で彼女が一人称を「僕」としているからだ。リアルであった時には、彼女はダークブラウンの髪を肩まで伸ばした、大人しそうな女子高生の姿をしていた。彼女がSNSアイコンに設定している白髪の美少年とは雰囲気も全く違う、ごく普通の女の子なのだ。そのユウくんが、今年の初夏頃、家庭内でのトラブルを理由に自殺をしようとしたことがあった。あたしはユウくんの居場所を突き止め、すんでの所でそれを止めた。その時以来、あたしとユウくんはリアルでも交流するような仲になっていた。

あたしは、ユウくんのメッセージに目を通す。

『ねえユーキさん。夏休みに入ったし、そろそろお泊り会しようよ。僕とっても楽しみ!』

ユーキというのは、あたしのSNS上での名だ。イチゴミルク色のシャチのキャラクターをアイコンにしたユーキに向かって、楽しそうに白髪の少年が笑った。少年の顔にダークブラウンの髪の少女が重なる。少女の笑顔を想像した瞬間、あたしは眉間にしわを寄せることしかできなくなる。今年高校受験を迎える弟の荒れ様を考えたら、あの細くて弱々しい少女をこの家に招き入れることなど、できない。

不意に、ユウの声が聞きたくなかった。この苦しみを分かち合えるのは、あの子だけだ。家に泊めることはできなくても、お互いに声を聞くだけで少しは気もまぎれるだろう。あたしは、ユウに電話をかけた。呼び出し音が鳴っている時間が酷く長く感じる。引き延ばされた時間の分だけ、頭の痛みが増す。この痛みを生み出すような暴力から、世の中のあらゆる暴力から、ユウくんを守らなきゃ。胸の奥で、義憤と慈愛を混ぜたテルミットが白熱に燃えた。

「もしもし………ユーキさん………加奈子ちゃん？」

トクン。心臓が踊る。ジワリとした痛みが歓喜する。ユウくんの声だ。アニメキャラが話すみたいな、普通よりも高い女の子の声は、間違いなくユウくんだ。あたしが助けた命が、あたしに話しかけている。頭痛の代わりに、快感が脳に溶ける。

「ユウくん……急に電話しても出るんだね。あたしなんか不在着信ばかりなのに」  
「だってずっとケータイ見てたもん。それに加奈子ちゃんの声、丁度聴きたかったから。話したいな、会いたいなって思ってたら電話かけてくるとか、加奈子ちゃんはまるで王子様だね」

ああ、喋ってる。あたしは、ユウくんに必要とされていて、確かにここで生きている。目の縁が熱くなってきた。今すぐにでも泣きたいほどに、心が満たされている。

「王子様か、なるほど。すると、ずいぶんちんちくりんな王子様だな。あたしの身長だととても白馬には乗れないよ」

「じゃあ何に乗って来てくれるの？」

「自転車ならイケる。通常の三倍の速度で漕いでいくよ」

ユウが笑う声が、あたしの鼓膜を撫でた。鈴を転がすようとは、このことをいうのだろう。心地いい。これが最近流行りのASMR（自律感覚絶頂反応）ってヤツか。

「ところで加奈子ちゃん、夏休みに入ったんだけど、そろそろお泊り会の予定を決めない？」

デクスィ！ って音がした。黒鉄色のアーミーナイフが胸を刺す。痛みが首を締め付け、言葉が出てこない。さっきまで、彼女に言わなくてはいけないと思っていた言葉が出てこない。代わりに、ううんとかむむんとか、言語ではない曖昧な返事だけがあたしのスマホに吹き込まれる。

「どうしたの？」

「ああ、あの……」

苦虫を噛み潰すを通り越して、苦虫を噛み砕くくらいの力に顔をゆがめながら、あたしは何とか言葉を紡ぐ。

「その……えと……ごめん」

「へ？ 何が？」

「その……家に弟がいるんだけど、ソイツが今年受験で、スゲー気が立ってるって言うか、荒れてるんだ……」

おい加奈子、貴様が言っているのは現状の報告でしかない。それもユウには重要でない情報ばかり。早く結論を言え。嘔吐を思わせる不快感が言葉に先行して溢れてくるようだった。

「さっきまで大暴れしてて、その……ごめん、ユウくん家に泊めてあげるって言ったけど、無理そう……」

言った。不快感を飲み込みなんとか言い切った。頑張ったぞあたし。エライぞ！ 少しでも、胸の痛みが軽減される。ただ痛みに順応しただけかもしれないが、言いたいことを言ってしまうとこっちの物だ。そう思ったが、そんなの向うには関係ない。それに気づくのに、あたしは0.1秒かかってしまった。

「……嘘つき……」

微かに、しかし確かに、ユウがそう言うのが聞こえた。頸動脈に冷たい刀が当たる感

覚が、あたしの呼吸と心拍を制する。心臓の動きさえ押さえつけられたような苦しさが襲う。ダメだ。死ぬ。

「嘘つきィ！」

怒声だった。でも、悲鳴でもあった。モンザレッドの怒りと、インディブルーの悲しみを混色した紫が、電波に変換された後あたしの耳元で再生される。

「言ったじゃないか！ 泊めてくれるって！ 私をママから守ってくれるって……何とかするって」

「ユウくんごめん……でも状況が……」

「こんな家になんてもう居れない！ 居場所無いのに！ 加奈子ちゃんが居場所作ってくれるって言ったのに！ もう生きてけない！」

「ユウくん落ち着いて！」

「落ち着いてなんていけないよ！ 裏切り者！ 私なんか死んじやっても良いんだね？ もう知らない！」

「ユウくん！」

ユウくんの声はもう聞こえない。以前、あたしを罵詈雑言で犯したチャットアプリが「無料通話は終了しました」と、残酷に微笑んでいる。コイツ、何とかして殺せねえかな。あたしは電源ボタンを押してスマホの画面を消す。そのまま脱力し、ベッドに倒れ込む。カラータイマーを盗られたウルトラマンみたいに、体がしぼんで重力に敗北したみたいだった。

加奈子、お前のせいです。あーあ。使徒が、いたずらっ子みたいにケラケラ笑う。お前、使徒(エンジェル)って言うより犯罪道化王子(ジョーカー)だな。あたしは白い天井に現れた皮肉な天使を睨んだ。

「あたし……バカだ……」

髪に手をやり、激しく搔き毟った。キューティクルが痛むって？ 知らねーよ。あたしは荒れる気持ち全てを、髪を痛めつける暴力に変換した。

神よ。お前は どうして、ユウを傷つける。あたしにばかり都合の悪い運命を課す。あんたが憎い。殺せる物なら殺してやる。誰かロンギヌスの神殺しの槍を持って来てくれ。

この通話を最後に、あたしがユウくんの声を聞くことは無かった。連絡さえ、ユウくんはくれなかった。もうユウくんはあたしを必要としない。そう思った時、あたしは死を覚悟した。命綱が千切れ、無限の虚空に投げ出された宇宙飛行士の気分だった。

夏休みが終わる頃、ユウくんがもう一回自殺未遂をヤラかしたという知らせを聞いた。重傷を負い、生死の境を彷徨(さまよ)ったユウくんは、今でも再生治療カプセルで眠ったままだという。

ユウくんの自殺を知って、あたしはぐちゃぐちゃになった。

「あたしは……ユウくんを殺した。それはどんなに前向いたって変わりませんよ。助けを求めて、あたしを必要として伸ばされた手を、あたしは振り払ってしまったんです。そしてユウくんを傷つけた。ユウくんは自分を殺し損ねて、今も歩けない体のまま……こんな暴力、ありませんよ……」

ネイビーブルーが流れるシーサイドを、折口さんが運転する車が駆ける。冬の海は怒

り狂い、暴力的な風で車を殴る。折口さんはあたしの話を聞いているのかいないのか、真っ直ぐ前を見て運転している。ルームミラーの中では、アカが静かに眠っていた。ああ、イヌにでも生まれたら、こんなに苦しなくて済んだのだろうか。なまじ知性がある分、人の痛み、人の嫌悪を感じてしまい、暗い未来を想像して絶望する。だから、その絶望の未来から逃走するべく、自死なんてものを選んでしまう。レミングの集団自殺はディズニーの嘘だから、自殺を選べる生物は人間くらいな物だろう。ヒトとは違う、目の前の肉のことでだけ考えて生きられるような生物に転生したい。『転生したら肉食目だった件』って感じにならないかな。グレーの世界が車窓を流れていくのを見ながら、あたしはひたすら自省した。

不意に、折口さんが大きな溜息をつく。余りの大きさに、あたしは一瞬びくっと肩を揺らした。不機嫌な溜息は、あたしへの不満か？ あたしって悪い子。

「せっかく気分転換に連れ出しても、結局それ？」

溜息交じりに折口さんが言う。やっぱりだ。折口さんを怒らせてしまった。他人の愚痴なんて聞いても、別に折口さんは楽しくない。こんな暗い話を聞いても、不快になるだけだろう。こんなの、あたしを殴った弟の暴力と変わらないじゃないか。

「ごめんなさい.....聞きたくもありませんよね。あたしの悩みなんか.....折口さんには別に関係ないし.....」

不意に、固い骨格の感触があたしの二の腕に伝わってきた。折口さんがあたしに拳を押し付けてきたのだ。

「またそうやって.....自分を責める。そういうのが良くないんだよ」

折口さんの声は優しくかった。よもぎ色の春風のような温かさを含んだ声が、痛いほど胸に染みだ。やめてよ。そんなお世辞みたいな優しさ、意味ないよ。

「良くないって言っても.....何度考えたって自分が悪いってなっちゃうんですよ.....しょうがないじゃないですか」

「なら、考えるの止めちゃえば？」

あたしは折口さんから目を反らすように、窓ガラスに額を押し付ける。考えるの止めろって、言われてできてたら苦労しないんだよ。ある人は「過去は変えられなくても、未来なら変えることができる」って言ったけど、結局過去は変えられない。思い出だけで死にたくなるような過去に、決して忘れられない醜い過去に犯され続けながら生きるしかないってことじゃないか。

あたしがユウくんを殺してしまったことは、変わらない。あたしみたいな愛さえ知らずに育った怪物(モンスター)に生きる意味を与えてくれた、大切な人を自ら傷つけた過去は、絶対に消せない。

心から出血する代わりに、熱い滴が目の縁から膨れ上がってきた。ジワリと鼻の奥が痛む。泣いてしまいたいよホンキで。

「加奈子ちゃん、シートベルトしてる？」

急に、折口さんが声のトーンを変えて言った。さすがに助手席でベルトしないで乗るほど、あたしはバカじゃない。あたしは胸にかかったベルトを軽く引っ張って見せた。

「アカも.....大丈夫そうだね？」

折口さんがルームミラーを覗いて言う。その表情が、どことなく笑っているように見

えた。あたしは折口さんの横顔を凝視した。細く真っ直ぐな顎骨がくっくと引かれる。そのしなやかな線を追った先にある肩、そこに連なる腕と手。それらに順番に力がこもっていく。何をやる気だ？ 微笑んだ折口さんの顔は、少し怖い。

「口閉じてて……舌嚙むよ」

「は？ 折口さん、一体何を……」

「うわああああああああ！」

折口さんがグンッとアクセルを踏み込むと同時に、四人乗りの軽が猛った獣に変わった。車窓に映る物全てが高速で流れ、全ての色が混ざりあう。体がシートに押し付けられる。エンジンが雄叫びを上げ、タイヤが道路を削る振動がシートを揺らす。

昔、一度だけ家族で遊園地に行ったときのことを思い出した。弟がどうしてもと言うか、わがままを言って母がお決まりの「お姉ちゃんだから」発言をして、無理やり弟と一緒にジェットコースターに乗る羽目になった。その時の感覚と、今の感覚はそっくりだった。

「折口さん！ 何をして……」

「ああああああ！」

「ダメだ！ 死ぬうう！」

「歯ぁ喰いしばれ！ 死ぬよ！」

「ぎゃああああああああ！」

あたしは訳も分からず顎に力を入れる。次の瞬間折口さんの体がカタカナの「ヒ」みたいな形に硬直する。がりがりがりぐざざががと、何かが壊れたみたいな音と共に、車が急減速する。ワープ終了。慣性運動が一気に体を投げ出す。フロントガラスの向こうへ自由に飛んで行きたい体をシートベルトは許さず、深々と腹にベルトが食い込む。全身が前のめりになる。

「あースッキリした！ 他に車がない冬のシーサイドラインじゃないとできないよ！  
公道で百二十キロ出すの！」

まるで男子競泳自由形で世界記録出したみたいな声で、折口さんは気持ちよさそうに言った。折口さんって、ハンドル握ると凶暴になるタイプの人なの？

「折口さん？ 今の……なんですか……ガリガリって」

「あ、多分ABSだよ」

「なんですか？ アクリロニトリル・ブタジエン・スチレン？」

「アンチロック・ブレーキ・システムの略。最近の車には、そういうのが付いてるの。急ブレーキかけても、タイヤがロックされて制御不能にならないようにするための物だよ」

震えながら質問するあたしに、折口さんは楽しそうに説明してくれた。違法行為をやったのけたとは思えない明るい表情は、正しく悪魔だ。この軽は狼の悪魔(マルコシアス)が運転している。すると、後部座席で今の急加速と急減速を体験しながらも全く動じない愛犬アカは、マルコシアスの眷属か。恐ろしい所に来てしまった。あたしは自分の肩を抱いた。震えるあたしの顔を、ルームミラー越しに折口さんが覗き込んだ。

「ねえ、今この瞬間、どう思ってる？」

少し落ち着きを取り戻した声で、折口さんが聞いてきた。

「今この瞬間、ですか？」

「そう……」

なぜか、その一言が引っかかった。折口さんは何を聞こうとしているのだろうか。

「難しく考えないで」

「え？」

考えるなって、どういうことだ。なおさらわからない。この場合、折口さんはどんな答えを期待しているんだ。わからない。ルームミラーから逃れるように、ダッシュボードに視線を落とす。

「死にたいって、思った？」

ブチりと、胸の傷口が開く音がする。折口さんの言葉が塞がりきらない傷をなぞる。そうだ。死にたかったんだ。大切な友達を、大好きなユウくんを傷つけ、殺してしまった。どうしようもないあたしを、あたしはずっと殺したがっていた。なら、減速の瞬間にベルトを外せば良かった。それなのに、あたしは粗末な命にしがみつき、死を拒んだ。

「痛い……」

首の皮膚が痛んだ。減速の時にシートベルトが食い込み、少し擦り剥いていた。もしかしたら血が出ているかもしれない。

「痛い？　痛いよね……痛いってことは、体が『生きたい』って言ってる証拠だって、昔言われた」

確かに、痛みは生命体が自己の身体を守るための防御機能の一つだけど、それはあたしが死にたいと思うのとは別じゃないか。上手いこと言ってるつもりだろうけど、うるせーよ。

「今の加奈子ちゃんは、ほんの一瞬でも、ユウって子のことも、自分が自分を殺したいってことも忘れて、ただ生きようとしていたじゃない」

折口、あなたは何を言う。一瞬だぞ？　無意味だろ。

「何言ってるんですか？　ほんの一瞬、気が紛れただけですよ……すべての問題が解決した訳じゃ……」

「その問題って何？　ユウちゃんが大けがしたこと？　その子に嫌われちゃったこと？」

ああ、そうさ。あたしが生きていくために必要な物全部、自分の手でぶっ壊しちゃったよ。壊れた物は、もう元には戻せない。

「そうですよ……一瞬忘れたからって、解決できるわけじゃない。もう手遅れなんですよ」

「手遅れ？　じゃあ、いつまでもそれにこだわることなんてないんじゃない？」

つと、胸の奥の触れてはならない物に触れられた。体が一瞬にして熱くなる。折口さんの言葉が無遠慮な指に変わり、あたしの傷を逆撫でる。うるせえ。そんなこと……。熱を持った液体が、あたしの視界から輪郭を奪った。

「分かってますよそんなこと！　わかってる！　うじうじ悩んだってしょうがない！

ネチネチ後悔しようがあたしが死のうが、ユウくんはあたしのところに帰ってこない！

後悔するばっかじゃ何にもならないってわかってるよ！　でも、そう簡単にはい次はい次ってできるかよ！　頭ん中ぐっちゃぐちゃにしてる記憶は、どうしたって消えないんだよ！　電腦化された未来なら、疑似記憶でも植え付けて何とかできるかもしれないけど、今は、この記憶が、清算不能の過去が、ずっとあたしを苦しめるんだよ！」

「ならなおさら、一瞬でも気分よくなって、無理やり忘れていくしかないだろ？」

「うるさい！ 苦しい物は苦しいんだよ！ 知ったつもりで勝手に言うな悪魔が！」

車内に声を響きわたらせ、あたしは生まれたばかりの赤子のように泣いた。赤ちゃんは、生きようとして泣いてるんだっけか。そうやってきちんと自分の肺で呼吸して、必死で生きようとしている。折口さんなら、泣いてるってことは生きていたいことだとか、上手いこと言った風に言うのだろうか。まったく、ムカつく女だ。ウゼえ。

泣きじゃくるあたしを乗せて、折口さんは車を走らせた。あたしが粗方泣き止むころ、車は海浜公園の駐車場に停められた。折口さんは駐車場に頭からかなりの速度で突っ込み、ぎゅっとブレーキを踏んで止めた。折口さんはアクセルとブレーキの加減ができない人なんだと思った。下手くそ。

「海に来たんだから、海を見に行こうよ」

エンジンを止めながら折口さんはトートロジーみたいな提案をした。あたしと折口さんは車を降りて駐車場を歩いた。冬の荒れ狂う海と死んだ砂浜を一望できる柵の手前まで数十歩歩くと、靴がじりじりいってきた。駐車場から柵の所までにかかなりの高さの砂が積もっていた。これが街まで吹いてきたら困るな。砂防林、良い仕事してんじゃん。

荒れた海を、あたしは泣き腫らした目で睨んだ。そこには、道化の顔をした天使も、イヌを引き連れた悪魔もいない。人間の生存を許さない、黒いほど青い地球の王者が雄叫びを上げるだけであった。恐ろしいほどの風の音が聴覚をほとんど奪う。圧倒的な暴力が波打ってあたしたちを威嚇する。

「加奈子ちゃんは今、あの海に飛び込みたいと思う？」

鉛色の空を背景に、あたしの隣に立った折口さんが聞く。肯定の意を示すため、あたしは頷いた。このうねる暴力に身をさらして、命を止めてしまいたい。苦しいことも、悲しいことも、全部忘れて、何も感じなくなりたい。

「だよね..... そうだと思った。どうしようもないのに、解決しようがないのに、ずっと悩まなくちゃいけないのは、苦しいし、死んじやいたいって思って当然だよ」

「でも、あなたは生きろって言うんでしょ？ 苦しみを取り除いてくれないのに生きろなんて、無責任ですよ」

「かもね。でも私は、あなたに生きていて欲しい。自分勝手だってわかってるけど、これは私の勝手だから」

トートロジーじゃないか、そんなの。

「ズルい人..... そんな自分勝手に、あたしを縛るんですか？」

「その通りだよ。私は私が気持ち良いように生きるだけ。そして、加奈子ちゃんには生きていて欲しいし、誰かが笑顔なら、それが気持ち良い。気持ち良い方向に向かうだけだよ。だから私は、加奈子ちゃんがどれだけ苦しんでいようがボロボロになっていようが、正直どうでもいい。あなたの意見なんて無視して生きてもらう。あなたを死なせはしない」

「生かすも殺すもあんた次第ってことですね」

ひどいよ、折口さん。もう辛いのは嫌なのに、まだ生きろって言うのかよ。これ以上、あたしは苦しめられたくないのに。本当にこの人は、人の皮を被った悪魔だ。

涙に歪む視界の中で、あたしは自分の隣にいる悪魔を睨む。そこには、褐色の瞳を光

らせる一人の女性がいた。その女性の、柔らかな唇が微かに動く。美しい娘の姿をした悪魔が、あたしを見ている。あたしは思わず見惚れてしまった。

「ねえ加奈子ちゃん、ちょっと手伝いに来てみない？」

悪魔の囁きが、あたしの耳を舐めた。首筋がぞわりと疼く。

「私が入ってるボランティアサークルなんだけど、その手伝い、してくれない？ 今度NPOの人たちの手伝いで、病院でクリスマスイベントをするんだけど、その手伝い」

黒い海から吹く灰色の風に髪を乱されながら、折口さんがあたしに向かって言う。

「なんで、そんなの手伝わなきゃいけないんですか？」

人と関わって、また人を傷つけるような事、あたしはしたくない。そう思い、断ろうと思った。

「いや、無理にとは言わないよ。ただ、あなたにも味わってほしいの。そして、味を占めて欲しい」

「味……？」

折口さんの髪が、風に吹かれて口に入る。折口さんはその髪の毛を右手で引き出しながら、左手を握り拳にしてあたしの前に示して見せた。

「自分の手で、人に笑顔になってもらう喜び……その快樂を加奈子ちゃんにも知って欲しいの」

少し妖艶な、メタリックバイオレッドの声だった。マルコシアスがあたしに契約を持ちかけているのだ。ボランティア活動を通じて、人が笑顔になる。人の笑顔が、笑顔を作っているという実感が、自分に喜びを与える。他人を巻き込んだ大なる自慰の快樂に堕ちると、悪魔は言っているのだ。風の中で悪魔が笑う。その笑顔は、まるで聖母子像のマリアだった。

もう、自分に笑顔を作ることなんてできない。自分が笑うことすらままならないのに、そんなあたしが、人のためになることなんてできない。もうこれ以上、傷つけないし、傷つきたくもない。やめてくれ。あたしは心の中で叫んだ。しかし、悪魔はあたしの認識を超えたところで、既にあたしを掌握しているようだ。あたしの手は恐る恐る折口さんの手を取っていた。海風に吹かれて冷え切った手に、あたしは自分の掌を被せる。悪魔に握られた心臓が、どきどきと踊る。

あなたとなら、あるいは……。そんな手垢まみれの幼稚な希望が、血液に溶けていく。聖母の面を被った悪魔は、瑞々しい果実の様に濡れた瞳であたしを見つめた。

「加奈子ちゃんがどうしたら笑顔になれるか、私にはわからない。嫌な記憶はどうして消せないし、過去を変えることはできない。でも、それでも、ほんのちょっとでもあなたに笑って欲しいの。みんなの笑顔を見て、その笑顔に少なからず加奈子ちゃん自身が貢献できたって、思えたら、なんか素敵だなんて思ったの」

折口さんが、あたしの手を強く引いた。さっきの急ブレーキ時の慣性運動と同じように、あたしの体が前方に投げ出される。投げ出された体を、折口さんが受け止めた。腕を胴に巻き付け、耳元に口が付けられる。ふっと、花の匂いを感じる。険しい山に咲く、野生の白い花の芳香が、鼻腔に溶ける。

「あなたが笑顔になれる方法を、私は見つけたい。協力して」

どうせ捨てるなら、その命よこせ。娘の姿をしたマルコシアスが、あたしに囁いた。生

温い息が、風に交じって耳にかかる。あたしの顔が真っ赤になる。鼓動が通常の三倍の速度で脈打つ。

とても熱い。もう、わけわかんないよ。頭の中はぐちゃぐちゃで、全ての色を混ぜたグレーに染まった。(終)

#### 解説

・テルミット.....金属酸化物とアルミニウムの粉末を混ぜたものに火をつけると、高熱を発生しながら酸化しやすいアルミニウムに酸素が移り、純粋な金属を得ることができる。これをテルミット反応と言う。工業分野だけでなく、反応時の熱を焼夷弾に用いるなど軍事分野でも利用される。

・アクリロニトリル・ブタジエン・スチレン.....合成樹脂の一種。加工が容易で耐摩耗性に優れ、独特の光沢を持つ。直射日光や有機溶剤などに弱く、環境によっては劣化してしまう。レゴブロックやガンプラの可動関節など玩具の他、文房具など日常のあらゆる製品に利用される。

・マルコシアス.....グリモワール『ゴエティア』の悪魔学における魔神の一柱で、三十五番目に記された地獄の大なる公爵。グリフォンの翼とヘビの尻尾を持つオオカミの姿をしているとされる。ヨハン・ヴァイヤー『悪魔の偽王国』では「獰猛な雌狼」と記述されている。

#### あとがき

一応文芸部の部誌に投稿できるような体裁にはしていますが、ほとんど趣味です。弟とは「一〇〇%趣味で書かれた小説」は、果たして許されるのか議論しました。私は「許す許さない、もっと言えば売れる売れないを判断するのは編集者だ」と答えました。N氏のバケモノの物語はどうなんですかね。

今回の作品は、二〇一八年夏号に、私が文芸部に入って初めて投稿した作品『人間失敗』と、二〇一九年夏号に投稿した作品『哀 Need 憂』の二つの物語をシェアードユニバースにした作品です。二〇一八年製本版に投稿した短編のオマージュも入ってきました。妖怪やら悪魔やらが出てくる話と、SNSで知り合ったメンヘラな女の子たちの話が共通の宇宙を持つことになるなんて、私も驚きました。しかし、一度書いた物語の登場人物たちが、書き終えた後も勝手に動いていて、いつの間にか新しい物語を紡いでいるというのは私にとってはよくあることです。空白の一年分のプロットは既にできています。しかし、書く機会がない。

文字で書いた作品は、自分の中で物語になっている部分に比べると余りにも少ないってことは、あなたにはありますでしょうか。私は常に出力過少状態です。心が何か感じて考えて食べる。そしたら食べた分出さにゃならん。創作は心の排泄ですから、私はずっと便秘ですな。それではまた。

## 雑句

雑句

ひなづきかおり

忘れない  
あなたは僕の憧れだった  
あなたにあいたい  
そう思ったいつの日か  
強く願って空をみる  
どんな時も僕を守ってくれた  
勇気と優しさを教えてくれた  
もう一度考えてあなたを見る  
でも信じることができなかった  
裏切られたし傷ついた  
あなたは約束を破った  
僕はあなたを許さない  
あなたがしたこと  
あなたは僕の憧れだった

逆からも読んでみて。

嗜頑駄無

人間我趣味 我答頑駄無  
戦平和物語 哀戦士活劇  
彼日我出逢 彼日我転生  
感謝頑駄無 我永遠愛君

獣武辺ズ

動物番組や動物動画を良く見ます

ネコは十秒で飽きます  
イヌも十五秒でやめます  
タカと戦うカラスの動画を見ます  
コヨーテを肅清するオオカミの動画を見ます  
寄生蛾と戦う飛べないアシナガバチ  
陸を爆走するジェンツーペンギン  
ウサギを斬首するオコジョ  
好きな四字熟語は熱殺蜂球  
事実は小説より奇なり

あとがき

ページが余ったから遊んでみました。特に意図はない。

## 旅と風

旅と風

全天は完全に一様な蒼色の半球だった。  
大地は完全に一様な白砂の地平だった。

一様。

私はそう表現した。だが、それは必ずしも同一性を示すものではない。

例えば、この天井の蒼天。雲の一つもなく、単一の色が在るだけに見えるかもしれないが、よくよく見れば、雲とは言えないものの、微かに白く霞みがかかった部分があって、面白味に欠ける空に微妙な陰影を作り出している気がしてくる。またまた凝視すれば、明るい空を透けて星々が瞬いている気がしてくる。

例えば、この白の平原。地面から白砂を一つまみ取って、指先で観察してみれば、一粒ごとにそれぞれ形が異なるかもしれない。

だが、そんなことは瑣事だ。

私は旅をしていた。いや、旅という表現は肯綮に中ったものではないかもしれない。というのも旅ならば、何処から来て、何処へ向かうのかということ、つまり始点と終点が大方定められている。が、私にはその孰れもない。ならば、放浪、彷徨、或いは恥ずかしいが迷い子と言った方が適切かもしれないが、どれも痛快に感じられるような、明晰なものはない。だから、この場では旅と表現しておく。

大切なことは、旅という言葉に拘束されたまま理解を試みないことだ。ただそれだけを心に留めておいてほしい。

話を戻して、現在置かれている状況を整理する。

私は蒼天の下、地平の果てまで広がる白砂の平原の中に独り佇立している。

どのようにして此処まで来たのか、全く心当たりはない。振り返ると、自分のものらしい足跡が残されている。障害物のない平野を何故か右往左往して、歩いてきた痕跡だ。

それを辿ろうとして、足を踏み出してみる——が、身体が前に進まなかった。透明な壁が在るかのように、来た道を進むのを阻んだ。

仕方なく、以前は向かっていたらしい方角に歩きだそうとした。が、地から離れた足は途端に行き場を失って、もとの位置に戻った。

何処へ向かえばいい？

私は自問した。足を止めたのは、躊躇だった。

この真っ白な大地では道標となるものが皆無だ。ただ自分が歩いて来たらしい軌跡と、まっさらな地平があるだけだ。

私は歩けない。

歩き方は知っている。だが、歩くことはできない。

此処まで歩いてきたが、歩いてはいなかった。

そう悟った。

風を待とう。

私はただひたすらに待つことにした。風の凪いだ砂原に落ちた凪のように、じっとその時を待った。

どれほどの時間が流れたか。

不意に待ち望んでいた風が、身を倒すほどの颯風が、背後から吹き抜けた。同時に白の砂塵が巻き上がる。私は思わず目を庇った。

風が穏やかになった頃、私は目を開いた。

相も変わらない光景。ふと振り返ると、紆曲した足跡の続きに、よろめいたような痕跡が追加されて、今の場所に立っていた。

また少しだけ進んだ。今回の風には驚いた。

そう思った。何にせよ、この世界では時折風が吹いては、気が付けばこうして進んでいるものだ。だから、いずれは先にいることになる。とはいえ、だ。

私は旅をするのに向いていない。

それは厳然たる事実だ。旅路を楽しむこともないし、辿り着きたい場所もない。そして、旅自体を愛してはいない。

だからといって、旅を止める理由もない。ただ惰性に任せて漂っているだけだ。アドバルーンに自分自身を吊り下げて、風に流されているのが気楽だった。

だから、次の旅路も次の風に――彼に委ねよう。

彼は私の行く先を教えてくれる。私は彼に従っていればいいのだ。

こうして待っていると、彼はやってきた。次の彼は慣れない私をちゃんと導いてくれる彼だった。

彼は言った。

向こうに行こう。楽しそうだ。

私は彼に背中を押されて、その場所に行った。だけど彼と一緒にいても、私は旅を愛することはできなかった。ならば、彼のことは？

彼は彼でしかないが、彼は彼らから生まれたものだ。そして彼は彼でも、彼らはそれぞれ一人だ。彼の向こう側の彼らを私は知らないし、そんなことに興味はない。

ふと彼は言った。

どうだい。楽しいだろう？

私は返答に窮することはなかった。彼らにとって私もまた彼でしかないから、何を言おうとも彼にしかならない。だから――

彼に何を返したか、そんな些末なことは憶えていない。

止め処なく落涙している、そんな気がした。

\*\*\*

最後に一つだけ披歴しよう。

私は最初から旅を愛していないのではない。ある時から、風が吹き始めた時から、私は旅を愛せなくなってしまった。

彼らはずっと旅をしている。だから私は風を知っている。

私が此処に独り立ち止まっているからこそ、そうでないものがわかるのだ。

旅に喩えられるものは多い。例えば――。

あとがき

何の話だと思いましたか

君が為の贈り物

君が為の贈り物

「今はジャックって呼んでくれよ、アーサー？」

状況がまるで理解できず、ドーナツを手に固まる俺。それを見て笑いをこらえるネイサン——否、ジャック。ていうかなんで俺のコードネームを知ってるんだ。

「知り合いか？」

「ああ、ちょっとな」

ボスはネイサンを引き連れて、ドーナツの箱を囲む俺たちのところへ。ランスが咀嚼していたものを飲み込んでから、口を開いた。

「ボス、誰っすか？」

「情報屋ジャック。名前ぐらいは知っているな？」

「えっ」

情報屋のジャックといえば、あのランスですら知っているほど有名な裏社会の情報屋だ。ことギフトの情報に関しては政府よりよっぽど詳しくかつ早いと我々の業界ではよく知られている。情報源、正体、何もかもわからず、何度か捜査局でも情報を買ったことはあるが危険人物としてマークされていた。

理解が及んだ瞬間ひっくり返るかと思った。知らなかったとはいえ俺はそんな人間と今まで同居していたのだ。もし、捜査局の情報を抜かれていたら。もちろん家に仕事を持ち帰ったりはしていないが、何かボロを出した可能性が十分にある。俺はそういう男だ。そこだけは自信を持って言える。冷や汗が背中を伝っていく。バレたらよくてクビ、悪くてクビだ。転職先を探すか？

「やあ皆様、はじめまして。今ご紹介に与った情報屋のジャックだ」

一瞬ネイサンが俺を見た。身構えるが何を言われるわけでもなく視線はそらされる。どうやらバラすつもりはないらしいが、それはそれとして無視されたことが地味にショックだ。

「さて、自己紹介も済んだところだし、まずは対価についての話をしよう」

隣を通り抜けていくネイサンからはマルボロの匂いがした。本心を覆い隠すような微笑みは一瞬たりとも崩れず、纏う空気はビリついている。よく知っているはずのあいつがまるで知らない人間のように見えた。

応接用のソファーに座り込み、ネイサン、もといジャックは不遜な態度で言葉を続ける。

「ああ、そんなに身構えなくていい。簡単なことだ。俺が今受けている依頼にお前たちの協力が欲しいんだ」

「犯罪に手を貸す気はない」

「ふは、まさか！　ただの人探しさ」

ボスの冷ややかな返答を笑い飛ばしたジャックは懐へ手を忍ばせる。取り出されたのは一枚の写真で、黒髪の少年が映っていた。どこか仄暗い目をしているが、それを除けばどこにでもいそうな子どもだ。

「この少年はヒメル。聞き覚えのある名だろう？」

写真が机へ無造作に投げられる。よく観察すると、腕はシーワンに負けず劣らず細く、子どもらしい頬の丸さは見られない。栄養が足りていないのがこの写真一枚でよくわかる。

「彼は天涯孤独の身で、貧民街……いわばこの街の影に住む子どもさ。拐かされたって被害届を出す親族がいないうえ、戸籍すらないものだからお前たちが見つけられるわけがない、ってわけ」

「昨日のあれこれ無駄だったってことっすか……」

しょぼくれるランスはさておき、貧民街の住人は、悲しいことだが、姿を消しても気付かれず、また事件化されないことが多い。人身売買などを目的とした誘拐ならば、貧民街はまさにうってつけの場所であり、歯がゆいことだが捜査官が手の出せない場所でもある。

「何はともあれ俺は彼を探している。お前たちにはこの人探しに助力してもらいたい。ちょいとばかし付き合ってくれさえすれば、この俺からあらゆる情報を得られるとなれば……まあ、答えは決まっているようなものか」

ジャックの値踏みするような視線はボスに向けられる。弧を描く口と裏腹に相変わらずその目は笑っていなかった。

「いいだろう、交渉成立だ」

「ああ、よかった。仕入れた情報が無駄にならずに済んだようだ」

ジャックは口元だけにつこりと笑って手を差し出し、ボスはその手を握る。一見友好的に見える握手だが、気の抜けない空気は無くなっていない。俺たちはドーナツ片手に固唾を飲んで見守っていた。絵面が少し間抜けだが、俺たちはいたって真面目だった。

「さーて、ここから怒涛の情報交換タイムと行こうじゃないか！」

その宣言とともにジャックはソファを立ち、勝手知ったる様子でミーティングスペースに向かう。俺たちもそれを追い、各々が着席したところで、ジャックは再び懐から写真と数枚の書類を取り出した。

「まずは……ご依頼の件だが、まあ、簡単だった。銀髪ってのはこら辺じゃあ目立つからなあ」

机の中心に置かれた写真に写っている不健康そうな男は、間違いなく昨日見たあの白衣の男だった。

「彼の名前はアルベルト・ウィッテン。元プリンシペット大学教授、突然辞職して今はチナの研究所にいるそうだ。専門は、ギフトのエネルギー源について。ちなみにギフトは『ドアトゥードア』、遠隔地のドアとドアをつなげて移動を可能にするってな感じのギフトだ」

ギフトのエネルギー源と聞いて脳裏を掠めるのはシーワンになされていたむごたらしい実験の数々。あの奇跡のようなギフトの源が何か探るものであったなら、説明はつく。納得なんてできるはずもないが。

「そんな奴が少女を追いかけていた、となればまあ何が起こっていたかは想像に難くない」

「こいつはシーワンを実験体にしていて、逃げ出したのを追ってきていた、ってことっすね」

「ご名答。まず間違いないだろう」

概ね昨日の推測通り。一つ引っかかることがあるとすれば、この博士が現在チナのギフト学研究所に籍を置いていることだ。チナがどこまでもつきまってくるのがずっと

気になって仕方がない。

「すみません、シーワンについてのご報告があります」

カノアの言葉に対し、ジャックは背もたれに体を預け、先を譲るようなジャスチャーをする。軽い会釈ののち、カノアはタブレット端末を操作してミーティングルームのスクリーンに何かを映した。肌色の、これは指か？

「まず、彼女の健康状態は至って普通、少々痩せ気味ですが、どこにも異常はありませんでした。それから……こちらをご覧ください」

部屋の照明が落とされてから、右を向いた三角形のボタンが押され、映像が再生される。大写しになった画面の中で、薄桃色の指先にメスが入る。五ミリほどの傷口から赤い血がつぶりと出る——その前に、傷口が跡形もなく消え去った。そこで映像は止まり、部屋が再び明るくなる。

「傷が、消えた……」

「少なくとも外傷はなかったことにできるギフトのようです」

「こりやすごい。超希少ギフトじゃないか」

ヒュウ、と茶化すように口笛を吹いたジャックは、また懐に手を……ってどんだけもの入ってるんだそのコート。さっきから写真だの書類だのわんさか出てくるが、どういう構造だ？

「さて、次は俺の番だな……お前たちはよく知っていると思うがここ最近随分と子どもの失踪事件が増えただろう。実は貧民街でも同時期に急増していてな。で、これがわかる限りの行方不明者リストだ」

取り出されたのは一枚の折りたたまれた紙。ぞんざいに手渡されたそれを見ると、そこには失踪者の名前と地域、それからギフトが羅列されている。ざっと数えて十人ほどの名前が並ぶなかに、ヒメルの名前も書かれていた。

「保護対象になりうるギフトが目につくな……」

「存外多いものさ。無事救出した暁には国の方でぜひ保護してくれ」

「相手の狙いは希少ギフトだった、ってことか？」

「さてね、どうだろう。何はともあれ、俺から出せる情報は以上だ」

ジャックの体重を受け背もたれが軋む。完全に聞き専と化した様子を見るに、どうやら情報屋の仕事はここまでらしい。

机に並べられた情報を見下ろし、頭の中で整理していく。チナ出身であるシーワンと貧民街の子どもであるヒメルはウィッテンによって同じ場所に捕らえられていた。そこには他にも子どもがいたというシーワンの証言を考慮に入れると、貧民街から消えた他の子どもたちもウィッテンの被験体として攫われた可能性は大いにある。被害届が出されている子どもたちも、あるいは。これは思ったよりも事態は深刻かもしれない。

しかしひとりでこんなに大勢の人間を攫うなんてできるものなのだろうか。いや、彼のギフトであれば可能か。ジャックが持ってきたリストと昨日俺たちがまとめた直近三ヶ月の行方不明者リストにおいて、地域にある程度のまとまりが見られるのも気になるところだ。

「トルフォルニア州、アリノア州、ノイエヨーク州……んー、なんかどっかで見たような……」

珍しく考え込んで、ぶつぶつと呟くランス。しばらく失踪者リストとにらめっこしたあと、はっと顔を上げた。

「あ！　そうだ思い出した！　これ、三つともシードウ雑技団の巡業場所っすよ！  
うん、期間もびったり一致してるし！」

「雑技団って……今大通りにいる？　ランス、まさか雑技団が子どもを攫ってるとでも言うつもり？」

「え、や、そんな、断言するつもりは、ないけど……可能性は、あるかなあ、って……」

別にカノアは怒っているわけではないのだが、口調が強いものだからランスの言葉は尻すぼみになっていく。可哀想に。

それはともかく、ここにきてまたチナが出てきた。チナの首都に本拠を置くシードウ雑技団の巡業と、子どもの誘拐が同時期に、同じ場所で行われていた、となれば、ほとんど答えは出たようなものだ。

だが、ウィッテンと雑技団が繋がらない。雑技団が攫い、ウィッテンに引き渡しているとしたら、それはなぜか。確実にこの二つを結びつけるものがあるはずだ。

「ランス、確かか？」

「巡業に関する情報は、確かなはずっす。俺、めっちゃショーを見に行きたくて調べまくってたんで……ほら！」

ランスはタブレット端末をカノアに借り、シードウ雑技団のホームページを出してみせる。確かに、巡業と失踪の一部は、その時期と地域が一致していた。

「これは、限りなくクロに近いな？」

ジャックの言う通りだ。限りなくクロに近い、が、状況証拠しかない以上クロと断言はできない。って、ジャックのやついつの間にコーヒーなんか淹れたんだ？

「しかし、物的証拠がなければこちらから手は打てない」

「となればすることはひとつ、だろう？」

ジャックはからになったカップを弄びながらつまらなそうに言った。まさか飽きてきているのか、お前。

「……次に攫われそうな子に目星をつけて護衛する、っすか」

「要はおとり捜査ですね」

「目星をつけるためにはもっと情報がある……っし、俺、担当した捜査官と家族に話を聞きに行ってくるっす！」

「私も行きます。……ランスだけじゃ心配なので」

勝手に自己完結して飛び出して行こうとした瞬間、カノアの手が首根っこを掴み、ランスはあえなく引きずり戻される。一連の動作に慣れを感じ、なんだか切なくなった。ランスよ、いい加減学んでくれ。

「んじゃ、俺はちょっとばかし調べものに行ってくるかな」

軽いあくびをして、ジャックが席を立つ。一対一で話ができるチャンスだ。逃してなるものか、と腰をあげたところでカノアに呼び止められた。

「アーサー先輩、シーワンが会いたいと言っていました」

「了解、なら俺はシーワンに会ってきます。いいですか？」

「ああ、構わんよ」

オフィスを出る口実を得て、一足先に出て行ったジャックの後を追う。ランスとカノアがジャックを追い越したのを確認してから、マルボロの匂いを纏うあいつを呼び止めた。「おい、ネ……ジャック」

「お前の言いたいことは何となくわかるよ。……素性を知ってて転がり込んだのか、だろ」

背を向けたまま、あいつは俺の言葉を遮るようにそう言った。聞きたいことはそれだけじゃないが、それがもっとも大事なところだ。俺たちの半年は偽物か、本物か。拳を握り、見慣れた背中に言葉を投げる。

「……俺は、お前の素性を知らなかったし、あの約束の通り調べることもしなかった。でも、」

お前は違ったのか。何もかも知っていて、俺を利用したのか。言葉が続かず口をつぐむ。

するとでっかいため息とともにあいつが振り返った。その顔に不自然な笑みはなく、いつものネイサンがそこにいた。

「ああ、俺だってそうさ。昨日お前たちが戦っているところを見るまでは何も知らなかった。本当さ。……頼む、信じてくれ」

最後に絞り出された声は祈るような響きをしていた。たったそれだけで、俺はネイサンの葛藤が容易に想像できてしまった。ひどい偶然だと嘆いたのだろうか。黙っているべきか、打ち明けるべきか、悩んだのだろう。昨日は明かりが消えるのが遅かったのは、吸ったたばこの本数が多かったのは、多分そのせいだ。——なんて、想像できてしまった時点ですでに答えは決まっていた。

「分かった。俺は、……お前と過ごした半年を信じる」

「……そうかい」

呆れたような笑みを浮かべ、ネイサンは踵を返す。しかし二、三步進んだところで足が止まった。

「今日は多分帰れない。飯は自分で何とかしてくれ」

「了解。気をつけて」

「そっちこそ」

あいつもいよいよ母親じみてきたな。

「やあ、シーワン」

受付でシーワンの病室だと聞かされたその部屋は、それなりにいいホテルのような内装をしていた。彼女が研究所を思い出して怯えないように、という配慮なのだろうか。

「こ、にち、わ？」

「ふ、こんにちは」

ぎこちない挨拶はおそらくハックルベリー先生かカノアが教えたのだろう。微笑ましく思いながら、ベッドサイドのイスに座る。シーワンはタブレット端末を大事そうに抱え、大きなベッドの上にちんまりと座っていた。

「それ、どうしたんだ？」

聞いてからシーワンはアロビカ語がわからないことを思い出した。ひとりで来ても会話できないから意味ないじゃん。どうしよう、と頭を悩ませていると、彼女が拙い手つきで端末を操作しはじめる。格闘ののち突き出された端末には翻訳アプリが開かれていた。なるほど、打ってことか。

『これは誰にもらったの？』

『先生にもらいました。これならお話しできるから』

確かに、これなら通訳がいなくても会話が成り立つ。チナ農村部の出身と聞いていたから文字は書けるのかと少し心配していたが、どうやら杞憂だったようだ。

『今日はお礼を言いたくて来てもらいました』

『助けてくれて、ありがとうございます』

画面を見せ、それからシーワンは深々と頭を下げる。顔をあげて、という意味を込めて丸まった背中を撫でると、姿勢を正し、再び何かを打ち込みはじめた。

『ヒメルくんは見つかりましたか』

端末を持つ手が震えている。心配で仕方がないのだろう。凍った湖の色をした目は少しだけ潤んでいて、でも、まっすぐに俺を見ている。

『まだ見つかっていない。でも、彼を知っている人は見つかった』

祈るときのように手を握り、唇を噛む。小さな体がさらに小さく見える。唇が薄く開き何かを呟いたが、俺にはなんて言っているのかわからなかった。

『明日連れてこようか』

気休めにでもなればと思おう聞くと、シーワンは何度も頷いた。それから端末に何かを打ち込もうとして、ふと、手を止める。

「あ、い……あり、がと、う？」

「……うん、どういたしまして」

ゆるく握られた小さな手を取る。子ども特有の高い体温を感じながら、俺はなんとなく、あの時この手を引くことができよかったな、なんて考えていた。

「喜べ諸君、面白い情報を持って来てやったぞ」

ばーん、と勢いよく開け放たれたドア。そこから少し疲れた様子のジャックがゲストパスをぶら下げて、オフィスで朝ごはんを食べる俺たちの下へやって来た。

「ジャックさんも食べるっすか、ホットサンド！」

「ちょうど腹が減ってたんだ、ありがたくいただきます」

ジャックは机の上に並べられたいくつかのホットサンドの中からリンゴとチーズのものを選び、俺とランスが座る二人掛けソファの肘置きに腰掛ける。気を利かせたカナアが持って来たコーヒーを飲みながら、あっという間に完食してしまった。

「さて、腹ごしらえも済んだところで新情報……の前に、アーサー、昨日のリストあるか？」

「貧民街の行方不明者リストか？　今持ってくる」

自分のデスクから貧民街の行方不明者リストと、ついでに昨日の昼に届いた新たな情報を持って戻る。それらを邪魔なものを退けた机の上に置くと、新情報の書類に気づいたジャックがそれを手に取った。

「これは.....」

「俺たちが関知している行方不明者のギフトをリスト化したものだ。問い合わせていたのが昨日の昼に届いたんだ」

ぼらぼらと中を流し見したジャックは一言、なるほどね、とだけ呟いて、にこりと笑った。

「さて、これらのリストを見て気づくことは？」

「昼に届いたリストでは、あるときから傷を癒すギフトを持った被害者が増えており、その時期は雑技団の巡業開始とほぼ一致しています」

「その通りだ。じゃあ、俺が持ってきたリストの方はどうだ？」

「希少ギフトが多いっす、けど.....よくみると、それ以外は全部、治癒系ギフト？」

「ああ、そうだ。ここでこれを見てほしい」

机の上にアロピカ合衆国の地図が広げられる。赤丸がついている地域はシードウ雑技団の巡業場所であり、今回誘拐があった場所だ。

「地域によって発現するギフトに傾向があることはご存知かな？」

「そんなんあるんすか！」

「いいねえランス、いい反応だ」

地図の上に置かれた書類に、各々目を通す。トルフォルニア州、アリノア州、ノイエヨーク州のギフト保有者の数、その比率などが事細かにまとめられていた。こんな情報、どこで手に入れたんだか。

「シードウ雑技団が巡業場所を選んだのはトルフォルニア州コーバイメント、アリノア州ハルフィールド、ノイエヨーク州オールラビ。今お持ちの書類を見ればわかると思うが、これらの地域は全て、治癒系ギフトが特に生まれやすい地域だ」

「まさか、治癒系ギフト保持者の誘拐が目的？　でも、なんで.....」

そもそも雑技団が子どもを攫う理由もわからない。それに、ウィッテンとの関連は？　ヒメルは一体誰に攫われ、どこにいるのだろう。

「俺は、.....仙桃極楽会が裏にいるんじゃないかと睨んでる」

「仙桃極楽会だと.....？」

ジャックの言葉に、今まで黙って成り行きを見守っていたボスが声をあげた。カノアは表情を曇らせ、ランスは何もわからず首をかしげる。

シーワンがつけていたシンシャのピアス、チナ、治癒系ギフト、不死。これらの要素が全て、仙桃極楽会を結節点として繋がっていく。そうか、ずっと引っかかっていたのはこれか。

「せんとー、ごらくかい？　ってなんすか？」

「チナの宗教団体さ。表向きは普通のカルト集団、裏では不老不死の探求と称して人体実験をしているって噂がある」

「うわー、やばい連中っすね！」

実際やばい団体だ。なんたって実態がつかめないのだ。団体の規模も教祖も何もかも不明、だけど確かに存在する。仙桃極楽会はそういう集団だ。チナはすでに仙桃極楽会の傀儡になっているとか、教祖は不死者だとか、そういう噂が絶えない時点でお察しだろう。

「ウィッテンは大学を辞める直前、自分は仙桃極楽会の会員だと同僚に言いふらしていたらしい。そしてこのデータを見るに、雑技団は明らかに治癒系ギフトが生まれやすい土地を狙って巡業をしている。ああ、治癒系ギフトを狙う理由は簡単なことさ。それが不死へ至る最も有力な手がかりだからだ。……もしウィッテンの研究が進み、治癒系ギフトのエネルギー源がわかったら、うまくすると不死薬が作れてしまうかもな？」

ジャックはなぜか楽しそうに言っているが、笑い事じゃない。不死薬を作るのは勝手だが、そのために人の命を、特に守るべき子どもたちの命を犠牲にするのは許されることではない。ウィッテンを見て怯えるシーワンを思い出し、拳を強く握りしめた。

ともかく、仙桃極楽会によってウィッテンと雑技団は繋がった。ならば今押さえるべきは雑技団だ。

「ランス、カノア、昨日の聞き込みはどうだった？」

「あ、そうっす、えっと、」

「親族に話を聞いたところ、どの子どもも行方不明になる前日は雑技団のショーを見にいました」

「そうそう！ だから、まず間違いなく、シードウ雑技団がクロっす！」

「なるほど、ショーを見にきた子どもの中からターゲットを決めているってわけか。だとしたらどうやってギフトの情報を得て……あ」

二つ目のホットサンドに手を伸ばしていたジャックに視線が集まる。

「え、おいおい、疑うのか俺を！ こんなに献身的に情報を持ってきてやったっていうのに！」

「冗談だよ」

「悪質だな……本気で焦ったぞ……」

ギフトの情報に関しては右に出る者がいないと言われる裏社会の情報屋が目の前にいるから、とりあえず疑ってみただけだ。まあ、ジャックの口ぶりからして貧民街の子どもたちを大切に思っているようだし、それを売るようなことをするとはとても思えない。「まあおそらく……俺と同じようなギフトを持った奴が、仙桃極楽会側にいるんだろうな」

「お前と同じ？ そういえば聞いてなかったな、どういうギフトなんだ？」

あー、うーん、とジャックはしばらく逡巡して、ようやく口を開く。

『見透かす瞳』……まあ、平たくいえばギフトを見抜くギフトさ」

「そ、それって、保護対象になりうるギフトですよ？」

「んー、たぶん？」

俺たちのような、ギフトがわからないことが強みになる職において、まさに天敵とも言えるギフト。この半年が奇跡の上に成り立っていたことを痛感する。……俺のギフトも、バレていたんだろうか。それってすごく、まずい気がする。

「そんなギフトを持った人間がいれば、ターゲット決めは容易いか。ならば……ショー

は今晚だ。それまでに次なるターゲットの目星をつけないといけない」

「一番楽で確実なのは、俺がショーの前に入場者のギフトを見る、だな」

「おお、なんかいけそうな感じしてくるっすね！」

「ランス、はしゃがないの。ボス、他の課にも事情を話して協力を要請しますか？」

「ああ、そうしてくれ」

俺が震えている間に話はトントン拍子でまとまっていく。カノアとランスは他の課へ協力要請に行くことになり、ボスはあれこれと根回しをすることになった。本来ならば俺もカノアたちに同行すべきだが、シーワンとの約束があると話したところ、さっさと行けとジャック共々オフィスを追い出された。

病室ではシーワンが昨日と同じようにベッドの上に座り、今日はタブレット端末ではなく、写真集のようなものを読んでいる。声をかけると俺を見てわずかに頬を緩ませ、でも後ろのジャックに気づきびしりと身を固めてしまった。

ベッドサイドに置かれていた端末を操作し、彼がヒメルを知る人だと伝えると、ほ、とあからさまに安心して、恐る恐るジャックの顔色を伺う。俺もつられて見れば、あいつは何か、思いつめたような表情をしていた。

「どうした？」

「……いや、なんでも」

会話に必要だろうと思い端末を渡そうとしたら、チナ語なら話せるから、と手で制される。そのまま二人のチナ語での会話が始まり、俺は蚊帳の外に放り出されてしまった。疎外感がすごい。

いつになく真面目な顔をしたジャックが何かを言うと、シーワンが俯く。何かを決意したような顔でシーワンが頷いて、ジャックは眉を下げて微笑む。何を話しているのかさっぱりわからない俺はそんな様子をただ見ていた。

「なあ、アーサー、シーワンが外に行きたいと言ってるんだが、連れ出しても大丈夫だよな？」

「ん？ あー、うん」

病室にずっといたんじゃ気も滅入るだろうし、気分転換にはちょうどいい。言葉はわからなくともジェスチャーなら伝わるだろうと手で丸を作って見せると、シーワンはぺこりと頭を下げた。そのあとベッドから降りるのに手を貸してやって、また頭を下げられる。そうぺこぺこしなくてもいいのにも思っても、伝えられないのが歯がゆいところだ。

「どこがいいかな、中庭とか？」

「この病院、屋上庭園があるんだろ？ そっちの方がいいんじゃないか」

「ああ、確かに。景色もいいしな」

行き先の算段をつけながらスライド式のドアを開け、シーワンの手はジャックが引いているから、俺が先に廊下に出る。

「あれ、」

違和感を覚えたときにはもう遅い。俺たちが立つその場所はさっきも通った病院の廊下などではなく、広くて天井の高い真っ白な部屋だ。嫌な予感が心臓を掴む。振り返ればシーワンが真っ青な顔で震えていて、すぐにわかった。ここは、シーワンがずっと監禁されていた研究所だ。

「ジャック！」

「はいはいわかってるよ！」

ジャックはひよい、とシーワンを抱えて、背後にある、俺たちがたった今通ったドアから外へ。といっても多分、その先にあるのは病室じゃない。

「なあんだ、逃したのか」

至極つまらなそうな声。広い部屋の中心にあるよくわからない機材の隣に、その声の主は立っていた。

銀髪、三つ編み、痩けた頬、ぎょろつく目。間違いなく、アルベルト・ウィッテンその人だ。シーワンを苦しめた本人であり、今回の事件の重要参考人。つまりなんとしても捕縛..... じゃなかった、同行していただかなければならないってことだ。

「アルベルト・ウィッテン、重要参考人として同行願おうか！」

「まあいっか、あとでゆっくりと捕まえればいいしな、うんうん」

「聞けよ！」

ようやくウィッテンの白目がちな目が俺を捉え、不自然に口角だけが釣り上がった笑みを浮かべる。舐めるような視線が、値踏みされているように感じて気持ちが悪い。

「お前..... ああ、あいつが言っていた宝石化の..... うーん、悪くないな。ヒヒッ、お前も私の研究の糧にしてやるよ」

「ああ？ お断りだクソ野郎！」

奴のギフトは戦闘向きじゃない。ためらいなく踏み込んで、接近しながら握り直した拳をサファイアに変化させる。ウィッテンの顔に拳が当たる寸前、間に何かが割り込んだ。飛び退き距離をとれば、チナの民族衣装を着た男がふたり、ウィッテンを守るように立っている。ひとは刀を持ち、もうひとりが持っているのは..... スリングショットか？

「持たざる者でも少しは役には立つようだな。さあ、そこの男を捕まえろ」

なるほど、このふたりを倒さなければ、ウィッテンを殴ることはできないらしい。

刀を持った方が一気に距離を詰めてくる。迫り来る刃はサファイアの手で弾き、腹部には蹴りを。腹を押さえてよろめく男に追い討ちをかけるのを阻むように、スリングショットの玉が俺めがけて飛んでくる。スリングショットで放たれた鉄の玉ともなると流石に体が砕けかねないので、身をよじってなんとか回避。うっ、生身のところにちよっとかすった。痛い。

スリングショットを持つ男に接近しきれずびゅんびゅんと飛んでくる玉を紙一重で避けている間に、刀の男は態勢を立て直してしまったらしい。ものすごい速さで接近、振り下ろされる刀を今度は受け止め、思い切りサファイアの拳を叩きつける。刀は峰への衝撃には弱い。ばきん、と派手な音とともに刀は折れ、散った破片が男の腕を掠めた。動

揺している際に今度こそ拳をみぞおちに叩き込む。かひゅ、と変な音と息の塊を吐き出し男は沈黙する。

「っし、まずひとり」

倒れこんできた男を床に寝かせる。腕の傷はすでに跡形もなく消え去っていて、首を傾げたのもつかの間、鉄の玉が頭めがけて飛んでくる。とっさにしゃがみこんで避けるが、すぐに次なる玉が打ち出される。

「あつぶねーな！ 死んじゃうだろ！」

転がったり、跳ねたり、しゃがんだり……側から見たらコミカルな動きだろうが、こっちとしては命がかかっているからかなり必死だ。しかしこのままじゃいつまで経ってもウィッテンまでたどり着かない。幸い逃げるような様子はないが、あいつを殴る前に俺の体力が尽きてしまう。仕方ない、こうなったら肉を切らせて骨を断つ、だ。

呼吸を整え、勇気を持って前に踏み出す。なるべく低い姿勢を保ち、狙いを定めさせないように蛇行しつつ接近する。致命傷は避けられても腕やら足やらに玉が掠ってめっちゃ痛い。なんで俺がこんな目に。

スリングショットの男は接近されても顔色を変えず、俺の顔面に狙いを定めゴムを引いていた。一応体勢は低く保ち、玉が放たれる前に足を払う。よろめく男の手を掴んで捻り、スリングショットを手放させてから刀の男と同じようにみぞおちに一発。バラバラと鉄の玉を落としながら床に倒れこんだ。

「案外強いな！」

のんきに拍手をするウィッテンを睨みつける。

「笑ってられるのも今のうちだ」

「は！ 焦るなよ、お前たちのためにとっておきを用意してるんだからさ」

ウィッテンが指を鳴らすと奴の背後の扉が開く。にやにやと不快な笑みを浮かべながら奴は横にずれ、それによってその向こうに立つ人影が見える。

ふらふらとおぼつかない足取りで現れたその人影は思いの外小さかった。黒髪に隠れたその目は硬く閉じられ、細腕は力なく揺れる。とっておきという言葉の意味がわかり、顔をしかめた。

「……最悪だ」

「ここ、みぎです」

「はいよ！」

シーワンを抱きながらチナ語で行われる指示の通り右折する。曲がった先も今までと同じような廊下が続いていて、正直俺はさっきから同じ場所を走っているような気分なのだが、シーワンから見るとそうでもないらしい。

アーサーと別れて扉をくぐってから、俺はずっとこうして廊下を走っている。もちろん、連れ去られた子どもたちを探すためだ。シーワンに聞いてここが研究所であることはわかっている。であればおそらく、子どもたちはここに捕まえられているのだ。だがしかし、残念ながらただ走っているだけではない。

「いたぞ！」

「捕まえろ！」

背後から複数の声がする。考えるまでもなく追っ手だ。さっきからずっとこうやって追いかけて回されていて、うざいったらありやしない。ここでちょっとくらい数を減らしたいものだ。

「こ、ここ！ ひだり、」

「お、っとお！」

通り過ぎそうになったところを慌てて左折する。廊下の突き当たりに、追っ手の集団が見えて急停止。挟み撃ちはまずい、流石に。せめてうまいこと自滅を誘えるようなギフトであれば、と見回すが、ひとりを除いた全員がギフトを持たない人間であるようだ。

「はいはい、そういうことね.....シーワン、耳塞げる？」

「うん、」

シーワンの軽い体を抱き直し、懐から取り出すのは拳銃だ。ギフト社会において銃は役立たずの烙印を押されることが多いが、ギフトによっては凶器となりうる。

ひとりだけギフトを持つ人間に銃口を向ける。致命傷にならない位置を狙い、引き金を引いた。撃たれたそいつは倒れ、あんなに大勢いた追っ手が霧のように消えてゆく。

「面白いギフトだな、お前。人の分身を作るギフトなんてなかなか便利じゃないか」

肩を抑え呻く男を拘束する。流石にこのまま放置しておいたら死んでしまうから、一応止血だけはしてやった。ついでにポケットの中から何やら使えそうなカードキーを拝借する。

「大丈夫、大丈夫、後で回収にきてやるから」

ここまでずっと耳を塞ぎ、ついでに目も瞑っていたシーワンに、もういいよと声をかける。シーワンは追っ手がなくなった廊下を不思議そうに見回した。

「あのひとたちは？」

「俺がちょちょっと片付けた。さ、早く探そう」

「うん」

分身男は廊下に放置し、先を急ぐ。後ろからなんか声が聞こえるけど無視無視。

「ここひだり、で、そのへや！」

突き当たりを左へ。シーワンが指さした一番目の部屋には鍵がかかっている。ここであのカードキーのご登場だ。盗っておいてよかった。

シーワンを下ろしてカードリーダーにキーを通すと、軽い電子音ののちに扉が開いていく。はじめに連れてこられたあの広い部屋のように、壁も床も真っ白い部屋で、壁際には子どもたちが身を寄せ合って震えていた。見知った顔がちらほらと見え、彼らは俺を見てほっと息をつく。

「助けにきた。動けるか？」

子どもたちの状態を確認しつつ一箇所に集める。そこまで衰弱していないところを見ると、引き連れて脱出もできそう。人数は.....何人か足りないか。やはり全員無事に奪還、とはいかない。

「.....ヒメルくんが、いない」

ぼつり、とこぼれた眩きは絶望の色をはらんでいた。立ち竦み、患者衣の裾をぎゅっと

握る。彼女は今、最悪の想像をしてしまっている。名前を呼べば涙の溜まった目がこっちを見た。

「大丈夫だ。もしかしたら他のところにいるのかもしれない。時間ならアーサーが稼いでくれてるからさ、探そう？ な？」

いまにも折れてしまいそうな心をなんとか支えたくて、視線を合わせ、震える手を握った。水面のような目が揺らいで、やがて意志が灯る。

「よし、行こう。シーワン、ほかに子どもがいそうなところ案内してくれ」

頷いたシーワンと子どもたちを連れて部屋を出る。脱出口がわからない今優先すべきは施設の調査だろう。アーサーとの合流はそれが済んでからだ。

追っ手が分身男だけだったところから考えるに、おそらくこの作戦はかなり少人数で行われている。であればこれ以上追っ手が来る可能性は低だろう。

あれこれ考えている間にもシーワンは廊下を迷いなく歩いていく。しばらく歩いていると、右手がガラス窓になっている回廊に出た。何気なく覗くと、下の方にアーサーと例の博士の姿が見える。どうやら最初の部屋の真上にきたようだ。天井の高い部屋だと思ったが、上からガラス越しに観察ができるとは。

アーサーはあの博士ではなく別の誰かと相対しているようだった。一体誰と、と目をこらすと、隣で同じように見ているシーワンが泣きそうな吐息を溢す。

「どうして、」

黒髪、細い腕、いくつもの景色の歪み。遠くても、わかってしまう。明らかに様子はおかしいが、間違いようがなかった。

「ヒメルくん」

涙を残し、シーワンは廊下を駆け出した。俺はそれを止めるなんてことはできなかった。

「う、うう……めっちゃ、痛い……！」

とっておきとって引っ張り出されてきたヒメルは、明らかに正気ではなかった。目を閉じ、ずっとぶつぶつ何かを言っている。それだけならいいのだが、ギフトが発動されているせいで不可視のナイフが全方位に向かって飛び出しているものだから困ってしまった。

不可視のナイフと言っても景色の歪みから場所はわかる。それに宝石化さえすればナイフによって体を切り裂かれることもない。しかし大量のナイフは密集して飛んでくるから避ける隙間なんてありやしないし、宝石化を解きでもしたら多分蜂の巣で即死だ。あと普通にさっきの傷が痛い。

昏倒させるなりなんなりして止めないと、本気で俺が死にかねない。接近して気を失わせるにも、さっきみたいなゴリ押しをしたら死んでしまう。なら、一瞬でも気をそらしてナイフの勢いを削げば、飛び出す隙くらいはできるか？

「ヒ、メル！俺たちは、お前を助けにきたんだ！ ジャックも、……シーワンも、一

緒に！」

衝撃に耐えながら叫ぶと、シーワンという言葉に反応してナイフの勢いが一気に削がれる。ここぞとばかりに一気に距離を詰め、拳を振り下ろ、

「——シーワン、」

固く閉ざされた目から、一筋、涙が落ちる。

『ヒメルくんは、見つかりましたか』

あときの震える手を、泣き出しそうな顔を、思い出す。

だから、ためらった。ためらってしまった。

「こんどは、守るから」

小さな手が眼前に。ぐにやりと景色が歪み、そこで我に返った。すぐさま顔面を宝石化し、直後、顔面にとんでもない衝撃と、少しの痛み。吹っ飛ばされ、受け身を取り損ねて壁にぶつかった。打ちつけた背中では痛いけど、それよりも顔がびりびり痺れて痛い。もしかして顔吹っ飛んだ？ 頭ある？

頬に触れた指に血がついたから、多分頬の部分にヒビが入ってしまったんだろう。よし、砕けてないのなら大丈夫だ。

しかし事態は刻一刻と悪化している。俺とヒメルのギフトを発動してられる時間を比べたら、まず間違いなくヒメルが優勢だ。俺のギフトはとんでもなく燃費が悪く、正直に言ってしまうと限界が近い。だから実は今、若干眠くなっている。

ヒメル、ウィッテン、そして眠気.....敵が多い。どうするべきだ。考えろ。何か手があるはずだ。考えろ。——だめだ、眠くて頭が動かない。

そんなとき、ジャックたちを逃がした扉が勢い良く開く。そこから飛び込んできたのは、シーワンだった。

「ヒメル！」

ぼろぼろ泣きながら、ナイフの弾幕の中を走る。腹を、胸を、足を挟られてもその足を止めることはない。

血の気が引いていく。いくら回復速度が早いからって、大量のナイフを受ければ回復が間に合わずに死んでしまうことだってある。俺はそういうやつをたくさん見てきた！

「だめだ、シーワン！」

言葉は届かない。俺はただ呆然と、死へ飛び込む少女を見ていた。

景色が変わらない廊下を、ただ、走る。走る。走る。喉が痛い。肺が熱い。足がだるい。それでも、走り続ける。手を引かれる彼女はぜいぜいと苦しそうに息をして、それでも、走る。

外を見せたい。自由を知ってほしい。そんな衝動だけが、とうに限界の身体を突き動かしている。

背中に迫る大人の声。追いつかれたら、捕まったら、また。思い出したくもないようなひどい有様の彼女の姿が頭をよぎる。もう一度覚悟を決め直して、後ろを走る彼女の手を強く引いた。

廊下の向こうに、大人たち。挟み撃ちをされた、と立ち止まるおれの背にすがりついた彼女は、不安そうに声をあげる。

「大丈夫」

おれの周りの空気が歪んで、飛び出した見えないナイフが大人たちの腹を、胸を、足を、抉る。

それでもやつらは次から次へとやってきて、彼女を奪おうとする。だからおれは必死にナイフを飛ばす。

「くるな、あっちに行けよ！ シーワンは渡さない！ 二度と傷つけさせない！」

ずっと、ナイフを飛ばし続ける。すべては彼女を守るため。彼女に外を、自由を知ってもらうため。

この研究所にずっと囚われて、ずっとひどい目にあって、ついには逃げることも諦めてしまった。そんな彼女の姿は、貧民街で孤独に生きていた頃の俺と重なった。でも、なにかかもしれないって諦めて、真っ暗闇のなか生きていたおれには救ってくれる人がいた。こんなどうしようもないおれでも助けてくれる人がいたのに、心優しい彼女を助ける人がいないわけがない。

だから、おれが救うって、そう決めた。おれを助けてくれたあの人みたいに、こんどはおれが彼女を救うんだ。

「シーワン、……こんどは、守るから」

無我夢中でナイフを飛ばして、どれくらい時間が経ったんだろう。敵はまだいなくなる。さっき近づいてきたやつを吹っ飛ばしたけど、まだまだ敵はたくさんいる。つらくて、苦しいけど、守るためだ。守らなくちゃ。絶対に。おれが。今度こそ——あれ、なにを？

『ヒメル！』

声がきこえる。きいたことのある声だ。だれだっけ。この声をきくと、すごく苦しくなる。なんでだろう。それになんだかおなかのあたりがあったかい。なにかにだきしめられているみたいだ。

『もういいの、もう戦わなくなっちゃいいんだよ！ 助けに来たの！』

敵はまだいる。だからおれはもっと戦わないと。そうしないと守れない。でも、なにを守っているんだっけ。あれ、おれはなにをしているんだろう。わからない、わからない、わからない——

『——今度是一緒に逃げよう！』

頭の奥で、ガラスが割れる音がした。

「シー、ワン？」

ヒメルが目を開ける。名前を呼ばれたシーワンは声をあげて泣いていて、俺はそんな奇跡みたいな光景を、壁に寄りかかって見ていた。

「は、一体なにが起こっている！ 悪夢は覚めるはずがないのに！」

感動的なシーンに水を差しにきたウィッテンを、最後の力を振り絞ってとっ捕まえる。

これ以上動きたくなくてやつの上に座り込んで拘束の代わりにした。下から文句が聞こえるが気にしない。疲れたから。

そういえばジャックはどこへ行ったと見回していると、突然スピーカーから声が聞こえはじめた。

『や、やめろ、殺さないでくれ!』

『安心しな、殺しはしないさ。まったく、うちのヒメルに悪趣味な夢見せやがって』

ジャックはおそらく放送室のような場所で誰かと話しているようだった。

『なあ、無限の未来を踏みにじって、発展性のない生にしがみつくのは楽しかったか?』

『なにを、』

『ま、聞くまでもないか。仙桃極楽会ってやつはそういうもんだもんな』

眩きののち、銃声が二回。何かを引きずる音がしてしばらくの沈黙、それからマイクを叩く音が響く。

『あー、あー、聞こえてる? 今さっきヒメルに悪夢を見せていたやつはとっちめた。あ、いや、殺してないぞ、気絶させただけだ。で、今からこいつと見つけた子どもたち連れてそっちに合流する。以上!』

ぶつり、とマイクが切られる音。なんだか急に力が抜けた。

シーワンとヒメルは涙が引込んだのか笑いあっていて、俺も怪我はしたけど生きている。まあ、なかなか悪くない結末じゃないか。

「あー、疲れた!」

「よう、元気そうだな」

「ジャック……お前もいつも通りのようで何よりだよ」

病室を抜け出し屋上庭園のベンチでぼんやりしていた俺の下に、ジャックはふらりと現れた。かれこれ四日ぶりの再会だった。

子どもたちの保護、そしてウィッテンらの身柄の引き渡しを済んだ俺は、そのまま捜査局の仮眠室で泥のように眠った。それから何時間か経って目覚めたときにはなぜか病室のベッドの上において、その場で入院を言い渡された。どうやら俺が考えていたよりもずっと重傷だったらしい。

そこからは事情聴取に次ぐ事情聴取で、何回同じことを話したのかはもはや覚えていない。極め付けには退院後に報告書の作成が待ち構えている。できるだけ長く入院していたいと思ったのは初めてだった。

ジャックは俺の隣に座ると、缶の紅茶を投げて寄越す。ありがたく受け取って、それを飲みながら話すのはもちろん、今回の事件の顛末についてだ。

「シーワン、ヒメル、あと希少ギフト持ちの子どもたちは国の保護施設に入るようになった」

「そりゃよかった」

「あと、とっ捕まえた五人はだんまり決め込んで、情報は得られなさそうだ……って、なんだそれ」

「研究所からくすねてきた実験資料」

「は？ それ捜査局に渡したか？」

「渡した渡した。これはそのコピーさ。協力の対価としていただいた」

いつの間に手に入れたのだろう。脱出のときは両手で気絶している男を引きずっていたような気がするが.....もしかして例のコートの中にしまっていたのか？ 一体どれだけ入るのか気になるところだ。

つまらなそうな顔で資料の束をめくっていたジャックが、ふと手を止める。

「どうやら不死薬の試作品があったようだ。名前は『シンシャ』。原材料はシーワンの血液って、あはは、狂ってやがるな！ 一時的にシーワンと同じ治癒能力を得るが、その死亡率はなんと八割！」

「うわ、とんでもない代物だな.....」

ジャックは笑いながら言っているが、笑い事ではない。シーワンから採った大量の血の使い道がこれか。本当に、狂っている。ていうか死亡率八割ってそれはもう確実に死ぬだろ。

しかし謎は解けた。あの刀を持っていた男の傷が一瞬で消えたのは、彼がきっとシンシャに適合した人間だったからだ。ああ、報告書に書くことがどんどん増えていく。辛い。

「そういやシードウ雑技団、ショーが終わったあと煙のように消えたんだってな」

「ああ.....子どもも全員救出できたわけじゃないし、結局仙桃極楽会にはたどり着けなかった。円満解決とは言えないな」

手に力を込めると缶が音を立てて凹む。俺たち以外誰もいない屋上に、風が吹き込んだ。

「でも、シーワンを得た。連中が喉から手が出るほど欲しい、現状最も不死に近い子どもだ。彼女がお前たちの下にいるのなら、いつかは必ず奴らの全てを暴くチャンスが訪れる」

そう言ったジャックは珍しく険しい顔で拳を握っていた。

「もしかして、仙桃極楽会と何か因縁でもあるのか？」

「.....さてね」

ふい、とそっぽを向く。一線を引かれてしまった。なら、とりあえずこの話はまた今度でいい。それよりも、俺たちの中には今話すべきことがある。

「事件の話はここまでだ。次は、俺とお前の話をしよう」

「なんだよ、急に」

「ネイサン、お前、うちを出て行こうとしてるだろ」

「.....なんでそう思った？」

「なんとなくだ」

ネイサンは諦めたようにため息をついて、だとしたらどうする、と遠くを見ながら言った。

「止めるに決まってるだろ」

「なぜ？ お前から情報を盗んでわるい奴に売るかもよ？」

「お前はそんなことしない」

逃げるようにベンチから立ち、庭園の端の柵まで早足で歩いていく。そこで懐から煙草とライターを取り出して一服しはじめた。大方次の言い訳でも探してるんだろう。逃すまいとその後を追う。

「……情報屋ってのはな、身軽でいなきゃいけないわけよ。いざってとき、全部捨てられるようにさ」

紫煙とともに吐き出された言葉は、自分に言い聞かせているようにも聞こえる。このまま建前なんか全部剥ぎ取ってやってもいいけど、俺は優しいから言い訳をくれてやる。「俺を見殺しにするのか」

「……は？」

「お前もよく知ってるだろ、俺の生活能力のなさ。お前が出て行ったら俺は確実に死ぬぞ」

数秒の間。ぶはっ、と豪快に吹き出したネイサンは、腹を抱えて笑う。ひいひい言いながら笑ってる姿なんて初めて見たもので、俺もつい笑ってしまった。

「あー、ふは、そりゃ困るなあ。俺の知らないところで死なれたら寝覚めが悪いわ。……わかったよ、出ていくのはやめる」

滲んだ涙をぬぐい、微笑みを浮かべてネイサンはそう言った。言質はとった。が、まだ足りない。

「じゃあ、キーケースとライター、どっちがいい」

「なんだ、買ってくれるのか？」

「重石だよ。絶対に捨てられないもの持たせてやる」

財布でもいいけど、と付け足すと、ふっと煙を吐いてから煙草を消す。それから携帯灰皿をポケットに突っ込み、屋上庭園の出入り口の方へ歩き出した。しかししばらく進んでぴたっと動きを止め、こちらを振り返る。

「どっちもだ、どっちも！ 高いの買ってくれよ、高給取り」

ネイサンは眉を下げて、でも笑っている。その背に広がる空は、アマゾナイトのような色をしていた。

あとがき

長くてごめんなさい。設定の段階から協力してくれた穴沢さん、そして終盤の展開について相談に乗ってくれた細貝くん、お二人とも本当にありがとうございました！

## ヒトをヨクするコトのハナシ

ヒトをヨクするコトのハナシ

【金目鯛の煮つけ】

注ぎ口と取っ手のついた、蓋の無い金属製の片手鍋のことを雪平鍋と言うらしい。つい最近クイズ番組で知った。生まれてこの方二十余年、初めてこいつの正式名称を知った。大小フライパンやノーマル鍋に次ぐウチの台所のスタメン。焼き魚用アルミホイルの登場により惜しくもベンチ要員となった魚焼き網に対し、地味に不動のレギュラーである奴の名を私は知りもしなかった。キッチン用品クイズ最高難易度は伊達じゃない。

ちょっと雅な名前が判明した雪平鍋に水を入れて火をかける。沸騰したら次は酒をたぽたぽと入れる。ちなみにウチは現在、料理酒代わりに祖父の棚から出てきた月●冠(一升瓶)を使っている。あの凶器にもなりえる褐色の瓶を掲げて鍋に注ぐ様はちょっとシュールだ。だが生憎私も母も下戸。父は同時に発掘したウイスキー二種で手いっぱい。曰く「料理酒もこれも大して変わんないし」とのこと。大学の酒飲み連中がこれを見たらどう思うだろうか、とちよっぴり切なくなる今日この頃。

これもまた沸騰を待ち、砂糖と醤油を入れる。今日のメインディッシュは金目鯛。母はこれらを目分量で入れているため、どれくらい入れればいいのか正確な数値は分からない。が、結構大胆に入れていることは傍目にも分かる。それこそ「こんなに入れたら味濃くない？」ってくらい。だが母は言う。「これでいいのだ」と。余談だが我が故郷の某G県では二日目の揚げ物を砂糖醤油で甘じょっぱく煮るのだという。ウチの家ではコロッケは煮なかったがヒレカツは煮ていた。カツ丼のカツみたいになって美味しいからおススメしておく。あなたの実家ではどうだったのだろうか。良ければ教えてほしい。

最後に臭み消し用の生姜(今回はチューブを使用)をビュッと入れて強火にかける。そして放置。雪平鍋がめっちゃグツグツ言っている。私は毎回思う。「これでいいのか?」と。しかし、これでいいのだ。

「焦げちゃわないか心配なんでしょ。お母さんもね、昔はそうやって弱火でやってたんだ。でもそれだと生臭さが抜けない。煮魚は強火でガーッとしないとダメなんだよ」

母はそれを己が生母——私にとっての祖母から聞いたらしい。母子三代に渡って受け継がれてきた煮魚の極意だ。魚は強火で煮る。はい復唱。魚は、強火で、煮る。

雪平鍋がぐつぐつと音を立てながら、甘じょっぱい芳ばしい香りを放っている。汁が無くなるまで放置。スマホゲームで一、二回周回するくらいの時間はある。

水と酒と醤油と砂糖を強火で煮るだけ。これなら私でもできそう……と、ここまで考えてかぶりを振った。血迷うな。ポテトサラダの悲劇を忘れたか。わたしはぼんやりと、過去に起きた自炊の記憶を思い起こし始めた。

〈とりま何でもぶっこみ野菜炒め〉

ニンジン三分の一本。

キャベツ四分の一玉。

エノキ半分。

シイタケ二個。

もやし半袋。

冷凍ほうれん草一袋。

現在うちの冷蔵庫に入っていた野菜たちだ。先週買いこんだ分の残り。野菜たちを入れている場所が冷凍庫の真上のため、どれもこれも半分凍りかかっている。これと今日スーパーで買って来た豚の小間切れ肉。これだけあれば十分だ。野菜炒めの良いところはとりあえず何でもぶっこんで良いところだと私は思っている。

まずは下拵え。ニンジンは包丁で皮を剥き、短冊切りに。キャベツは一枚一枚剥いて水で洗い、適当な大きさにざく切り。芯と虫食いのところは取り除く。シイタケも水で洗ってからやや薄めに切る。エノキは石突(根っここのところ)を切り離して、縦で半分にする。傘の部分はいいけど、石突に近い部分は良い感じの太さに割く。これが購入初日ならまだいい。しかし一週間冷凍庫真上に放置されたこのエノキはガチガチに凍ってくっついてしまっている。割きながら指が悴みそうだった。

フライパンに油を注ぎ、ニンジン、キノコ類、キャベツの順に炒める。ニンジンは火が通りにくいから一番先に炒める、というのは確か家庭科で教わった。生硬いニンジンを噛み締めるほど残念なことはない。その結果、私が切るニンジンはどんどん薄く小さくなっていった。

溢れそうだったキャベツがフライパン内に収まる程度になってきた段階で大皿に上げる。ニンジンは既に軽く干からびていた。フライパンに少しだけ油を追加して肉を焼き始める。焦げないうちにくっ付いている肉たちを何とか分離させる。大体火が通ったら大皿に取っておいた野菜たちともやしを加える。ほうれん草も入れようか迷ったが、もやしを入れた段階でフライパンがパンパンになったので、やめた。

パラパラチャーハンよろしくフライパンを返しつつ、調味料を揃える。料理酒、塩、胡椒、クレイジー●ルト、そしてめんつゆ。ぶっちゃけ面子は適當だ。その時の気分で増えたり抜けたりする。その結果味が変わるかはよく分からない。一人暮らしの大学生、男飯も真っ青の食えりゃいい精神だ。

まず料理酒をちょろっと入れる。料理酒を入れとけば美味しくなる気がする。じゅわあ、とフライパンの中が派手に音を上げた。水気とアルコールを飛ばすため中火から強火へ。

次にめんつゆを目分量で投下。驚くことに、めんつゆは野菜炒めの味付けとしても使用可能らしい。パッケージにそう書いてあった。便利。

菜箸と手首のスナップで具を混ぜつつ、塩少々、胡椒少々、ク●イジーソルトばらばら。そして随時味見。ご飯があるから多少濃い味でも構わない。むしろ野菜に負けない程度には味がついてもらわないと米が進まない。これでいいかな、と思ったところで冷蔵庫から醤油を取り出し、一回り。気持ちだけは風味付け。めんつゆも実質醤油なので本当に気持ちだけだ。

仕上げに強火でガンガン煮詰めれば完成。汁気が無くなるくらいガンガン強火で……あれ？ 何故汁気が無くならない。もしかして野菜から水分が出ているのでは。

私はそっと火を消した。

一人暮らし飯の基本は大量生産。休みの内にたくさん作って、小分けにして数日間食べ続ける。作り始めたときはフライパンから溢れそうなほどあった具たちは、無事三つのタッパーと二つの小鉢に収まった。小鉢の一つを除いて蓋とラップをする。ある程度冷めたら冷蔵庫へ。

炊いておいたご飯をよそう。ケトルでお湯を沸かし、即席みそ汁でもう一品。何味にしようか。一番コスパが良いのはわかめだが、個人的にはかにが一番好き。間を取ってあおさにした。封を切ってお椀にいれ、乾燥わかめ、お麩、そして先程使わなかった冷凍ほうれん草を入れてお湯を注ぐ。このタイプは余計なもの(ネギとかネギとかネギとか)が入っていない代わりにそもそもの具が少ない。だから自分で追加しているのだと語ったところ、姉に「結構豪華だな」と言われた。このための冷凍ほうれん草でもある。

材料から仕上げまで適当の塊でできたこの野菜炒めは、正直他人様の食卓には出せないと思っている。キャベツはしなしな。ニンジンも青臭さが抜けきってないし、キノコたちは薄く小さく縮んでいる。手際が悪いせいで肉は熱しすぎて硬い。もやしなんて噛みたいにへろへろだ。ならば味付けはというと、めんつゆ特有のスツとしたしょっぱさが目立つ。美味しいとかそう言うのより「めんつゆ味だな」ってなる。決して美味しいわけではないと、自分でも思っている。この野菜炒めとご飯を交互に機械的に食べる。腹が膨れりゃいいとはあながち間違いではない。それくらい酷い出来だ。

それなのに私は。このよれよれの野菜たちが、つゆだくの野菜炒めが。不思議とそう嫌いではないのだ。

#### 〈ポテトサラダの悲劇〉

口に入れた瞬間、ジャク、と音がした。

ジャガイモの包容力は偉大だ。ホクホクしていて柔らかくてお腹にたまる。しかも料

理のバリエーションも豊富。じゃがバター、肉じゃが、カレー、シチュー、マッシュポテトなどなど。主役にしろ脇役にしろ、ジャガイモのある料理はどこか温かみを感じさせる。故に、不意に、無性に、ジャガイモ料理は食べたくなる。

そんなわけで選んだ今回のポテトサラダ。作りたてはホクホクとしていて美味しく、冷蔵庫で一日置いた後はひんやりとして美味しい。特に一日置いた後のやつは焼いたバターロールに挟んで食べるのが滅茶苦茶美味しい。そのためにわざわざ朝食用のバターロールも購入済みだ。

ウチのポテトサラダの具はハムとニンジン、キャベツ、きゅうり。ハムは短冊切りに。ニンジンとキャベツは千切りできゅうりは薄く輪切りにする。あくまで主役はポテト。これらは少量で良い。野菜たちを小さな網にまとめると、軽く塩もみをして準備完了。

これと同時並行で行うのがジャガイモの準備だ。土のついたままのジャガイモを水で念入りに洗う。今回使うジャガイモは三つ。全て洗い終えたら、濡れたままラップに包んで電子レンジへ。

まずは三分。指で押して見るとまだ硬い。ネットで調べたところ、柔らかくなるまで少しずつ加熱していくらしい。

追加で一分。まだ硬い。

プラス一分。熱くて確認も一苦労だ。でもまだ硬い。

さらに一分。電子レンジの中からピーー、といやな音がした。ジャガイモはまだ硬い。

そうしてもう一分。既にネットで調べた加熱時間の倍以上は熱している。本当にこれで良いのだろうか。不安に思いつつ、ジャガイモの硬さを確認する。めっちゃ熱い。少しだけ指が沈んだ。もうこれでいいよね、うん。

悪戦苦闘しながらジャガイモの皮を剥き、賽の目状に切ってボウルへ。用意しておいた野菜とハムも一緒にボウルへ。あとは塩、胡椒、マヨネーズで味を調える。ウチのポテトサラダはマッシュしない派。ジャガイモの原型が結構残っている。ここまで来れば完成だ。

……ったのだが、私は甘かった。何がって、百パーセント、ジャガイモの加熱が。

言い訳をすると、本当に最後に押したところは柔らかかった。そう。そこだけは柔らかくなっていたのだ。後日母に聞いたところ、ジャガイモは三分＋三分＋柔らかくなるまでチン、くらいで全然よかったらしい。実際実家で作ったときはそのくらい容赦なくチンしていたし、柔らかくなったジャガイモは皮が浮くから格段に剥きやすかった。

もう一口食べる。口の中でシャリ、と音がする。硬いジャガイモを食べることがここまで苦行とは知らなんだ。父みたく中濃ソースをかけて食べることも考えたが、やめた。ジャガイモは硬いけど味付けは上手くできたのだ。ハムや野菜は普通に食べられる。実家の味に近いと言ってもいい。しかしそれらはしょせん脇役。ジャガイモの温かみがあってこそ、ハムの甘みやきゅうりのみずみずしさ、ニンジンやキャベツの食感が生きてくるのだ。つまり、これだけ食べる気も起きない。

目の前には小鉢に盛ったポテトサラダ。台所にはボウルいっぱいに残った失敗作。も

う一口食べる。シャリシャリする。

私は諦めて小鉢をボウルの中に戻した。そしてボウルの中身をレジ袋の中に移し、堅く縛って冷凍庫の奥にしまった。ゴミの日と一緒に捨てよう。すまない、ジャガイモ達。

〈とりま何でもぶっこみうどん〉

某G県は関東にありながら蕎麦よりうどんが有名で、焼きまんじゅうやおきりこみ(私の発音では「おっきりっこみ」と言ってしまう)にも代表される。そんな小麦文化の中で育ってきた私だ。苦手なもの以外は食えりゃいい、という私にもうどんに対しては少々こだわりがなくもない。具体的には太すぎず、やや平べったいくらいがベスト。麺質はモチより断然コシ派だ。

え、副題を見返せ? 『とりま何でもぶっこみうどん』のどこがこだわりだって? いやいや君、一度本場のおきりこみを体験したまえ。具材はニンジン、大根、ゴボウ、こんにゃくと根菜を中心に「とりあえず余った野菜の切れ端を片っ端からぶっ込んでみた」感よ。ついでに幅広の麺は小麦がついたまま煮込むから汁にとろみがつく。如何にも適当、大雑把な料理だろう。

そう。おきりこみから始まる某G県のうどんは「とりあえずぶっこんで煮込む」が真骨頂なのだ。

※ここまでの話はかなりデタラメです。信じないでください。

鍋に水と料理酒を入れて火をかける。ここでみりんも入れると汁がほのかに甘くなる気がして、実に私好みだ。沸騰してアルコールを飛ばしたら粒状だしとめんつゆを投入。めんつゆ、ここに来てようやく本業である。本当はめんつゆだけでもうどん汁としては十分なのだろうが、これだけだと何ともすっぱしょっぱくて口寂しい。冷たい麺ならさっぱりしていいけれど、今回は煮込みうどん。煮つけと同じ、甘しょっぱめ路線でいかせてもらう。

汁ができればニンジン、豚バラ肉、シイタケ、キャベツの順で入れる。具材は適当故、高確率でウチの冷蔵庫にある面子だ。ここでも半生で食べる羽目にならないようにしっかり煮込む。そして大体時間が長くなって肉が硬くなるが、まあご愛嬌だ。これまた同時並行で冷凍うどんをチンする。こいつはジャガイモと違って最終的に煮込むので、ほぐれ切らなくても大丈夫。

さて、うどんと言えば全国的にも讃岐風が有名だが、私が好んで買うのは稲庭風の冷凍うどんだ。ああ、君。そんなに身構えないでくれ。大丈夫。讃岐風も稲庭風も普通にスーパーの冷凍麺コーナーで売ってるから。そんな難しい話はしないさ。

あの太くてモチモチとした讃岐うどん(パツとしない人は「はな●るうどん」や「●亀製麺」イメージしてほしい)と比べて、稲庭うどんは麺が細めなのが特徴だ。先に述べた

通り、全国的に有名な、ザ・うどんと言うべきは讃岐風だろう。私も決して嫌いじゃない。嫌いじゃないけど、忘れないでほしい。私の地元には日本三大うどんに入ったり入らなかったりする「水沢うどん」たるものがあるということ！ 麺が少し細くコシの強い水沢うどんは、讃岐うどんよりも稲庭うどんに近い。故に私は、一人でうどんを作るときはわざわざ稲庭風を買ってくるのだ。

なんだ、そんなことか。と言われるかもしれないからもう少し語らせてもらう。私は自分で作るうどんより店で売っているうどんより、実家で食べる水沢うどんが一番好きだ。水沢うどん最大の特徴はつけ麺であること。冬は煮込みのおきりこみ、夏は喉越しの水沢うどん……と、住み分けできそうなものだが、私は温かいうどんが好きなので、ぶっちゃけ一年中温かい汁で水沢うどんを食べている。また、かの有名なひもかわうどんも某G県の郷土料理の一つだ。諸君、うどんはいいぞ。某G県に来たら是非ともうどんかパスタを食べていってくれ。

閑話休題。チンした麺を鍋に入れたら、次に取り出すのはそう、卵だ。このまま割り入れて月見うどん、というのも乙なものだが、それはまた後日。卵を溶いて、菜箸に伝わせるようにして鍋の中へ。蓋をして軽く煮込んだら完成だ。

世の中には鍋をそのまま丼代わりにして食べる人もいるらしいが、私はそんなことはしない。できない。熱いし。ウチにある一番大きな丼に移して、鍋や包丁を洗って。それでもまだまだあつあつ。これは麺が伸びるのが先か、私が完食するのが先か。舌の安全とうどんのコシによる譲れないデッドヒートが火ぶたを切った。全く、猫舌はつらいよ。

あちちと一人で騒ぎながらちゅるんと一口。うん、熱い。そして汁と卵が合わさってまろやか甘じょっぱい。汁に浮いている分は勿論、キャベツにも肉にも卵が被弾している。これらも麺と一緒に口に入れる。美味しい。滑らかな喉越しながらそれ単体で味はないうどん麺。油の甘みが美味しいけど熱し過ぎて硬くなった肉。さっぱりしつつ味そのものが淡泊なキャベツ。良くも悪くもそれだけで味が強い卵。これらの長短併せ持った食材たちが汁を媒介することで、影響し合い、補い合い、高め合って何倍にも美味しくなる。

結論、やはりうどんは偉大であった。

〈蒸したお魚は好きですか？〉

突然だが、私は魚が好きだ。

いや、勿論肉も好きだ。しかし肉と同じくらい魚も好きだ。焼く、煮る、蒸す、刺身、何でもござれ。私が日本人に生まれてよかったと思うことの一つが、日本食における豊かな魚介類料理の数々だ。特に生食。多少のゲテモノはなんのその。この前回転すして、あん肝えんがわ蟹味噌の三連チャンをキメた。この時アルコールの類は一切入れていないにもかかわらず、だ。あまりにも嗜好が親父臭い。兎も角、あれを食べない食文化は絶対に舌が損してる。

新潟のスーパーを見て驚いたことは二つ。実家がお隣の海なし県のスーパーと比べて、

酒と魚介類のコーナーが広い。特に魚介類はあちらじゃお目に掛かれないような代物までである。ハタハタとかがそのままパックで売っているのを見た時は大層驚いた。しかも安い。そんなわけで、私は比較的よく魚を買う。余談だが、その分新潟のスーパーは冷凍パスタが少ない。

一番買う頻度が高いのは鮭。これは焼くだけでご飯のおかずになる優れたもの。西京漬けや味噌漬け等バリエーションに富む点もポイントが高い。ムニエルも好きだけど、簡単な割に手間がかかるから暇とやる気がないとやらない。

まだらはいつ見ても安いところが良い。焼いてよし、蒸してよし、煮てよし。オールマイティーなのも魅力的だ。しかし調理方法によっては薄味になりがちだから、ご飯との相性は他の魚に一步譲る。

冬場はたまにぶりを買う。しかしこれは焼いたりせず、もっばらぶり大根行きだ。寒いと大根のぬくもりが恋しくなる。しかも大量生産できるから、一度作ったら一週間くらいぶり大根を食べ続ける。一度同じ手法で鮭大根というものを作ったことがあるのだが、あれはあれで悪くなかった。しかしあの濃い味付けと染みた大根には身が柔らかく脂の乗ったぶりの方が合っていると思った。

刺身はコスパが高いから滅多に手を出さない。が、稀に、半年に一回くらいは誘惑に負けて夕飯のおかずになる。選ぶのはまぐろ、ぶり、サーモンの中から食べたい奴、もしくは一番安い奴だ。半分は買ったその日のうちに普通に食べる。残り半分は醤油と料理酒とみりんで漬ける。この漬けがまた美味しい。

そんな中、とある画期的な代物のお陰で格段に楽になった料理がある。それはホイル焼きだ。魚と付け合わせをホイルで包んで焼くだけ。手軽さの割にちゃんとした料理でず感もある。私が高校の調理実習作り方を学んだ一品だ。「大学行って彼氏が来た時とかこれ出しとけば料理が出来る女っぽく見えるよ」とは還暦間近だった家庭科の先生の言葉だ。ともかく、ただでさえ楽な料理が文明の利器によってさらに楽に進化したのだ。その作り方を今から伝授していきたい。

まずは鮭を一切れ用意する。ここで注意すべきは生鮭を用意することだ。塩鮭は生臭くなるらしい。これに少し酒をかけて塩を両面にパツパと振る。このまま五～十分置くことで臭みと水分を抜くらしい。置いた鮭をキッチンペーパーでふき取って両面に塩、胡椒で味付け。ここまでは参考にしたホイル焼きのレシピ通り。

付け合わせはニンジンとしめじ、あとほうれん草。ニンジンは薄くスライスして、しめじはバラす。ほうれん草は冷凍を使うから割愛。レシピでは玉ねぎもスライスするのだが、入れない。何故なら私は玉ねぎが嫌いだから。アレルギーという訳ではないけど、無理に食べたら最悪吐く。

具材が揃ったところで、いよいよ件の文明の利器の登場だ。蒸気口のある蓋。半透明とオレンジの二重の入れ物。オレンジ側、つまり内側の底部分は網目状になっている。これに野菜を入れてレンジでチンすると簡単に温野菜が作れる、通称蒸し器だ。これは野菜が不足しがちな一人暮らしの食生活を危惧した両親が私に買い与えてくれたものだ。これにキャベツだのもやしだのをに入れてチンしてポン酢をかけるだけでそこそこ美味しい

のだが、ここで私は悪魔的発想に至ったのだ。

ここに魚をぶち込めば、簡単に蒸したお魚が作れるのでは？

オレンジの網目状の容器にスライスしたニンジン、鮭、シメジ、ほうれん草の順で盛る。その上からコンソメを振りかける。固形コンソメを砕いてもいいのだけど、融通が利かないから私は粒状のものを愛用している。さらにバターを少々……と、言いたいところだが、ウチにそんな高級なものは無いのでマーガリンで代用。蓋をして電子レンジで500w 三分。ああ、レンジから良い匂いが漂ってきた。

蓋を開け、ムワッと上がる湯気と共に姿を現した鮭に醤油を垂らす。鮭にはストレートに醤油がおススメ。それは焼こうが蒸そうが変わらない。この辺の調味料は他にもアレンジのしようはあると思うので、自分で調べて新境地を開拓してくれ。

ここで私的に必須なのが白いご飯だ。鮭、醤油、そして白米。これこそが日本人のDNAに刻み込まれた究極の組み合わせ。味付けのコンソメとマーガリンで和洋折衷。いつもよりちょっとこってりとした鮭を、そのまま食べるもよし。ご飯や付け合わせの野菜たちと中和しつつ食べるもよし。何かと何かを一緒に食べることを口内料理、と言うらしい。混ぜるのではなく、元々がセット扱いなのでもなく、独立した何かを同時に食べ、咀嚼しながら味を整え吟味するという。これは一品一品順番に食べずに、沢山の料理を一度に出される日本食ならではの食べ方だ。食文化一つとっても、日本人に生まれてきた幸運に感動を禁じ得ない。

私は勿論、皮まで美味しくいただきました。

#### 〈ホットケーキ・レポート〉

卵は便利で美味しい反面、一パック六個を二週間で食べなければならないのが悩みどころだ。野菜炒めに混ぜる、うどんにトッピング、卵のスープを作る、もしくは単に卵かけごはん。卵は優秀だから消費できなくはない。しかし私は休日にドカッと作って一週間食べ続けるスタイル。しかも作るのは基本夕飯のみ。二週間の間にそもそも料理をするタイミングが二回程しかないのだ。これで卵一パック消費は地味にキツイ。

しかしまあ、何事にも例外抜け道裏技攻略法は存在するのもで。こんな時によく作るのがホットケーキだ。余談だがこの私、朝はパン派。ついでに朝イチでケーキをイけるくらいの甘党。つまり今回は私にしては少タイレギュラーな、朝食のお話ということだ。

用意するのは普通のホットケーキミックス。裏面の作り方を見てみると、卵さえあれば牛乳が無くとも水で代用できるらしい。牛乳も一人暮らしでは消費期限内に消費しきれないことがあるのであまり頻繁には買わない。しかし、流石に水は味気ないのではないだろうか。正直あまり気は進まない。素直に牛乳を用意しましょう……と、言いた

いところだが、少々待ってほしい。毎度おなじみ雑談の時間だ。

このホットケーキだが、ネットではよくインスタ映えするパンケーキの如くふわふわモチモチになるには何をすればいいか、みたいなレシピを見かけたことがある人も多いだろう。炭酸水を加える、マヨネーズを加える、炊飯器で炊く、あたりは私も知っているが、探せばもっといっぱい出てくることは想像に難くない。先に言っておくと、炊飯器は時と場合を選んだ方がよい。ボタンを押すだけで炊飯器が勝手にやってくれるため格段に手間がかからないし『●りとぐら』みたいなホットケーキができることも感動的だが、如何せん完成品がデカイ。何日かで分けて食べることを覚悟するか、もしくは複数人で食べることを前提に作ることをお勧めする。

さて、そんな中で私が最もふわふわモチモチになると思っているのが、牛乳の代わりにヨーグルトを入れることだ。原理はよく分からないが、アレはヤバい。ヤバいから紹介する。はい、現場の台所にお返しします。

こちら台所。私的ふわふわモチモチホットケーキ作りを再開します。作り方は至って簡単。大体 100 グラムくらいのヨーグルトを一パック用意します。これを牛乳の代わりに入れます。以上です。

フライパンに火をかけて熱する。適度に火を消し、濡れた布巾に置いて冷やす。こうすれば上手く焼けるとホットケーキミックスの袋の裏に書いてある。どういう理屈かはわからない。そして軽く油を引く。油は必須ではないが、焦げてくっ付くのが嫌なので、まあ一応、保険だ。

ホットケーキをふわふわに焼くコツは生地を混ぜ過ぎないことらしい。確かに混ぜすぎると生地が滑らかになって、横に広がりやすくなってしまうのだろう。しかしヨーグルト入り生地は元々がもったりしている。適度に混ぜるのを止めて、おたまで掬った一枚分、高めの位置からフライパンに落とす。とき、と粘性の塊が鉄板の上に着地した。あまり横に広がることなく膨らんでいくことこそふわふわモチモチたる所以だ。おたまの柄をフライパンにガンガンと打ち付けて、おたまにくっ付いてしまった分の生地も落とす。貧乏性とか言わないで。

いつもより厚ぼったい生地にフツフツと穴ができてきた。これが出てきたらひっくり返す合図だ。フライ返しでひっくり返す。きつね色の表面が甘く匂う。これをもう片面でほら、完成。残りの生地の残量を確認。小さめになってしまうけど、あと四枚は焼けそう。

前述の通り、このホットケーキは朝食用に作られたものだ。とはいえ朝から五枚も食べるわけではない。生憎朝は小食で、一枚、精々が二枚だ。ならば何故五枚も作ったのか？理由は簡単。一枚を当日の朝食として、残り四枚は明日明後日のご飯用にとっておくため。ちなみに保存方法は冷凍だ。焼けたホットケーキを一枚ずつラップに包んで冷

凍庫へ。食べる時に電子レンジで温めればいい。

ここでもちょっとだけこだわっていることがある。冷凍したホットケーキは500wで一分も温めればホカホカになるのだが、私はあえて四十秒～五十秒くらいで止める。当然中心部分はまだ冷たい。これをオーブントースターで再度温めるのだ。こうすることで、レンジでチンするだけではふわふわというよりふにゃふにゃなホットケーキの表面がカリッと焼ける。まるでフライパンで焼いた直後のように。温度と時間はざっくりと焦げない程度。ただ強めでトースターにかける場合は焦げやすいので目を離さないように。

最後はマーガリンとケーキシロップ。人によってはジャムとかはちみつとかバターのみとか色々バリエーションがあると思うけど、私はもっぱらこのコンビだ。ホットケーキに満遍なくマーガリンを塗って、箸で食べやすい大きさに分ける。別にナイフとかフォークとか使いませんよ。店じゃあるまいし。食べやすく何等分かにされたピースにシロップをたっぷりかければ完璧だ。

作り置きであるが故に大体いつも決まったものを食べる夕飯とは違い、朝の品揃えはかなりまばらだ。飲み物一つとっても、牛乳の時もあればお茶の時もある。野菜ジュースもよく飲むし、冬はコーヒーやカップスープも参戦する。そもそもやれ寝坊した、やれ食欲がないと、何かにつけて朝食を抜くことも珍しくない。昼まで寝ていて朝食兼昼食、というパターンも多い。一日の計は朝にあり、ということわざに正面から喧嘩を売らないいい加減ぶりだ。

本当にどうしても食べられない時もある。それでも朝からカロリーを摂取すれば体も頭も格段に良く動く。それが美味しい物であれば尚更。故に私はホットケーキにヨーグルトを使うし、シロップも惜しみなくかける。甘いものに叩き起こされるのも悪くない。

#### <トマト煮チャレンジ>

この日手に取ったのはトマト缶。この類の料理は好きだけどなかなか上手くいかないのだ。少し躊躇した挙句、まあどうせ食えないことはないし、と持ち前の食えりゃいい精神が発動。ここ一週間のメインディッシュが決まった瞬間だった。

ニンジン、キャベツ、しめじ。ここまではよくあるパターンだが、肉は鶏むね肉を使用。やはりトマト煮には鶏肉の方が良いのかな、という漠然とした想像の結果だ。あと鶏むね肉は安くてデカイ。本当はここに玉ねぎを入れるのが鉄板なのだろうが、入れない。何故なら私は玉ねぎが嫌いだから。私が信念を曲げて玉ねぎを入れるのはシチューを作るときだけだ。

基本的には野菜炒めと同じ要領。火の通りにくい物から炒めて、火が通ったらトマト缶の出番。トマトペーストを投入して炒める。こうして文字に起こすと凄く手軽な料理に見えるかもしれないが、実際は切ったり洗ったりとかなり手間がかかる。不器用な私がやると尚更。具体的には野菜炒めの章の下拵えを見返してほしい。

今回の味付けの主役はコンソメ。コンソメ入れれば何でも味が整うってばっちゃんが言ってた。いつ面の塩、胡椒、クレイジーソ●トで手助け。ネットで調べるとやれ牛乳やらやれヨーグルトやら入れるといいと見たことあるけど、そんなもの常備していません。後日後日。

さて、今回は随分適当な文章だったと感じたことだろう。正直トマト煮に関して作り方とかどうでもいいのだ。どうせ上手く作れたことないし。と、言うより、私がトマト煮に関して書きたかったことはこの後なのだ。まあ、本当にちっぽけでどうでもいいことだけど、人間そういうちっぽけなことにこだわって、案外得意になったりするものだろう？

完成したトマト煮は、うん、いつも通り。別に食えなかない。トマトのかかった肉食ってるなって印象。つまり野菜炒めのとくとそう変わらない。ここでおかずと米を交互に機械的に食していくのがいつもの野菜炒めだ。しかしこの日は違う。たかがトマト煮、されどトマト煮。この時だけできる、小さな小さなひと工夫が待っている。

トマト煮は、残すは肉も野菜も少々。それより具と一緒に食べきれなかったトマトペーストがたくさん残っている。ここで私は肉を箸でほぐす。いや、肉は元々塊だから、小さくする、ちぎる、バラす、と言った方が正しいかもしれない。次にそのトマト煮の残骸の入っているタッパーの中に、少しだけ残しておいたご飯をいれて混ぜる。トマト混ぜご飯に粉チーズを振りかけて蓋をして一分程レンジでチン。たったこれだけで簡易型トマトリゾットの出来上がりだ。

これがまた美味い……か、どうかはよく分からないけど、私はこれが結構好きだった。具材だけ食べると残るトマトソースがいつも気になっていたのだ。せっかく肉や野菜の旨味が加わっているのもったいない。しかしこれ単体で食べるのは流石に遠慮したい。ならばとただご飯にかけるだけでは猫まんまみたいで物足りない。そこで登場したのがウチの冷蔵庫に常備してある粉チーズだ。トマトとチーズは当然合う。何より温めることでチーズが少し溶けて、味変だけでなく舌触りも変わる。こういう些細なことで嬉しくなれるのなら、貧乏舌も悪い物じゃないと思うのだ。

#### 【今日の晩ご飯】

ほろり、と甘さとしょっぱさと身の旨味が舌の上でほどける程に柔らかい。母が作った金目鯛の煮つけは今日も美味だ。自分一人じゃこうはいかない。もっとも、主婦歴三十年近い母とここ三年で自炊し始めた私なんて、比べるのもおこがましいのだけど。

今日の晩御飯は煮つけとトマト、たらことたくあんが少々、それと白いご飯だ。私の食べ盛りは過ぎたし、母も糖質オフダイエットとかで量をセーブしている。質素だが十

分な夕飯だ。

煮つけの最後の一口。しっかりと味の染みた魚は実にご飯が進む。しかしこれで米を食べきってはいけない。たくあんを一枚齧って米をかき込む。これも美味しい。そして最後にたらこ。残ったご飯と念入りにかき混ぜてパクリ。ああ、どうしてこんなにも美味しい。

無言で熱心にたらこご飯をかき混ぜる私に母が嫌そうに顔を顰める。何でもかんでもかき混ぜる祖母の食べ方を思い出すらしい。別に私は何でもかき混ぜるわけではないのだが。カレーだってぐちゃぐちゃにするのは卵を落としたときだけなのに。

そして母の無言の催促に負け、トマトを一口に入れる。トマトペーストやトマト味は好きだが、トマトそのものは苦手な部類に入る。どうもぬめっとしているのかざらっとしているのか分からないあの食感が好きになれない。玉ねぎと違って食べられないほどではないので母は私がトマトを好きじゃないことに気付いていない可能性がある。嫌いなもの以外は大体好きな私だが、食べられるけどそんなに好きではないものは存在する。キウイとか。コーンとか。グリーンピースとか。

母の箸が白米へと延びる。今日ご飯を炊いたのは私だ。前に「無洗米は普通に炊くと固くなりやすい」と愚痴っていた母を思い出し、気持ち大目に水を入れてみたのだ。目を皿のようにして、母が言っていた通り微妙に目盛りが上回るくらいを狙って。こんなに目盛りを注視したのはメスシリンダー以来だった。

たらこご飯を咀嚼する。私は多少米が硬かろうが柔らかかろうが気にしない。が、意識した分いつもより柔らかくなっている気はする。さあ母は気付くか。別に気付かなくてもいいけど、こういうちょっとした工夫こそ見てもらいたい、知ってほしいと考えるのは人の、いや私の性だと思う。

テレビをニュースから旅番組に変えながら、母は仏頂面でお茶を一口含み、たらこご飯の至福に浸かる私に言った。

「今日のご飯さ、ちょっとべちゃっとしてない？」

いや、どうしろっちゅーねん。

## エーデルワイスの乾燥花

エーデルワイスの乾燥花

(これは前作『風に吹かれて』の続編である)

文章に対する文体のようなもの、とでも言えばいいのだろうか、あるいは語りに対する語り口、うたに対する節回しに当たる、そういう何かが、たしかにあの男の生き方には存在した。歩き方に対する足取りとか、詐欺に対するやり口とか、筆記に対する筆致とかいった自分の目で見てみとめられる徴とは異なり、靈感——たとえば第七感界——によってその魅力が漠然と伝わってくる独特のあり方……。

回りくどい言い方をすればこういうことになるわけだけれど、世間一般ではおむね同じ意味で個性という言葉が使われている。ただその言葉はあまりに濫用されたためにむしろ意味を剥奪されてしまい、まるで子どもが親の目を盗んで家中に貼り巡らされた大量のシールのように、ただやみくもにももの表面にくっついている。それはぼくたちには何も教えてくれない。

なぜその男にはシールが貼られていなかったのか。なぜウチノだけ、いたずらな子どもの魔の手から逃れられたのか。それはぼくにもよくわからない。子どもが貼り忘れたのかもしれないし、ウチノの表面がぬるぬるしていたとかそういったことでいつのまにかシールが剥がれてしまったのかもしれない。でもここで重要なのは、そのどこか神話めいた事の運びではなく、意味が剥奪されていない漠然とした徴がウチノにあったということだ。

とにかくぼくはウチノの内にそれを見つけた。見つけて、拾いあげて、ぼくはその事実を記憶の片隅のできるかぎり埃が堆積しない、暗くて涼しい場所にさりげなくしまっておいた。しかしぼくはそのことをすっかり忘れてしまって、長い年月がたってからふと思い出したのだった。そのとき、ぼくは「風に吹かれて」のメロディがどんなものだったか忘れてしまっていたのだった。それを思い出すために、記憶の中を片っ端からひっくり返して探していたのだけれど、苦勞して半分ほどをひっくり返し終わったあたりで、ぼくはある小さな、レコードをしまうには持ってこいのサイズの箱をぶちまけた。たまたまその中にウチノは入っていた。糖衣をまとった真っ白な姿で。

それがおよそ一年前のことだ。それから半年後に、ぼくはその記憶をもとに小説を書き、自分でもその意味がよくわからないというのに人に読ませ、少なからぬ喜びを得た。原稿用紙にして四十枚のものを四日で仕上げたわけだから、相当本気だったのだろう。けれど、当たり前と言えはそうなのだけれど、出来上がったのは大したことのないただの文章だった。確かなのは、そこに描かれていたウチノの姿が紛れもない本物であったということだけだ。

その内容、というか筋がどのようなものであったのか、かんたんに説明する必要がある。極度に抽象すれば、ぼくがウチノにあるものを与えることによって何かを奪う、というほどのものだった。筋の中では、ぼくはつねに確信犯だった。何を確信していたかといえば、それはウチノの強さであり、とどのつまりぼくが思っていたよりも、ウチノは脆い人間であった。

そのような文章が一時でもぼくを満足させたことは、ぼくの内面について考えるうえでの大きな土台となった——とでも言えば、ぼくが十分におのれを顧みたのちふたびこの話題を引っ張りだしてきたのだと思わせることはできるかもしれないけれども、実

を言うとはぼくだっていまだに、あの文章がよくわからないままなのだ。わからなくなってしまった。

話が前後してしまうことを許してもらいたい。ぼくはあの文章を書き上げた直後、もう四年も会っていないウチノにその原稿用紙を送り付けた。あらかじめ伝えておくこともしなかったのも、彼もかなり驚いたのではないかと思う。

手紙も同封した。短いものだが、いちおう礼儀——そんなもの、昔のぼくたちの関係にはなかった——として必要だと思ったからだ。その一か月後に、果たしてウチノから返信が届いた。

以下に、ぼくの手紙とウチノからの返信を載せる。

先に「ぼくだっていまだによくわからない」と書いたが、それはウチノの返信のせいなのかもしれない。

\*

内野浩平君

ぼくのことを覚えているだろうか。思い出せないなら、同封した原稿を読んでほしい。覚えていても、同封した原稿を読んでほしい。原稿の内容はぼくの個人的な話を含んでいるけれど、おおむね君が知っているとおりの話だと思う。

どうしてこんなものを書いてきみに送り付けたかについては読めばわかると思う。高校時代のきみは毎日ガムを食べることに注力していた。仮にきみが毎日ガムを噛んでいる時間をそっくりそのまま工作に費やしたとしたら、高校の三年間できみは十分の一スケールの東京タワーをトイレットペーパーの芯で作れたかもしれない。十分の一スケールの東京タワーをトイレットペーパーの芯で作ったってどうしようもないじゃないかときみは思うかもしれないけれど、ぼくにはきみの行いが同じくらい無駄なものに見えた。少なくとも高校のうちは。

でも、それはたぶん違ったのだろう。きみがいつだか言っていたように、人は窮屈な生き方を自分自身に強いることでしか救われないのかもしれない。この原稿は、ぼくのものその気付きを、そのまま書き記したものになっている。一応ではあるが小説の体を成しているし、脚色は見逃してしまいそうなくらいさりげなく、しかしありえないくらい猥雑に行われているけれど、たとえば東京で起こった出来事は事実には即しているはずだ。

勝手に送り付けておいて、その上こんなことを頼むのもおかしいことだとは承知しているけれど、きみからのなにかしらの反応をぼくは期待している。感想を言えというわけではない。まあ感想を言ってくれる分にはうれしいけれど、ぼくにとって重要なのはどちらかといえばきみがいま何をしているのかということだ。

話は変わるけど、ぼくはいまも実家において、このあいだ妹にレコードプレイヤーをプレゼントしたよ。レコード盤はだいぶ前にプレゼントしていたのだけど、肝心のプレイヤーがなかったんだ。だから、このあいだの誕生日にプレゼントしてやった。妹は飽きずにずっと聞いているよ。

新潟はここごろ快晴がつづいている。

\*

佐伯亨くん

時代錯誤なことをしたね。小説を書いたことではない。どうしてきみが、電話もメールもせず、手紙を書いたのかってことだ。

ぼくにはあの手紙さえも小説の一部に見えた。きみの懇切丁寧な自己批評と自己解説までをも含めて小説のすべてなのかもしれないってね。でも、そうすることで自分の書いた小説のもろさとか突っ込まれたくない部分をごまかしているだけなんじゃないのか、だいたい小説を書いてからべらべら何かをしゃべり出す人間ってのは、そこが不安なんだ。決めつけるような真似はしたくないけど、きみはきみの小説がどういう風に俺に読まれるのか気になって仕方がなかったんだろう。俺が悪意のある読み方をするのではないかと、俺が腹を立てたりはしないかと、あるいは自分の言いたいことがまるで伝わらないんじゃないかと、心配だった。

手紙を読んで、それから小説を読み終えた当初、俺にはなぜきみが小説の読まれ方を気にしているのかよくわからなかった。だってこれは小説だろう？ 歴史書でも伝記でもない。この世で印刷される紙の中で二番目くらいのどうでもいいものじゃないか（一番は紙幣だ）。違うか？

すこし考えたすえに俺は得心がいった。きみの書いた小説はたしかに俺のことを書いている。自分でもびっくりするくらい忠実に俺のことが描写されている。そこはたしかなんだ。だけど、それはすべてきみの目から見た俺の姿にすぎない。当たり前かもしれないけれど、きみはきみの目に見える範囲のことしか描いていなかった。あれは、俺の、あるいは俺にまつわる小説ではない。きみはきみ自身を書くために俺を利用していただけにすぎないのだ。

そう考えると、きみが同封した手紙の意味も見えてきた。きみは自分自身、自分の存在や生き方が誤解されるのを、かなり恐れていた。俺を含めてほとんどの人がそうであるように。

でも、きみだって俺のことをちゃんと理解したわけではない。あの小説は、きみから見た俺の姿をかなり正確に描き出しているけれど、しかしそれでも俺のことを、ガムを食うこと以外に救われることのないありふれた奴と見ているところが多かった。ガムを食うときのルーティンを崩されただけで人生の平衡感覚が失われてしまうほどの脆さをもった人間だと言われて、気分を害さない人はいるのだろうか。いるんだったらいいのだが、俺はそういう人間ではない。俺が、そのときかなり感じやすくなっていたのはたしかだ。その感じやすさを見取って、すなわち脆さと考えたんじゃないだろうか。きみは、俺とレインボータワーを並列に配置して語っていた。ウチノ＝レインボータワーってわけだ。かなり作画的で、小説の技法としてもありがちなことだから、表現技法上の換喩的な配置にすぎないのかもしれないが、ここにおいてきみは間違いをおかしている。きみは、俺の感じやすさとレインボータワーの脆さを同一視してしまったが、両者に共通する性質は壊れやすさ、ただそれだけでしかない。ただ壊れやすいというだけで、あの地震が原因で取り壊された塔と一緒にされちゃあ困ったものだよ。

俺なりにこの感じやすさを換言すれば繊細さということになるかもしれない。自分で言うのもなんだが、俺はなかなかどうして繊細な人間なんだ。

きっときみは思うだろう。繊細さと脆さはいったい何が違うのか？ と。俺にもよくわからないが、そのふたつが異なる性質であることだけはたしかなんだ。確信している。

というわけで、とりあえず俺に対するきみの誤解は指摘した。俺に偽物のガムの包み紙を渡し、使わせたことに関して、きみが罪悪感なりなんなりを覚えているのだとすれば、気にしないでいい。きみに言われるまでもなく、あれが偽物だったとおのずから気付いたんだ。すこしがっかりはしたよ。だけど、高校を卒業してすぐに俺はガムを食わなくなった。あんまり、ね。いまだに一日一回は食っている。かなり普通だろう？ 「ウチノはほとんどの側面で普通の男だった」と言うきみにいわせれば、俺はもう完全に普通の男だ。やったね。

きみの小説についての「反応」はこれでおしまいだ。というかもともと、これといった文句なんてなかったんだよ。人は人をちゃんと理解しないでくせに、自分が誤解されることに関しては敏感になる。俺はきみの自己解説を指摘したけれども、俺だってこういう風に誤解されることを恐れて自己解説を行った。こういうのはお互い様ってことにして常に許し合っていないといけないんだ。

この際だから、きみが小説で描かなかった、あの修学旅行の別の側面を描いてみようと思う。たとえば、俺たちは東京タワーに登る前、スターバックスコーヒーにコーヒーだかココアだか抹茶クリームフラベチーノだかを買いに行ったわけだけど、そのときのことをきみは書いていない。きみは東京タワーの下でずっと待っていたんだから仕方ないけれど、やはりあの場面をきみは知っておくべきだろう。いかにして俺がガムの包み紙を失くしてしまったのか。

そこに至るためには、まず修学旅行の二日目の夜、俺ときみがホテルの中庭で交わした話から始めるべきだろう。

湿気をたっぷり含んだ東京の空気は、俺たちの肌にべったりと張り付いてきて気持ち悪かった。そのくせ気温は同じ時期の新潟よりも低かった。俺はコートを羽織っていたからたいしたことはなかったけれど、きみは上着を何枚か重ねて着ていた。その姿はかなり滑稽味を帯びていたけれど、中庭に居座るには十分だった。

俺たちが何の話をしていたか、覚えているだろうか。きみがいつものように、自分の妹のことを話しはじめたんだ。

「今年の七月に妹が風邪をひいて高熱を出した。体温が四十度を超えるか越えないかのところで、母親は救急車を呼ぶかどうかで迷っていた。119番の11までのところまで行って、あと少しで9を押してしまうところだったんだ。まあ、そんなことにはならなかったんだけど。母親はかなりの心配性で、物事を大袈裟に捉えがちで、それとは対照的に父親は楽観的な性格をしていた。妹の熱がピークに達した日曜日の朝、父親は突然山登りに行ってくると言って、準備を始めたんだ。ぼくも母親も言葉を失った。自分の娘が苦しんでいるというのに、予定にもない山登りに行くと言い出すのは、普通じゃないと思う。ぼくと母親は何度も父親を引き止めたが、行くと言ってきかなかった。たかが風邪に大袈裟になりすぎなんだ、薬と水を飲ませて、ゆっくり寝かせておけば治る、そういつてきかなかった。その意見は、まあ半分くらいは正しかった。だいたい風邪は

そうしていれば治る。だいいち、ぼくが小学生のときに四十度を超える高熱を出したことがあったんだけど、母親も父親も心配なんてしなかったんだ。たぶんぼくが男だったからだろう。あと二人目の子どもは甘やかされがちだからね。そんなわけで、父親はぼくたちを黙らせて山登りに行ったんだ。行き際に妹の枕元で父親は、帰って来る頃にはすっかり良くなっているよ、とささやいた」

「俺も、きみの父親と同じ状況だったら同じことを言うと思うよ」と俺は言った。

「なんて？」

「風邪なんてほっときゃ治るんだよって。でも流石に山登りに行ったりはしないけど。きみの父親は普段から山に登る人なのか？」

「それが、めったに山登りはしないんだ。一年に一回くらいだね。一応登山に必要とされる道具は揃えていて、雪山でない限りいつでもどこへでも赴けるようになっているんだよ」

「でも、わからないね。どうして熱を出している人を放り出して山登りに行けるのか」と俺はきいた。

「ぼくにもわからない。でも、帰ってきた父親にぼくと母親は苦言を呈さなかったんだよ。なんていうか、黙らされてしまった」

「どうして？」

「帰って来るとすぐに、父親はタッパーの中から花を取り出したんだ。そして妹のところへ行って、眠っている妹の枕もとにそっと添えた」

「なんだそれ？ 不謹慎なんじゃないか？」

「不謹慎だとはぼくたちは思わなかったよ。むしろ、なんだろう、娘のためにわざわざその花を取りに行ったんじゃないか、みたいな感じさえたんだ」

「たまたま生えていた花を取ってきただけだろう？」

「うん、それだけのことだよ。だけど、妹が目覚めたとき、枕もとに花があるのを見てすごく喜んだんだ。妹の熱は平熱にまで下がっていたし、元気はいつもの二倍くらいには膨れ上がっていた」

「父親の予言が当たったわけだ」

「風邪は寝てれば治るんだよ」ときみは言った。

「その父親が採ってきたのはどういう花だったんだ？」

「白くて細い花びらが十枚くらいついている花だった。ひとつひとつはそんなに大きくなって、かわいらしくさえあったよ。エーデルワイスによく似ていたけど、あとで調べてみるとエーデルワイスではないことがわかった。エーデルワイスの和名はセイヨウユキソウで、父親が持って帰ってきた花は同じユキソウでもミネウスユキソウというらしい。とはいえ違いなんてよくわからないし、正しい学名で呼ぶことに意味も感じなかったから、あの花はエーデルワイスみたいなものなんだよって妹に教えたんだ」

「そのウスユキソウってのは山にしか生えていないものなのか？」

「高山に自生するらしい。だからエーデルワイスは勇気の象徴でもあるわけで、ドイツの山岳猟兵隊の兵士はエーデルワイスのマークがついた帽子をかぶっていたりするんだ」

きみはまるで自分が妹にエーデルワイスを贈ってやったかのように楽しそうに話していた。

そのとき、近くにいた別のクラスの集団が急にざわつきはじめた。携帯電話を見せ合って何かをまじめくさって話している。きみと俺はしばらくそちらに耳を傾けていたが、やがて話の内容がわかってきた。

ほんの数分前に新潟で中規模の地震が起こった。震度は5弱程度でたいしたものじゃない。地面が割れたり、建物が倒れたり、津波がやってきたりということもなかった。ただたんに大地が一定時間揺れただけだった。すぐに俺たちはたいしたことはないだろうと元の話に戻ったんだ。近くにいた集団もそうだった。実際、地震のせいで失われたものは、知る限りではひとつしかなかった。それは俺もきみも知っての通りだけど。

「それで、そのエーデルワイスはどうなったんだ」と俺はきいた。

「エーデルワイスじゃなくてミネウスユキソウだよ」

「どっちでもいいよ」

「花は花瓶に入れて飾っておいて、数日後には捨てたよ。だけど一本だけは別にして、ひもに結んで妹の部屋の壁にぶら下げておいた。だいたい一週間くらいぶら下げておいたら、ドライフラワーができ上っていた」

きみは俺にその花の写真を見せてくれた。俺は自然の姿そのままにからからに乾いているのを想像していたが、そうでもなく、花はかなり萎れていた。

「妹は瓶を持ってきて、その中にシリカゲルと乾いた土を敷いて、この花を挿したんだ。まるで山から根こそぎ持って帰ってきたみたいだね」

「その写真はあるのか？」

「ないね。撮り忘れてた」

「じゃあ、こんど写真に撮ってみせてくれよ」、俺は言った。結局その写真をきみが見せてくれることはなかったけど。

きみは、流石に寒くなってきたので部屋に戻りたいと言い出した。夜はますます冷えてきて、足元の芝生には夜露が青黒くかがやいていた。俺はきみをなんとか引き止めたが、きみにしてみればその強引さはすこし異常だったろう。きみはそこを指摘して、俺に説明を求めた。

「頼みがあるんだ」と俺は言った。

俺の母方の祖父は、俺が中学にあがるまで上野で楽器店を営んでいた。だから母親は上野で育った根っからの都会っ子で、東京の企業に就職したあと新潟に転勤になり、そこで父親と出会ったというわけだ。祖父は還暦まで店をつづけて、それ以降は知り合いに経営を譲った。それから数年間は細くつづいていたが、不況が来たときにあっさり店を畳んでしまったんだ。それ以来そこに行ったことはない。幼いころに訪れた祖父の店は、アコースティックギターとフォークギターを中心に取り揃えていて、もちろんほかの楽器も置いてあるけれど、フォークソングやカントリーを好む層をメインターゲットとした古き良きギターショップといったかんじだった。まっ白な壁紙と木製のインテリアは、上野の同時代的な街並みの中では時代錯誤のドン・キホーテめいていた。

てきとうな相づちを打ちながら、きみは不思議そうに俺の話を書いていた。本題は次からだ。

翌日は班別の自由行動の日で、俺たちのグループは上野に行ってなにかいろいろと巡ることになっていた。動物園でパンダを見るとか、美術館に行くとか、上野公園をひた

すら歩くとかね。俺は、グループのほかの奴らがパンダの写真を撮ってフォトショップで自分の顔と合成しているあいだに、ひとりで祖父の店があったところに行ってもいいか、ときみにたずねた。

「構わないよ」ときみは即答した。「だけど、ぼくも一緒にいってもいいかな」

「そこまでは頼んでないよ」

「いや、ぼくも行ってみたいんだ。少なくともパンダをフォトショップで加工するよりは楽しそうだ」

「いま何があるのかわからないんだぞ」

しかし、きみと二人で行動した方が何かと言いつつも考えやすかったので、きみも連れていくことにした。

「住所はわかっているんだろ？」ときみはきいた。

「もちろん」

きみが客室に帰った後も、俺は中庭に残って夜の空気に触れていた。中庭の芝生にはまだらにシロツメクサが這っており、三つ葉の密集した中に丸っこい花が数十と頭をもたげている。俺はその中から花を一本むしり取り、自分のポケットに入れた。きみが見せてくれたエーデルワイスの乾燥花のことが、俺は何かときになっていた。

翌日、グループとともに上野まで行ったあと、俺たちは上野動物園の前で別れた。上野公園の噴水広場を抜け、大通りに沿って市街地に入ると町の色合いががらりと変わる。上野公園周辺はなんというか文化的に発達した緑あふれる現代都市といったかんじなんだけど、そこを離れるにつれて、コンクリートとアスファルトに覆われた、どこにでもありそうな街並みが現われる。新潟の駅前だと言われれば信じてしまいそうだった。

注意深く通りを見回しながら歩いていたはずだったのに、気付いたときには目的地を大きく通り過ぎていた。それで仕方なく道を引き返してもう一度探すと、こんどはちゃんと見つかった。見つけた、と言っても、思い描いていたものはそこにはなかったわけだけれど。

祖父の店は個人経営の喫茶店になっていた。看板がかかっていなかったので店名が何だったかはわからなかったけど、雰囲気はなかなか良かった。歩道から店内をのぞきみたとき、俺はその内装にこころを打たれた。幼いころに見た祖父の店のかたちをそのままに、イスとテーブルを配置してあったからだ。壁紙の色、内装の木材の木目までが、ありし日のままだった。なにより俺を驚かしたのは、祖父が持っていた古いレコードプレイヤーがカウンターの隅に置いてあって目の前でレコードを回っていたことだ。

「ここなのか？」ときみはきいた。

「うん。間違いない」

店の周辺は十年前とほとんど変わっていなかった。ひとつあるとすれば、喫茶店の道をはさんだ真向かいにスターバックスコーヒーがあるということだった。

「どうする？」ときみがきいた。「入ってみるか？」

「うん。どうしようかな」

「他の人から見たら近所のただの高校生だし、ばれないだろ」

「でも、なんだか店の中でのむ気にはなれないな」

しばらく突っ立っていると、俺たちが店の前でわだかまっているのを見かねたのか、店員の男が中からドアを押し開いて、

「どうしたの。席空いてるので、よかったらどうぞ」

そう言ってドアを開けたままにしてくれるので俺たちは自然と入っていくほかなかった。でも、正直なところ、俺は中に入りたくなかったんだ。中に入ってしまえば、ある種の懐かしさが俺の中に目覚めるんじゃないかという気がした。

きみに言ったことはないけれど、俺は、懐かしいという感覚がそんなに好きじゃない。それは、俺に、俺が失ったものを、失ったという事実を厳然と叩きつけてくるからだ。人は、自分が何かを得ていると感じられるときどんな状況であれ前向きになれるんだ。だから、俺たちはこの世で印刷される紙の中で一番目にくだらないものと二番目にくだらないものを欲することになる。こんなことを思うのは、俺が子どもだったからだろう。若いうちは、何かを失うことはなかなかない。過去の記憶に懐かしさという糖衣をかぶせなくとも、引き返しようがないという苦しみを受感することはないんだ。ただ、先に言ったように、あのころの俺はかなり感じやすくなっていた。感じやすさにもいろいろあるのだろうけど、そのひとつには懐かしさへの防衛反応ともとれるものがあった。俺はそういう年頃だったんだよ。

店を内側からながめてみると、やはり祖父のころの面影がどこかに残っていて、俺はいまにも踝を返してしまいたかった。俺は、カウンターの上に「テイクアウトも出来」と張り紙がしてあるのに気づいた。溺れる人、藁をもつかむとといったかんじで、俺はテイクアウトにしてさっさと退散することにした。きみはきっとそこでゆっくりしたかったんだろう。

「すいません。やっぱりテイクアウトにします」と俺はドアを開けてくれた店員に言った。「すこし時間が押しているので」

「時間が押してる？」

「俺たち修学旅行で来てるんですよ」

「修学旅行。なるほど。そういうことね」、店員はすべてを察したかのように言ったが、その実面倒な話は聞きたくなっただけだろう。「じゃあ、何します？」

俺はオリジナルブレンドのカフェラテにした。きみが何を頼んだかは知れない。でもききっとココアだったと思う。ある人物によると、きみはよくココアを飲んでいたらしいからね。

数分待ったのち注文が出されて、俺たちはまた上野の路上に出て行った。

「よかったのか？」ときみはきいた。

「まあね」

自分の内面で起こったいざこざを一つひとつ説明するだけの余裕は俺にはなかった。あったとしてもやろうとはしない。

俺たちは上野公園に戻って、そこら辺のベンチに座ってカフェオレをのんだ。平日なのに人通りは休日然として、なかには俺たちのような修学旅行の学生もいた。道々が落ち葉に淀むには初秋はまだ早すぎて、ただ躑躅の植木の辺りには真っ赤な花びらがぼろぼろとこぼれていた。人はその上を歩いて、どこかへ消えていった。

それから俺たちは動物園をみてきたグループの奴らと合流して、上野の森美術館に行ったんだと思う。もしかしたら国立西洋美術館だったかもしれないけど、どっちだっていい。昼には不忍池の南側にある高そうな蕎麦屋に入ってカレーうどんを食べた。あれはすごくおいしかった。夕方ごろにクラスの予定で東京タワーに登らないといけなかったから、俺たちは上野を後にして浜松町に向かう電車に乗った。夕方まではそこで時間をつぶすことになり、俺ときみ以外のグループの奴らは持ってきたパソコンでパンダの写真を加工して遊んでいた。

俺たちのクラスは十八時半に東京タワーの下に集合することになっていた。だいたいこういうときは何人が遅れてやって来るものなのだが、みんな集合時間よりも二、三分はやくやってきた。よほど見るものがなかったのか、あるいはインフラが整い過ぎているのか……。とにかく俺たちは東京タワーに登ることになったが、それはきみが小説に書いたとおりだ。東京タワーの下と上での俺の言動の描き方も、取り立てて非難をさしはさむ余地はない。

その時点で俺は六回もガムを噛み終えていて、あとは十三個目と十四個目のガムを食べてしまえばいいだけだった。「背の低い女の子」としかきみが書かなかった山野茉莉がスターバックスに行ってコーヒーを買って来ようと言い出し、俺もその買い出し要員に選ばれたとき、俺はその日最後のガムを噛もうとしていた。俺は古くなったガムを包み紙に慎重に吐き出し、キシリトールの棒状の袋からガムを二粒取って、包み紙を剥いで、むしゃむしゃ食べ始めた。包み紙は左側のポケットに入れた。

きみが知らないのはこれ以降のことだ。十人の遠征隊は、ドリンクの希望を聞き終えるとスターバックスに向かって歩いていった。スターバックスは東京タワーの敷地から信号を二つ渡ったところであって、さほど遠くない。三分もかからずにわれわれは着いた。周囲はビルが立ち並ぶ完全なビジネスの世界といったところで、スターバックスの店内にはスーツを着た人がほとんどだった。これだけスターバックスが多いとどれがどれかわからなくなっちゃうよ。実のところわからなかったんだ。

スターバックスの中に入って注文をするとすぐに問題が起こった。われわれはクラス三十五人分のドリンクをまとめて注文したのだが、その店長はそんなに多くの注文は受けられない、と言い出した。われわれの注文を処理しているあいだにほかの客を待たせることになるし、それを一度にこなすためには現在のスタッフの数では追いつかない、そう言った。たしかに三十五人分のドリンクを作るには、一人につき一分で作ったとしても三十五分はかかる。カウンターに立っていたスタッフだって、熟練のバリスタと言ったかんじじゃない。アルバイトが、遊ぶ金を算段するために始めましたという雰囲気を感じて隠そうともせずに働いていたんだ。

では、何人分の注文だったら受けてもらえるのだろうか、とわれわれはきいた。そうだなあ、二十、いや、二十五くらいだったら行けますよ、と店長は言った。これは単なる文句だけど、二十五人分の注文が処理できるなら、三十五人分だってできるんじゃないのか？　俺がひとりで浮き上がってくる疑問を押さえていると、山野茉莉は「わかりました。じゃあ、二十五人分だけお願いします」と返事をした。それから俺たちに、残り

十人分は別のスターボックスだかドトールだかを探して注文すればいい、と言った。スターボックスなんて探せばいくらでもあるでしょ、と。

それで、われわれは、スターボックスに残る組と別のスターボックスに向かう組に分かれることになった。もうなんというか、餌に群がる家畜のようにわれわれはスターボックスを求めていたんだ。なんとなく俺は別のスターボックスに向かうことにした。ほかの奴らがかなり寒そうにしていたし、まだすこし東京を観ていたい気がしたからだ。別のスターボックスには山野茉莉も向かうことになり、あとはじゃんけんで負けた二人が加わった。

しかしそこを離れる直前、スターボックスの道を挟んだ向かい側に個人経営の喫茶店があることに俺は気づいた。それで何を思ったのか、俺は「あの喫茶店、たしかテイクアウトをやっていたはずだよ」と言ってしまったんだ。そのとき俺は祖父の楽器店のあとにできたあの喫茶店を思い出していた。だけど同時に、もちろんそれがまったく別の店であることにも気付いていた。上野と浜松町はそんなに遠くないにしてもまったく別の土地だからね。だとしたら、なぜテイクアウトをやっているなどとてきとうなことを言ったのだろうか。個人経営の喫茶店でテイクアウトをやっているのはかなり少ないはずだ。けれど、自分の誤り、というよりも真偽不明の発言を改めることはしなかった。「じゃあ、あそこにしようか」と山野茉莉は言った。「十人分くらいだったら作ってくれるでしょ」

向かいから見たところ、店内は比較的閑散としており、スーツを着た人よりもカジュアルな服装の人が多かった。

俺たちはさっそく道を渡って、店の前のイーゼルにかかったボードを見ると、やはり「テイクアウトやっています」の文字があった。勘が当たったというよりも、ギャンブルに勝ったような気分だった。反対側のスターボックスに向かって俺たちは合図を送った。

山野茉莉が店に入って、十人分の注文をして出てきた。

「作ってくれるって」

「そりゃあよかった」と俺たちは言った。(実際こんな親父くさいものの言い方をする奴はいなかったよ)

「でも、少し時間がかかるかもしれないって」

「そりゃあそうだ」(繰り返すようだけどこんな親父くさいことをいう奴はいなかった。ただの表現だよ。)

俺たちは店の外でドリンクができあがるのを待っていた。市民薄明のうすい闇が俺たちの視界にいくえにも蔽いかぶさって、市井の彩りをにごしはじめる。スターボックスの看板が光りはじめたのがわかった。外灯が点いて、ビルの窓からは室内灯が漏れだした。大きな光が失われて、たくさんの小さな光に照らされる時刻だった。ひとつしかなかった影が複数にわかれる。ほんものの影がひとつあったはずなのに、いくつかの形式的な影のあつまりでしかなくなる。ヘッドライトをつけた車が通り過ぎるたびに、伸びた影が縮み、消え、また伸びた。

「今日のグループ行動はどこに行ったの？」と山野茉莉がきいてきた。

「上野だよ」

「上野で何したの？」

「動物園に行ったりとか。パンダがいたよ」  
「私の班も上野に行ったの。たぶんそっちの班よりすこし遅れてね」  
「へえ」  
「それで、上野動物園に行ったら、内野くんの班に会ったの」  
「へえ」  
「でもそのとき内野くんいなかったでしょ。あのとき何してたの？」  
「佐伯と一緒にカンガルーを見に行って腹の袋の中から子供が出てくるのをずっと待って  
たんだよ」  
「佐伯くと内野くんは二人でどっか行ったって言ってたよ」  
「あいつら……」  
「どこに行ったの？」  
「どこでもないよ。動物園にはいきたくないから上野のあたりをぶらぶらしていただ  
けだ」  
「動物園に行きたくない？」  
「子どものころヒッチコックの鳥を見て、それ以来鳥を見ると怖くて仕方ないんだ」  
もちろんこんなのは嘘だ。山野茉莉もそれを知った上で笑っていた。  
結局俺はてきとうにごまかしておいた。話は俺ときみについてのことに移っていった。  
「内野くと佐伯くんて、かなり仲いいよね」  
「かなり？ 仲がいいのは確かだけど、ふつうの友人関係と変わらないよ」  
「なんだろう。一緒にいて楽しいからとか、気が合うからとかで友だちでいるわけじゃな  
いんじゃないかな」  
「さあ、どうだろうね」、と俺は言った。「べつに俺たちが変わっているとか、そういった  
わけではないんでしょ？」  
「うん。二人ともふつうなの。だけど関係がふつうじゃない」  
「物騒な言い方をするね。まるで俺たちが……」  
「ねえ、二人っていつも何の話をするの？」  
「さあ、昨日見たテレビの話とか」  
「……………」  
「佐伯はよく自分の妹の話をするよ。自分のこと以上に妹のことを知っているみたいに」  
「妹がいるんだ」、意外そうに彼女は言った。「次男っぽいところがあるんだけどね」  
「最近だとエーデルワイスの乾燥花のこととか」  
「ドライフラワーを作ったの？」  
「作ったのはあいつじゃない。妹が熱を出しているあいだに佐伯の父親が山に行ってエー  
デルワイス、いやミネウスユキソウだったかな、それを取ってきたんだ。それで妹の熱  
が治って、妹はミネウスユキソウをドライフラワーにした」  
「へえ、お父さん、優しいのね」  
俺はおかしくてすこし笑った。「佐伯には限りなく関係ないことだよ。家族であることを  
除けばね」  
「他には？」と彼女はきいてきた。彼女がきみの話を求めているのか、きみの妹の話を求  
めているのかよくわからなかった。

彼女が小刻みに震えているのに気づいたのはそのときだった。確かに日の入りとともに気温が下がってきており、コートを着ている俺さえ寒さを感じるくらいだった。彼女は上着に生地が厚いシャツを一枚来ただけで、その上には何も羽織っていない。彼女は両手のひらをすり合わせていたが、その甲のところが粉をかけたように真っ白で、その下に血管が青く透けて見えた。

「寒そうだけど、大丈夫？」と俺はきいた。でも、こんなことをきく奴は疎いね。大丈夫かときいて、大丈夫じゃないと答える奴はなかなかいない。とはいえ、大丈夫かときかれて大丈夫だと答えるほうもなにかと疎いのだけれど。

彼女は大丈夫だと、わかりやすい嘘をついた。そんなわけで、きみは小説に書いていたからわかるだろうけど、俺は彼女にコートを貸した。かなり丈の長いコートで、彼女は背が低かったから、コートの裾を引きずるんじゃないかって心配だったのだけれど、実際に着せてみるとなんとかなった。

彼女はにっこり笑って、あたたかくなった礼を言った。

「ねえ、借りというこんなこと言うのもなんだけど、ポケットの中にもものが多い？」  
「そうかな」

「なんかシロツメクサが入ってるし」、彼女はポケットから、萎れて茎もぼろぼろになったシロツメクサを出して見せた。「どこで採ってきたの？」

俺はすこし赤面した。ポケットの中にお花を入れて持ち歩くななんて小学校以来やったことがなかったからだ。

「ホテルの中庭」、と俺は言った。

「これ、どうするの？」

「うん。どうしようか。特に何も考えてなかったから」

「ほかに、ごみたくさん入ってるわよ」、彼女はポケットの中をまさぐって、しわくちゃになった紙を取り出した。「レシートね。日付は今日で、喫茶・しのバズってところ。カフェラテをテイクアウト」

「おいしかったよ」

「もしかして、動物園に行かずに佐伯さんとぶらぶらしてたのってここなの？」

「通りかかったからちょっと寄っただけだよ。それ以外はずっと上野公園にいた」

「ねえ、これ捨てていいでしょ」、山野茉莉はレシートをさして言った。「ほかにいろいろごみ入ってるけど。だめ？」

「別に構わないよ。というか捨ててもらったほうが助かる」

彼女は近くのコンビニのほうに歩きはじめたが、数歩もいかないうちに俺が呼び止めた。コートの裾が悪趣味なくらい大袈裟にはためいた。「やっぱり俺が行くよ」

「どうして？」

「ここのお代を払うのは山野さんでしょ」

「言われてみれば」

山野茉莉はこちらに戻ってきて、右ポケットから握りこぶしを出し、俺の前に出した。俺が手を出すと、彼女の手からレシートの塊がこぼれ出た。糖衣をまとったトリュフチョコレートに見えなくもなかったけれど、その塊は彼女の手ひらのあたたかさを存分に帯びていた。

俺はそれをコンビニのごみ箱に捨ててきた。喫茶店の前に戻って来たときには、一緒にいたほかの二人は消えていて、山野茉莉が五人分のドリンクを抱えるように持っていた。「二人には先に行ってもらったの」と彼女は言い、そして二人分のドリンクを俺に持たせた。「右手のがココアね。佐伯くんの」

「あいつがココアだってことよく覚えてるよな」

「ココアをたのんだの佐伯くんだけだから。それにいつも学校でココアを飲んでるじゃない。たぶんココア狂いなよ」

「なるほど。それもはじめて知ったよ」と俺は言った。

頭上にそびえたつ東京タワーに向かって俺たちは歩いた。道の向かいのスターバック스에同級生はいなかった。

何気ない沈黙が俺たちのあいだに降りてきて、気まずくさせた。なにを言い出そうにもそれが適切でなくなるような雰囲気は俺は彼女から感じ取っていた。すこしずつではあるが、彼女の足取りが重くなっていくのがわかったのだ。もしくは俺が寒さにやられて早足になっていたこともあるのかもしれない。けれども、彼女の中で、ある種の感情が揺らめいていたことは、その後の彼女のことばから再帰的に明らかだ。しかし、彼女が何をいったのかは、書かないことにする。文芸人ぶったことをいえば、それは山野茉莉のことばであって、俺のことばでも、お前のことばでもない。お前が知る必要はないだろうし、あるいはだいたいの予想はつくだろう。それくらいで十分だ。

あの日の山野茉莉のいくつかの言動は、俺の中にあつた何かを台無しにした。きみのいうところのレインボータワーだ。俺は結局自分自身でガムの包み紙を捨てたわけだし、山野茉莉のことばに多少なりとも傷ついた。いかんせん俺は感じやすくなっていたからね。

でも、こうやって書きながら思い出してみると、この一連の出来事が運命のように思えてきて仕方がなかった。一度だけ人生をやり直せるとしても、少なくともこの日だけは、もう一度、そっくりそのまま繰り返したい。仮にお前がホテルの中庭でエーデルワイスの乾燥花の話をしらずに俺がシロツメクサをポケットに入れなかったとしたら、あるいは俺が祖父の楽器店があつた場所に行かずに喫茶店のレシートも貰わなかったとしたら、こんなことにはならなかった。でも、お前にとってのエーデルワイスの乾燥花も、俺にとっての祖父の楽器店も、目の前になくても存在を実感できる、そういうものなんじゃないだろうか。存在しないことが信じられない存在なんじゃないのか。だとしたら、俺たちは何度修学旅行に行っても、あの一日を繰り返すしかないんだ。

この手紙から、また新しく小説を書いてもらって構わない。きみの書いた小説と合体させてなにかすごいのができあがったら、また送ってくれ。

## 奥付

案山子 2020 年夏号

<https://puboo.jp/book/131210>

著者：新潟大学文芸部著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

感想はこちらのコメントへ <https://puboo.jp/book/131210>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>) 運営会社：デザインエッグ株式会社



---

案山子二〇二〇 夏

---

著 新潟大学文芸部

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---